

官能のプリマ

ヴァージョンⅢ

廃 鉾

アカマル

目次

1. 鉾山の町.....	1
2. 緑化屋.....	14
3. 陶芸屋.....	23
4. 溪谷.....	35
5. 演奏会.....	47
6. 役場.....	53
7. 分校.....	63
8. 通洞坑(1).....	78
9. 事務所.....	88
10. 修太.....	91
11. 通洞坑(2).....	97
12. 助役.....	108
13. 通洞坑(3).....	116
14. 登り窯.....	127
15. 夏祭り.....	137

1 鉾山の町

「観光課の方はいませんか」

静まり返った昼休みの役場に、エネルギッシュな女性の声が響いた。

机の上にうつ伏して、うたた寝をしていた村木が顔を上げてカウンターを見る。黒いダウンジャケットを羽織った若い女が、にこやかに会釈をした。

「はい」と答え、村木は面倒くさそうにカウンターの前に立つ。

「初めまして。今度、町の観光パンフレットを請け負わせていただいた広告会社のMです」と言って、若い女が名刺を差し出す。

「はい、はい、ご苦労さんです」

眠そうな口調で応えた村木は、まだ三十歳になったばかりだった。

活力を失った町の空気が職員にまで伝わるのかと、Mはあきれながら返されるはずの名刺を待った。

「名刺を持っていますのであしからず。僕が担当の村木です」

Mは拍子抜けして、手に持った名刺をカウンターの上に置いた。

職員に名刺を持たせない役場の姿勢が、この町の衰亡振りをうかがわせる。

鉾山で栄えたこの町の人口はかつて三万人を数えた。しかし今、町の人口が四千人にまで減ってしまっていることを、Mは出掛けに図書館で見た町村要覧で知っていた。

「精錬所跡に案内してくれますか」とMは言った。

唐突な申し入れだったが、名刺交換もないありさまでは、すぐ本題に入った方が手取り早いと思われたのだ。

「えっ、今からですか。まだ昼休み中ですよ。それに、車もない」

「もう少しで昼休みも終わります。私の車がありますから、ぜひ案内してください。この町で一番有名な所なのでしょう」

「ちょっと待ってください。課長の許可がなくては、出歩くわけに行きませんよ」

「昼休みだから、勝手に出歩けるのと違いますか」

いつになく強引な女が来たと村木は思った。たかが業者のくせに役場の職員をないがしろにしているときえ思い、剣呑な気分さえなってくる。

「自分勝手すぎますよ。あなたは観光パンフレットを請け負った業者の方なのでしょう。」

いくら役場相手だといっても、うちが依頼主に違いはないのだから、少しはこちらの都合を考えてくれても良いのではないですか」

語尾を呑み込むようにして言い終わるとすぐ、村木は何事もなかったように笑顔を浮かべ、さり気なくMの後ろに視線を移した。

頭越しに素通りした視線が気になり、振り返ったMの目に、自信に溢れた足取りで近付いて来る中年の男が見えた。

「こんにちわ」

村木の大声に視線を移すと、彼は男に最敬礼している。

にこやかな笑顔を浮かべた紺のスーツの男はMにちらっと視線を当て、軽く会釈をしてから村木に呼び掛ける。

「外からのお客さんに喜んでもらえるよう、十分取り計かってくださいよ」

「はい、助役さん」と村木がまた、最敬礼を返す。

去っていく男の背に、Mは慌てて「助役さん」と呼び掛ける。恰幅の良い男が振り返ってMの目を見つめた。

「私が外部の人間だと、なぜ分かったのですか」

「私はこの町の人の顔を、みんな知っています」

「本当ですか、四千人もいるのですよ」

「知っているのです。ところで、あなたは観光に来てくださったのですか」

「いいえ、いわゆる業者の一人です。町の観光パンフレットを作りに来ました」

「それは、ご苦労様です。大事な仕事ですから、よろしく願いします。良いものを作っていたくためなら、何でも便宜を図りますよ」

「初対面の上、早速で申し訳ないのですが、お言葉通り便宜を図ってもらって差し支えないでしょうか」

「もちろん構いません。よろしく願いします」

「ありがとうございます。実は、精錬所に案内して欲しいとお願いしていたところなのですが」

「閉鎖されて久しい施設に行っても仕方ないと思いますが、ぜひにと言うなら案内させていただきますよ」

「えっ、まさか助役さんが」

「いえ、申し訳ないのですが、私は予定が入っているので行けません。村木に案内させま

す。村木君、頼みましたよ」

「はい」

大きな声で村木が答え、助役にまた最敬礼した。急いでカウンターの外に出て、全身でMを案内する素振りを見せる。

あまりに早い態度の豹変振りに、思わず吹き出しそうになったMだったが、素知らぬ顔で村木の後に続いた。

背後から「良いものを作ってくださいよ」と助役の声がかかり、足を止めて振り返ると、明るい窓をバックにした大きな黒い影がさっと右手を振った。

村木は、先ほどまでの疲れ切った態度をがらりと変えた。

背中に注がれる助役の視線を意識して胸を張り、足早に歩く。そんな村木に追いすがるようにしてMは横に並び、階下へと続く階段を下りた。

「今、車を借りてきますから、ロビーでちょっと待っていてください」

玄関の自動ドアの前で立ち止まった村木がMに小声で言った。もはや助役の目に触れる心配がなくなったためか、再び疲れ切ったようなだるい口調に戻っている。

「いえ、先ほど言ったように私の車で結構です」

「そうはいきません。助役命令ですから、立派な車を借りてきますよ」

「申し訳ないけど、私は急いでいるんです。玄関のすぐ前に車があるのですから同乗してください」

立ち止まっている村木を促すように、Mはドアを開けて外へ出て行く。

「本当に強引な方ですね」と言いながら、仕方なく外に出て来た村木は寒風に肩をすくめた。三月になったとはいえ、吹きつける風は肌を刺すように冷たい。

ダウンジャケットのファスナーを上げて先を歩くMが、無造作に赤い車のドアを開けた。途端に村木の顔がこわばる。大きくドアが開いた真っ赤な車に屋根はなかった。

オープンにしたユーノス・ロードスターにいち早く乗り込んだMが、村木を振り返って「どうぞ」と、いたずらっぽく笑う。

肩をすくめたまま寒風に吹かれる村木は、ニットのベストにサンダル履きのままだった。

「ちょっと待ってください。この季節にオープンなんですか。風邪をひきますよ」

「慣れれば、あなたも病みつきになるわ。雨の心配のないこの季節は、オープンが一番です。爽快ですよ」

「そんな、ちょっと待ってくださいよ。何か着てきますから」

大きくくしゃみをした村木は辺りを見回し、たまたまトラックから降り立った作業コートを着た男に駆け寄って行った。

「同級生が来てくれて助かりましたよ」

カーキ色のコートのファスナーを引き上げながら助手席に座った村木は、また大きくくしゃみをした。構わずMはロードスターを発進させる。ひときわ激しく吹きつけた北風が二人の顔をなぶる。フロントガラスで鳴る風が轟々と凄まじい音を立てた。

「次の信号を左。山の方に入って行くんです」

大きくうなずいたMは、黄色に変わりかけた信号に向かってアクセルを踏み込む。タイヤがきしむ音が風の中に響き、一瞬、車体が左側に沈んだ。

「凄い運転ですね」

村木の震える声が風にかき消されていく。

車は家並みの立て込んだ商店街を抜け、細い舗装道路を山の中へと上って行く。しばらく走ると、急に軒を連ねた鉾山住宅が出現した。まさに突然現れたかのように、かつての殷賑さをしのばせることもない灰色の町が目の前に続いている。時折歯の抜けたような空き地があったり、新しいアパートがあったりして、死に絶えてしまったわけではない町の鼓動を、遠慮がちに訴えている。

今にも両側から崩れてくるような廃屋の並木を縫って、ロードスターはくねくねとカーブを曲がっていった。

赤錆びたレールだけが残る廃線となった鉄道の踏切を越え、黒く堂々とした鉄骨で組まれたアーチ橋の下をくぐった。切り立った崖が左右から迫る切り通しをタイヤを鳴らして鋭くカーブする。

突然視界が開け、目の前に深い溪谷が広がっていた。

Mは急に広々としたコンクリートの道路に出たことに驚いたが、溪谷沿いの路側帯のガードレールに寄せて車を止めた。エンジンを切ると静寂が訪れ、幾分弱まった寒風が耳元を冷たく掠めた。

眼前の深い溪谷に落ち込む切り立った山塊は、黒々と煤けた岩肌を露出したままだ。遥かに見上げてても一切の緑がない。だが、よく見ると痛々しい岩肌に当てた包帯のように、白いコンクリートのベルトが幾筋も走っている。その上に盛った土に、貧相に植えられた草むらが寒々に見える。褐色の枯れ草は寒風に吹きさらされ、不規則に揺れ動いていた。

そんな満身創痍の山塊に張り付くようにして、不気味な鉄とコンクリートの怪異なフォルムで精錬所は存在していた。まるで、山塊を蝕む寄生虫のようだ。

峨々たる山には負けるが、それでも大きな丘ほどもある凶々しい建築物が、醜悪なペニスのように屹立した煙突を、誇らしく聳えさせている。この巨大な煙突の先から、数十年に渡って亜硫酸ガスが排出されたのだ。風に乗って谷筋を渡り、山肌を駆け上っていった毒ガスは、緑に恵まれた町の山々を無惨な禿げ山に変えてしまった。今はただ、昔の罪業を恥じるかのように静まり返り、廃墟は山裾にたたずんでいる。

Mはハンドルを握りしめたまま、じっと廃墟を見つめた。建築それ自体は何と形容したらいいのだろうか。それはまるで、無数の砲弾を浴びて沈没寸前でのたうち回る戦艦のようでもあったし、無数の鉄材と産業廃棄物で造形したオブジェのようでもあった。しかも奇妙な静寂が荒廃しきった全体を支配しているのだ。今も増殖をやめないガン細胞が発信する邪悪な意志さえ、見る者に伝わってくるような気がする。

Mは小さく身震いしてからドアを開け、路上に立った。

「ここが中心なのね」

溪谷沿いのガードレールへ二、三步近寄ってMがつぶやいた。

「えっ、何の中心だって言うんですか」

Mのすぐ後ろに立った村木が大きな声を出した。

「この精錬所が、この町を作ってきたのでしょうか」

「そんなの昔のことですよ。さっき助役さんが言ったとおり、精錬所はずっと前に閉鎖されてしまっているんです。もう精錬所でもない。ただの残骸ですよ。取り壊すお金がもっていないから残っているだけのものです。決して残しているわけではない」

「精錬所のことになるよ、やけに饒舌になるのね。きっと、今でもここが中心のままだって事じゃないかしら」

「そう思うのはあなたの勝手ですが、あなたにお願いするパンフレットには、精錬所の残骸など載せる必要はありません。町のパンフレットなんですから、町の意向には従ってもらいますよ」

「町を売り出すためには、すべてを知っておきたいだけよ。間違いがあったら困るでしょう」

Mは肩をすくめ、ガードレールから身を乗り出して溪谷の底をのぞき込んだ。

大きな岩の間を清澄な水が勢いよく流れている。耳を澄ますと風の音に混じって、ドウ

ドウという水音も聞こえてくる。

「美しい流れね、怖いくらいに澄み切っている」

「水瀬川の源流ですからね。下流域の多くの人たちを含め、たくさんの命を養っている清流です。ぜひ紹介して欲しい自然の一つですよ」

誇らしく言い切る村木の声を背中に聞き、Mは図書館で読んだ鉋毒にまみれた同じ川のことを思いやった。

この清澄な流水がかつて、洪水の度に多量の鉋毒を流して多くの人を苦しめたのだ。しかし、眼下の水瀬川は鉋毒の記憶などは知らぬ顔で、自信に満ちて流れている。その流れは速く、川岸に立つ醜悪な精錬所の建築物を決して川面に写し出すことはなかった。

「村木、この寒いのに外で油を売っているのか」

二人の背後から遠く声がかかった。良く澄んだバリトンに振り返ると、道路を隔てた山際の山門の前に、ベレー帽を被った老人がたたずんでいる。

「何だ先生か。人聞きの悪い、仕事ですよ、仕事」

おどけた声で老人に答えた村木が、苦笑してMを振り返った。

「実は、あれが僕の住まい。あの人は高校の時の恩師なんです」

「え、住まいって」

Mが目を凝らして古ぼけた寺院を見ると、裏手に意外に新しいモルタルのアパートが見えた。

「僕は、あのアパートに住んでるんですよ。だから毎日精錬所と対面しているわけ。だから今さら、何の興味もない。ただのコンクリートと鉄の残骸としか見えませんね」

Mは一瞬言葉に詰まったが、さり気ない風を装って村木の言葉を肯定した。

「そうですね。毎日見ていれば、ただの日常的な風景ですもの」

「そのとおりですよ。おまけに大家が恩師ときは毎日説教されているようで、精錬所どころではないんですよ」

対岸に張り付いた巨大な精錬所に背を向け、村木は大きな声で老人に話しかける。

「出版社の方が精錬所を見たいと言うのでお連れしたんですよ。これも仕事です。毎日見慣れている風景を見ても、僕はちっとも面白くありませんが、初めての人にはけっこうな迫力ですよ」

「それが普通なんだよ。お前さんが不勉強なだけだ。あれほど全国を騒がせた鉋毒事件の

中心なんだから、見てショックを受けるのが正常なんだよ」

「弱ったな、また説教ですか。帰ってからにしてくださいよ。せっかく出版社の方をお連れしたのに、弱っちゃうな。これだから来たくなかったんですよ」

村木は急にMを振り返って言葉をぶつけた。ここに来たくなかったとは初めて聞く言葉だったし、出版社の社員だと名乗った覚えもなかった。

「私が出版社の方だとは知らなかったわ」

「すみません。嘘をつくつもりはなかったんですけど、恩師に会ってつい動揺してしまったようです」

「今は大家さんなのでしょう。毎日動揺していなければならぬわね。本当に精練所どころではありませんね」

「そんな意地悪はやめてください。あなたのような美人と一緒にいるときに声をかけられたので、慌てたのが本心です。ごめんなさい」

媚びるように村木が言うと、Mは当然だと言いたげに胸を張って答えた。

「別に謝らなくても構いません」

「あなたは本当に自信たっぷりの人ですね」

「能力と自信がなければ、この世界は渡っていけないわ」

きっちりと言い切ったMの言葉で気まずい沈黙が訪れそうになったとき、道の向こうからまた老人が声をかけてきた。

「せっかくここまで来たのだから、ちょっと寄っていきなさい」

「毎日帰って来るのにせっかく来たもないもんだ。きっとMさんに言ってるんですよ。どうします。お茶を飲んでいきますか」

村木がMの顔をのぞき込んで尋ねた。

「あなたの恩師で大家さんのお年寄りに誘われたのだから、お寄りしないわけにはいかないでしょう」

二人は冷たい風が吹き抜ける広い道路を横断して山門をくぐり、老人に導かれるまま寺院の横手へと回った。間近に見る寺院は古ぼけてはいたが、結構立派で大きな寺構えを見せている。やはりこの町のかつての栄華が、寺の構えにまで色濃く反映しているに違いなかった。

小さな潜り戸から屋内に入り、外見からは不釣り合いなほど調度の整った洋室へと導かれた。ロココ風の布張りの椅子とテーブルを配した部屋の壁面は書棚が占め、隅に立て掛

けられた黒く大きな楽器ケースが異彩を放っている。

「この町は初めてなのですか」

ゆったりとした布張りの椅子に深々と座って、老人が話しかける。

「僕はお茶を入れてきましょう」

勝手知った仕事を引き受けるように言って、村木が奥のドアに消えた。

「この先の観光地へ行くときに、何回か通り過ぎたことはありますが、町の中までお邪魔したのは初めてです」

「まあ、普通の人には皆、あなたと同じですよ。わざわざバイパスを降りて、ひなびた町を訪ねる物好きも多くはいません」

「初めて町に入ったのですが、やはり鉾山の影響が未だに強く残っていると感じました。私は町の観光パンフレットの制作を頼まれた広告会社のものなのですが、鉾山の扱いについて迷ってしまったんです。どうしても避けては通れないなって感じがしてしまうのです。けれど、村木さんを初め、町の人々は、あまり鉾山に触れたくないようなんです。あなたは村木さんの恩師だとお聞きしたので、教育者として鉾山のことをどう思っているか聞かせて欲しいのです。初対面で申し訳ないのですが、お寺に招かれたりすると、これもご縁のような気がしてしまいました」

「パンフレットの制作のために見えたのですか。それはご苦労様です。でも、鉾山のことはそんなに深刻に考えなくとも良いと思いますよ。誰だって知っていることですから、隠すことも宣伝することもない。ただ存在しているだけのものです。たとえ精錬所の残骸が残ろうが壊れようが、山に緑が戻ろうが戻るまいが、鉾山は歴史の中に存在し続けているのですよ」

淡々と語る老人の言葉にもMは、この町の疲労を感じてしまう。鉾毒にまつわる先入観が強すぎるのだろうとMは思った。

「ご住職の法話を聞いているような気分になってしまいました。学校では何を教えていたのですか」

年長者に対して礼を失した物言いだとは思ったが、あまりにも哲学的な答えが不満だったので、つい踏み込んで聞いてしまった。

「なるほど、坊主の説教に聞こえてしまいましたか。年は取りたくないものです。私は十年ほど前まで、この町の高校で美術と音楽を教えていたのですよ」

「えっ」

思わずMの口元から驚きの声上がる。

「驚かれても仕方がないが、芸術を教えるのが本職なんです。住職をしていた父が死んだときから、坊主も引き受けるようになったんですよ」

「それでチェロが置いてあるのですね」

「そう、そうなんです」

今まで思慮深そうに構えていた僧侶の顔が崩れ、少年のように無邪気な笑顔がこぼれた。

「今でもお弾きになるんですか」

「弾きますとも。退職教員が集まって弦楽五重奏団を作っているのです。私はそのコンサートマスターですよ」

誇らかに話す老人の顔は、既にアーティストの自信が満ちていた。

「何を演奏なさるのですか」

「モーツァルトです」

胸を張って答えた。

「素敵ですね。ぜひ聴かせて頂きたいわ」

「暖かくなったら演奏会を開きます。プログラムは弦楽五重奏曲第四番ト短調です。ぜひおいでください」

老人の顔がうれしさの中に埋もれた。

その時唐突に、入り口のドアがノックされた。

「恩師。お邪魔しますよ」

声と同時にドアが開き、紺のマウンテンパーカーの前をはだけた、がっしりとした体格の男が入って来た。パーカーの下は白のTシャツ一枚で、色のさめたブラックジーンズを穿いている。ジーンズの所々が黒い土で汚れていた。全身から外の冷気と、男の臭気を漂わせている。

「何だ陶芸屋か。つい先日湯飲みセットをもらったばかりだろう。しばらく注文はないよ」

いつの間にか僧侶の顔に戻った老人が、つまらなそうに応えた。

「作品の売り込みじゃないですよ。緑化屋の娘が、またいなくなったそうです。今、分校から連絡があったところなんです。これから捜しに行くのですが、一緒に行ってもらえないかと思ってお願いに来たんです」

「そうか、またか。困ったな、緑化屋は山に入ってるんだろ」

「当然ですよ。朝からヘリコプターに乗っているはずですよ」

「陶芸屋が一人で行っても、あの子はいうことを聞かないかも知れないな。一緒に行ってみるか」

「お願いしますよ。どうせ元山鉦の廃墟の辺りにいるんでしょうが、恩師が一緒なら素直に帰ってくれるでしょう」

「じゃあ行くか」と言って立ち上がった老人が、Mに視線を落とした。

「大変申し訳ないが、これから人捜しに行つて来ますよ。この陶芸屋のせがれの同級生で、小学校六年生の娘が学校からいなくなつてしまつたのです。都会から赴任して来た緑化技師の娘なんだが、かわいそうに自閉症なのです。どういうわけか、年寄りの私には安心できるらしい。なに、いる所は見当が付いているから、それほど心配はないのですよ」

「私もお手伝いしましょうか」

「いや、あなたはいい。町の者でします」

きつい視線でMを見下ろして、陶芸屋が短く言い放つた。

「よそ者が行くと足手まといって事かしら」

「そういうことです」

冷たい声で言い切つた陶芸屋は、口をへの字に引き締める。声とは裏腹に、Mを見つめる視線の底で熱い炎が揺れた。

Mの背筋をむず痒い感情が走つていった。

「お待たせしました」

のんきな声が響き、村木が奥のドアから湯飲みを載せた蒔絵の盆を持って入つて来た。

「あつ、先輩、こんにち。先輩の分も入れて来ましょうか」

Mを見つめる陶芸屋に明るい声で呼び掛ける。

「お茶くみは役所の中だけにしておけ」

にべもなく拒絶された村木の顔が赤く染まつた。

「僕は役所でお茶くみなんかしてませんよ。四月になれば主任になるんですから、もう上級職員ですよ。先輩こそ、もっと売れる陶芸を工夫して、町おこしに貢献すべきじゃないですか。芸術家ぶつていちゃ敷居が高くなるばかりですよ」

「お前に説教されるゆえんはない。小役人のくせに、かわいこちゃんを連れていちゃつい

てるから町が変わらないんだ。早く帰って町のための仕事をしろ」

Mは、きつとなって陶芸屋の顔を睨み付けた。

「私はかわいちゃんという名ではありません。Mと言います。あなたはどなたですか」

「俺は陶芸屋だ」

動じる風もなく答える。

刺々しくなった雰囲気の中で、老人が取りなすように間に入った。

「村木。私は陶芸屋と一緒に緑化屋の娘を探しに行くから、折角入れたお茶をMさんに飲んでもらってから帰りなさい。Mさんも気を悪くしないでください」

「いえ、慣れていきますから」

Mが応えると、老人と陶芸屋は連れ立って外に出て行った。

「チッ」と舌打ちする陶芸屋の声が、ドア越しに聞こえた。

「何て人かしら」

Mが独り言をいうと、盆をテーブルに置いて向かいの椅子に座った村木がぼそっと言った。

「先輩はMさんを好きになったんだ」

「えっ」

Mはびっくりしたような声を出したが、本当に驚いたわけではない。ついさっき、瞳の底まで踏み込んできた陶芸屋の熱い視線が脳裏に浮かぶ。村木の言葉を裏付ける予感がなかったとはいえなかった。

「陽子さんの時とまったく同じなんですよ。先輩は不器用ですからね。陽子さんは五年ほど前に離婚して、町を出て行った先輩の奥さんなんです。この町の人で同い年。ずっと幼なじみだったけど、先輩はプロポーズするまで辛く当たっていたんです。愛情の裏返しってやつですよ。結婚してからも凄い。陽子さんを素っ裸にして縛り上げ、外にも出さなかったといいます。愛情が激しすぎるんですよ。きっと先輩は、Mさんに会って陽子さんを思い出したに違いないんだ」

村木の話聞くMの目が怪しく輝き出す。じっと村木の顔を見つめて低い声で応えた。

「そう。村木さんの推測どおりなら、私も陶芸屋に素っ裸にされて縛り上げられるのね」

村木の顔が真っ赤になった。

「うわきですよ、ただのうわき。別にMさんを驚かすつもりはないですよ。真に受けてしまっっては話にもならない」

頬を真っ赤に染めて抗弁する村木がおかしくて、Mは思わず笑ってしまった。

「何がおかしいのですか」

「いえ、思い出し笑い。村木さんってかわいいのね」

村木の頬が一層赤く染まった。

Mは楽しい気分で蒔絵の盆に手を伸ばし、冷えた茶碗を取った。

不思議な茶碗だった。ほとんど黒にしか見えない地肌に厚めの釉がかかり、所々が青みを帯びた鉄色に光る手焼きの茶碗だ。手に馴染む土の温かさが優れた陶工の技を感じさせる。Mは手に取ったまま、しばし見とれてしまった。

「その茶碗、気に入りましたか。先輩の作品ですよ」

目を上げると、村木がにこにこ笑っている。

「へー、そうなの。陶芸屋はアーティストだったのね」

「いや、幾つも作らないし、値が高いから売れないんですよ。気が向いたら、観光パンフレットに取り上げてやってください」

「もちろん取り上げるわ。この町の宝よ」

村木が声を上げて笑った。Mもつられて笑い、ひとときこの町と交流できたと、幸せな気分になった。

Mの好みにぴったり合った陶器が手の中にある。地肌の温もりから不意に、陶芸屋の熱い瞳と傲慢な態度が伝わってきた。ぽっと頬が赤く染まり、Mは村木に気取られないように話題を変えた。

「村木さんは、緑化屋さんのことも知っているの」

「知ってますよ。国の技官なんです。しかも高級官僚。禿げ山を緑にするために志願して来たそうです。もちろん都会の人で単身赴任なんですが、去年から自閉症の娘さんと呼び寄せて一緒に住んでいます。ずいぶん仕事熱心な人で、町が気に入ったみたいですよ。先輩と仲がいいんです。どちらもやもめの子連れ狼ですから、よく一緒に酒を飲んでいますよ」

「狼みたいに飢えているってこと」

「いや、二人とも個性が強すぎるという意味です。正直、怖いですよ」

「あなたは狼ではないの」

「からかわないでくださいよ。こんな山の中の寺で二人きりなんですから。狼になりたいく

なるかも知れない」

慌てた表情の村木が、つい本音をはいてしまう。

「狼になって見れば」

あっけなく言っただけのMの目が妖艶に光ったように、村木には見えた。

「弱ったなあ。Mさんは意地悪ですよ。僕は先輩たちと違って気が弱いんですから」

「そう、私は意地悪よ。陶芸屋さんや緑化屋さんと同じくらい、私は村木さんのことが好きになったわ」

Mの低い声が村木を挑発した。

村木が唾を飲み込む音が聞こえた。

傲慢な陶芸屋を誘い込む前のトレーニングにちょうどよいと思い、Mは大きく開いた瞳で村木の視線を捉えたまま放さなかった。

村木の頬が少しずつ赤く染まっていく。固く勃起していくペニスを意識した村木は、苦しそうにまばたきしてから目を伏せてしまった。

目の底に残ったMは輝くほどの壮烈な美しさに満ち、静かに椅子から立ち上がるころだった。

静まり返った部屋に村木の早い呼吸音が響き、Mが羽織っていたダウンジャケットを脱ぐ衣擦れの音がした。

外は冷たい風が渡り、禿げ山に植え付けられた草むらの上でびようびようと寒そうに鳴った。

2 緑化屋

小高い丘を切り開いた風当たりも日当たりも良すぎる平地に、緑化事務所とヘリポートはあった。

プレハブ建ての事務所の窓を震わすジェットヘリの爆音で、ヘリが着陸態勢に入ったことが知れた。整備に手間取り、半日も遅れていたヘリがやっと到着したのだ。

緑化屋は受話器を耳に当てたまま振り返り、やっと飛来したヘリの姿を窓越しに見つめた。ローターの巻き起こす風で、ヘリポート一体に凄まじい砂煙が舞っている。早く舗装をしなければ、ジェットエンジンの消耗を早めるだけだと思う。益々ヘリの整備に時間がかかるようになるだろう。荒廃しきった風景に似つかわしい非効率な事務所だと思った。

室内を圧する爆音でもはや、通話は困難な状態になっていた。

「お世話になります」と、大声で送話口に呼び掛けて受話器を置き、ふっと溜息をついた。

「緑化屋か」

小さく独り言をいったが、その声もヘリの爆音に消され、頭の中でのみ言葉となった。

緑化屋は良くプレスの効いた薄いベージュの作業服の上下に身を固めていた。白いワイシャツの襟元にはモスグリーンにワインレッドのストライプタイをきちんと締めている。幾分白くなった髪は広い額の横できちんと分けられている。知性的で落ち着いた両眼の間の深い皺がひとときわ深くなった。先ほどの電話の内容が気に掛かるのだ。

電話は小学校六年生になる娘の担任の先生からだった。娘の祐子がまた、学校からいなくなったと通報してきた。これでもう三度目だった。友人の陶芸屋と元教員の老人が捜しに行ってくれるというので特に不安はなかったが、心の通い合えない自閉症の娘に歯がゆさを感じた。

「緑化屋か」と、また口に出した。

緑の消えた山に草の種をまき、植林をし、再び緑なす山に戻そうとする自分の仕事に情熱と誇りはあったが、家庭を犠牲にしてまでのめり込んだ割に成果は見えてこなかった。五十年、百年をかけての仕事なのだと分かってはいたが、思い通りにならない娘の話を聞いた後では、いつになく空しいもどかしさを感じてしまう。

いつの間にかヘリの爆音がやんだ。

作業員たちが草の種を詰めたコンテナを、ワイヤーで機体に繋ぎ止めている。遅れていた出動の時刻がきたのだ。三途の河原の石積みのように果てしなく続く作業の一つが、またこれから始まる。

緑化屋はデスクの方を振り向き、チカチカと瞬くパソコンのディスプレイをのぞき込んだ。今回の作業の場所と高度を確認した後、引き出しから携帯電話を取り出してベルトに吊った。大きく深呼吸してから歩を進め、ドアの前で立ち止まった。ドアに掛けられた鏡に映る顔を見つめる。

我ながら隙のない格好だが、疲労が滲み出ている感じがする。もう、中央を離れてから三年になるのだ。このまま禿げ山と一緒に朽ち果てるのだろうかと思ってしまう。ダークスーツに身を固め、官庁街を足早に歩き回っていた日々のことが頭を掠める。妻と娘の顔が脳裏に浮かんた。二人の顔を打ち消そうと頭を左右に振る。鏡に映った顔の横でパソコンのディスプレイが、深海でもつれ合って舞う二頭の三角形の魚のようなスクリーンセイバーに変わるのが見えた。

スイッチを切るのを忘れたと思ったが、構わずドアを開けて外に出る。

寒風が頬に痛い。

緑化屋の姿を認めたパイロットがヘリのエンジンをスタートさせる。自然がもたらす静寂を破り、ジェットエンジンの爆音が再び周囲を圧する。毎日行われる儀式だった。もともと、大仰なジェットヘリが醸し出す威圧感が、人に儀式に立ち会うような厳粛な気持ちを抱かせているに過ぎなかったが、彼は十分そのことを認識していた。美しい自然を甦らすために人間が使う、尊大な乗り物に過ぎないと思っていた。

緑化屋は苦笑いして、足元の小石を蹴った。

ヘリポートの方角に転がって行く小石の先で、急速な勢いで彼に向かってスピターンして来る白いベンツが視野一杯に膨れ上がった。ヘリの爆音に消され、エンジン音は聞こえなかった。音もなく眼前に迫る巨大な車体に身がすくんだ。足が震え、背筋を冷たいものが掠めた。

轢き殺されるかもしれないと思った瞬間、白い車体がきしみ、緑化屋の一メートル前でベンツが止まった。必死にロックした車輪がスリップし、舞い上がった砂埃が緑化屋と車体を包み込んだ。

緑化屋は腹の底から込み上げてくる怒りに目を赤くして、車内の人物に目を凝らした。しかし黒いスモークフィルムを張った車窓からは、車内をうかがうことはできない。

へりのローターが運ぶ風に煽られるように、ベントの後部ドアが勢い良く開けられた。

「お前が緑化屋か」

へりの爆音にも負けぬ大音声が轟き渡った。

大きく開いたドアから半身を乗り出した男は、さしもの大型車さえ窮屈に見えるほどの巨漢だった。黒のスリーピースにピンクのシャツ、襟元にはシルクニットのブラックタイといういでたちだった。

「町長はもう、意見書を県に提出済みなんだ。変な動きを見せるとただじゃおかないからな」

ドスのきいた声で続けた。

「あなたは何者ですか。無断で事務所の構内に入り込んで困る。もう少しで轢き殺される所だった」

男の剣幕に畏怖されて緑化屋の怒りは急速に萎み、我ながら弱々しい声になってしまったと思った。

「まだ殺しはしないさ。今日は挨拶に来ただけだからな。俺は産廃屋の竹前という者だ。あっちは秘書役のカンナ」

産廃屋が顎をしゃくるとベントの運転席が開き、真紅のスーツを着た背の高い女がすっと立ち上がった。端正な顔立ちだったが、顔にはこれと言った表情はなく、能面のような冷たさが伝わる。両の眉は落としてあった。

産廃屋たちの車を業務関係者と見たのか、パイロットがへりのエンジンを切った。吹き抜ける風の音だけになった荒んだ広場の端に、白いベントと黒と赤のスーツが異様な彩りを添えている。

「しらばっくれた顔をされては困るんだよ。俺が来たからには、元山沢の産業廃棄物処理施設建設のことに決まっているだろうが。県知事の認可待ちだっていうのに、国の技官が反対運動をするなんて聞いたことがない。職権を乱用する気なのか、俺に文句が付けたいのか、はっきりさせてもらおうじゃないか」

先ほどよりトーンを落とした声が、静寂の中で風の音を圧した。

緑化屋は、やっと事情が飲み込めた。いわれのないことではなかったのだ。

水瀬川に合流している譽川の川筋一帯は元山沢と呼ばれている。かつて、この町の最初の繁栄を支えた鉾山が元山鉾なのだ。その元山鉾は、譽川の右岸に切り立つ巨大な譽鉾岳の山中の固い岩盤を、鉾脈に沿って縦横に掘り尽くした後、やっと廃鉾となった。もう五

十年も前のことだ。今は小学校の分校が往時をしのばせているだけで、鉾山に関する施設はすべて廃墟となっていた。

その元山沢全体を産業廃棄物で埋め立てる計画が進んでいるのだ。そして緑化屋は元山地区に住み、娘の祐子は分校に通っている。産廃処分場の建設に反対するのは、住民として当然だった。

「せっかく緑の還ってきた沢を産業廃棄物で埋め尽くすなんて許せません。私は公務員としてではなく、一緑化技師として反対しているのです。産廃処分場の建設なんて、とても良心が許しません」

毅然として言い切れたことに、緑化屋は満足を感じた。

「まあ、良心も命のあるうちって事を知っておいた方がいい」

ぼそっと言った産廃屋に、秘書役が口を開けた黒いバックを差し出す。無造作に右手をバックに入れた産廃屋が取り出したのは、真っ黒な大型拳銃だった。軍用のベレッタM92Fがまっすぐ、緑化屋の眉間に狙いを付ける。緑化屋の目が恐怖に大きく見開き、背筋が凍り付いた瞬間。下げられた銃口から貧相な音とともに三発の銃弾が発射され、足元で跳ね返った。

あっけにとられた緑化屋の耳に産廃屋の高笑いが聞こえた。

「今日の所は挨拶代わりにモデルガンだ。だが、舐めるんじゃないぞ。いつだって実銃を持って来ることができるんだからな」

捨てぜりふを残した産廃屋が背を向けてベンツへと向かう。さっと短いスカートを翻した秘書役がドアを開けた。

「おとなしくしていれば、二度と会うことはないだろうよ」

後部座席に収まった産廃屋が言葉を投げると同時にドアが閉まり、ベンツは凄い速度でスタートした。

「出入りの業者なんですか」

心配してへりから降りて来たパイロットが緑化屋と肩を並べて尋ねた。既にベンツは山陰に入ってしまった。

「ただのやくざさ」

投げ捨てるように言った緑化屋の口元をパイロットが見つめる。

「やくざなんですか。一人は若い女性のようにでしたが」

「利権を見つけて潜り込んでくるウジ虫みたいなやつだよ。男も女も関係ないね。さあ、

もう飛ばなきゃあ。ずいぶん手間取ってしまった」

嫌悪感が喉元まで込み上げ、緑化屋は思わず地面に唾を吐いた。

もう十年来していない野蛮な行為をした自分に腹が立った緑化屋は、パイロットを置き去りにして足早にへりへと歩を進めた。

緑化屋は機上から、鳥の目になって荒廃しきった山塊を見つめている。

水瀬川の源流に近い沢筋は、表土をなくし、黒々と岩肌を露出させた山並みが両側からへりを押し包んでくる。

「この沢筋の緑地は、まだまだですね。さっき飛んだ元山沢ほどに回復してくれるといいんですがね」

耳にかけたレシーバーを通して、パイロットが話しかけてくる。

「まったくだ。相当頑張らなくちゃな。せっかく盛った表土が雨水で流れてしまうんだ。早く草が根を張ってくれないと植林もできない」

「でも、元山沢は素晴らしくなりましたね。回復した緑を産業廃棄物で埋め尽くす計画があるなんて信じられませんよ」

「そんなこと、させはしない」

語気鋭く言ってしまうってから、緑化屋は穏やかに言葉を続けた。

「人の驕りだよな。確かに、産業廃棄物の処理は緊急に手配しなければならない問題だが、よりによって人がさんざん痛み尽くした同じ自然に、また痛みを強いることはないと思うよ。それもせっかく回復しかかってきた山なんだからね」

「まったくです。もうじきダムに着きますから高度を上げますよ」

パイロットの声と同時にエンジンが大きく唸り、機体が上昇した。眼下で曲がりくねっていた水瀬川が視界から消え、傾斜した視界に荒れ果てた岩肌が映った。いつになく乱暴な操縦だと思ったとき、荒れた山塊をバックに黒い物体が近付いて来るのが見えた。

「何だあれは、イヌワシじゃないか。何でこんな所に。何でへりに向かって来るんだ」

パイロットの驚愕した声がレシーバーの中に満ちた。

その物体は緑化屋にも、確かにイヌワシに見えた。成鳥というより老鳥といった方がよいほど巨大な体格だった。この辺にいるはずもないイヌワシがなぜへりを襲うのか、まるで理解できなかった。しかしイヌワシは、二メートル以上もある精悍な翼を悠々と羽ばたかせ、一直線にへりに向かって飛翔して来る。山々に込められた憎悪と悪意を剥き出しに

したような金色の目さえ、はっきりと見えた。

「アッ」と言うパイロットの声とともに機首が下がり、途端に上方でドーンという音がして機体が鋭く振動した。

「エンジン、ストール。失速します」

パイロットの声がやけに間延びして聞こえた。

「どうした、何が起こったんだ」

「イヌワシがジェットエンジンの中に飛び込んだんです」

見る見るうちにへりの高度が落ちていく。目の下に砂防ダムの堰堤と舗装道路が見えていたが、そこまで持つとは思えなかった。惰性で回るローターに機体を上昇させる力はない。

「何とかダム湖まで持たせます。着水しましょう」

落ち着きを取り戻した声でパイロットが言い切ったとき、横風が機体を襲った。途端に横にかしいだへりが横滑りして風に流され、パイロット側の山肌へと吸い込まれて行く。

「耐衝撃姿勢」

パイロットの叫びが緑化屋の耳から脳の奥まで響いた。

ゆったりとした速度でへりは山肌へと吸い込まれていく。ローターが岩盤に当たって砕け散り、機体がねじ曲がっていく様が妙に冷静に体感できた。

目の前まで迫った漆黒の岩肌の中に、イヌワシの憎悪に燃えた両眼が浮かび上がり、瞬く間に人間の目になった。忘れもしない、驚愕に満ちた娘の祐子のまなざしだった。

これで死ぬのかと緑化屋は思い、祐子の瞳に遠く思いを馳せた。

猫の目のように光った瞳は、閉めたはずの襖の細い隙間にあった。

大きく見開かれた瞳の中に、緑化屋が驚愕と恐怖を読み取るとすぐ、襖は閉められた。続いて走り去る、ぱたぱたというスリッパの音が耳を打った。

「しまった、祐子だ」と緑化屋は口にしたが、声が口から発せられることはなかった。彼の口には、ピンポン玉ほどの穴の空いたプラスチックの球が押し込められていたのだ。球の両端から延びた黒い皮紐が、首の後ろできっちりと結ばれていた。音声とならない声は、球に空いた穴から息となって洩れた。同時に一筋の涎が穴を伝って滴り、股間に顔を埋めた妻、道子の白いうなじを濡らした。

緑化屋は慌てて身じろぎしたが、後ろ手に緊縛された麻縄はびくともしない。

「ウー」と呻くとまた、陰惨な猿轡の中から息とともに涎がこぼれた。

まだ親子三人で都会に住んでいたときのことだ。娘の祐子は確か四年生になったばかりだった。まだあれから三年しか経っていない。

祐子が見たはずの緑化屋は素っ裸だった。

全裸のまま後ろ手に緊縛され、床柱に繋がれていた。その股間に顔を埋め、ペニスを口に含んでいる道子も全裸だった。祐子の目には、背後に高く突き出された道子の尻も見えたはずだった。目の前に突き出された母の股間に挿入されたバイブレーターは、祐子の目にどう映ただろうか。

緑化屋は全身の血が凍り付くような寒さを感じた。

久しぶりに、あれほど猛々しく勃起していたペニスが急に萎えたので、道子は戸惑っている様子だった。小さく萎んだペニスを、しきりに舌で転がしている。

やがて、元通りにならないペニスに異常を感じ取って顔を上げ、もの問いたような目で緑化屋を見上げた。濡れた口元に張り付いている黒い陰毛が、スタンドの明かりではっきり見える。思ったより部屋は明るいのだ。

声を出せぬもどかしさに緑化屋は顔を左右に振り、畳に着けた尻を動かした。途端に鋭い痛みが喉と尻全体を襲った。首を二巻きして床柱に縛り付けた縄が喉を締め付け、さんざん鞭打たれて腫れ上がった尻が畳で擦れたのだ。

目の前の畳に投げ捨てられた黒い革鞭が、凶々しく目を打つ。

鞭も猿轡も、道子の股間に挿入したバイブレーターも麻縄もみんな、緑化屋が買って来た品だった。

動揺した緑化屋の目を見て道子が立ち上がり、首の後ろに手を回して猿轡の皮紐を解く。顔に被さってきた股間から、振動を続けるバイブレーターの微かな音が聞こえた。

緑化屋は、痺れきった舌で口の中の球を外に押し出す。涎まみれの白い球が左右に開かれた股間に落ちた。

「どうかしたんですか」

バイブレーターの入った腰をもぞもぞと動かしながら、道子が尋ねた。

「祐子に見られた」

我ながら情けない声が出たと緑化屋は思った。

「そうですか。鞭の音が大きすぎたのかしら。でも、まだ四年生ですから」

「もう四年生だ」

意外にあっけない道子の反応に苛立った緑化屋が声を荒らげた。

「見られたものは仕方ないじゃないですか。そんなことでできなくなってしまったんですか」

聞いた瞬間、全身が真っ赤になるのを感じた。

「君はなんともないのか」

「仕方ないでしょう。あの子の記憶を消しゴムで消すことはできないですし、それに、」

「それに何だって言うんだ」

「今夜のことは、あなたが望んだことなんですから」

また全身が赤くなるのを感じた。視線を落とし、スタンドの明かりに照らし出された自分の姿を見下ろす。

足首と腿を緊縛され、麻縄で大きく左右に広げられた股間が見える。股間の中心には小さく萎びきったペニスがぶら下がり、ペニスの両側にウエストを二巻きして股間に下ろした麻縄が食い入っていた。

確かにすべて、緑化屋が道子に頼んでしてもらったことだった。急激に恥ずかしさが込み上げてくる。

「そんなに気にすることはありませんよ。あなたは忙しすぎてストレスが溜まりすぎているのだから、仕方ないじゃないですか。毎日仕事で午前様だったし、夜も眠れなかったんですもの。夫婦で解決できることをしただけですから、罪悪感を感じる必要はありません。本当に一年振りなんですからね」

緑化屋はまた頬を赤く染めた。確かに一年間道子を抱いたことはなかったのだ。しかし、道子の自信に溢れた言葉にも関わらず、緑化屋は再び性の喜びを追って勃起することはなかった。

緑化屋はその夜、瞼に残る祐子の視線の痛みとともに、自ら望んで道子に鞭打たせた尻の痛みで、眠りに就くこともできなかった。

そして、娘の祐子はその夜限り自らを閉ざしてしまった。

まさに岩壁に激突しようとする直前、黒々とした岩肌に浮かび上がったイヌワシとも祐子とも思われぬ瞳は、激しい衝撃とともに消えた。

機体の半分を押しつぶされたへりは、岩肌の斜面に沿って落下していった。高度が落ちていたため、墜落のショックは瞬時にやってきた。床から突き上げる打撃を座席で丸くな

って耐えようとした緑化屋は、反動で後頭部をしたたか打った。

幸い火災は発生していない。全身の痛みを耐えてセーフティーベルトを外し、身体を横に向けて腰に吊った携帯電話を手にした。すぐ目の前に、押しつぶされて妙な形にねじ曲がったパイロットの身体があった。緑化屋の口から脳にかけて酸っぱいものが上がってくる。最後の気力を振り絞って110番にダイヤルし、墜落事故を通報した。

急速に薄れていく意識の中で、ねじ曲がった身体と金色の目、それに祐子の瞳が錯綜する。やがて緑化屋の意識は混濁し、失われていった。

3 陶芸屋

昼走った道を、再びMのロードスターが凄い速度で走り抜ける。

ほんの数時間前、村木に案内されて走ったばかりのカーブを道幅いっぱい使ってクリアーして行く。風のやんだ溪谷にエンジンの音がひとときわ高く吼えた。

Mは闇に目を凝らし、村木に教えてもらった道しるべを見逃さないように注意した。

ヘッドライトの光線が一瞬、フロントガラスの隅にアーチ状の鉄橋を照らし出した。大きく切り通しを回り込んだ瞬間、昼来たばかりの広いコンクリート道路に出てしまった。左方の闇の中では、溪谷を挟んで醜悪な精錬所の廃墟がたたずんでいるはずだった。

「しまった、道を間違えた」

ロードスターの狭い車内で思わず声に出してブレーキを踏んだ。

ダッシュボードの時計に目を落とすと、七時十五分前だった。市からここまで、わずか五十分で来たことになる。

Mは目をつむり、大きく息を吸った。

車の屋根が視界を遮り、脇道を見逃してしまったのだ。夜間の走行でも、オープンにすべきだったと悔やむ。

闇に包まれた山肌をぼうっと照らすチェロ奏者の寺と村木の住むアパートの灯を見ながら、Mは今日二度目になる鉾山の町への来訪について思いを馳せた。

午後の寺の一室で村木の入れてくれた茶の味と、手に馴染む鉄色に光った茶器の感触が甦る。口の中に広がる苦い茶の記憶を、陶芸屋の甘酸っぱい記憶が押し包んでいく。

女を頑なに拒絶した態度と言葉。しかし、目の底で燃えていた熱い感情の炎。渾身を込めた作品を焼く陶窯の中の、灼熱の炎を見たときえ思ったのだ。

あの熱いまなざしに誘われて、Mは再び鉾山の町まで来た。

求められていたと、Mは思う。挑戦は受けねばならない。それがMの生き方だと、闇の中で改めて確信した。

「観光パンフなんかに興味はないわ。やはり人よね」とつぶやいたMは、寺とアパートの灯に片目を瞑った。

「モーツァルトも、ぜひ聴かせてもらおうわ」と言って口元をほころばせて、思いきりアクセルを踏み込む。

リヤタイヤが悲鳴を上げ、見事なスピントーンが決まった。

ヒーターも入れない冷たい車内で、身体の奥に住む官能への予感だけが、熱く燃え上がっていた。

切り通しを過ぎてすぐ、右に入る細道があった。

山塊が両側から迫る細道に車を乗り入れると、コンクリートを敷いた広場に出た。バスターミナルのような広場の先に立派な鉄橋が見える。水瀬川を渡る橋に違いなかった。

鉄橋を渡りきると、右手に精錬所を閉ざした巨大な鉄の門が見えた。

構わず先に進むとまた道が狭くなり、舗装の荒れが目立ってくる。山へと登る急勾配の道路がうねうねと続いていく。ようやく登り切ってしばらく下ると、ヘッドライトの光が小さな溪谷を照らし出した。誉川に違いない。

溪谷沿いに五分間ほど走ると、山が後退した狭い平地に校舎と思われる建物や、二、三の住宅が浮かび上がった。いずれの建物にも灯は見え、闇に溶け込んだままだ。

少し先に、コンクリートの橋が見える。

村木が対岸にあると言った、陶芸屋のアトリエに続く橋に違いなかった。橋の上にロードスターのノーズを回した後、車を止めて先を確かめる。

長さ十メートルの細い橋の先は、すぐ近くまで山が迫った狭い荒れ地だ。僅かに山の端を上った所に、ぼんやりと光る外灯が見える。その光を浴びて、思ったより大きなログハウスが闇の中に浮かんでいた。

Mは静かにロードスターを発進させる。

コンクリートの橋の先は未舗装の私道だった。地面に深く刻み込まれた轍の跡に車輪を取られ、車体の底を土に舐められながら、ゆっくりと進んだ。

古ぼけた外灯の下に四輪駆動のトラックが止まっている。Mは隣にロードスターを止めた。

フロントガラス越しに、ログハウスの壁面に掲げられた巨大な看板が見える。看板にはアトリエの名前はなく、乱暴な文字で「産廃処分場絶対反対」と描かれていた。

Mの口元に笑みが浮かぶ。

確かに産業廃棄物と陶芸は馴染みはしない。あの真剣すぎる表情で、産廃処分場に反対する陶芸屋の顔が目に見えた。

Mはドアを開け、身を切る寒さに包まれた荒れ地に立った。レイバンのサングラスをか

け、外灯にうっすらと照らし出されたログハウスに向けてゆっくりと歩み出した。

本当に慌ただしい一日だったと陶芸屋は思った。今日初めて回すろくろを前に、ふっと大きく息をつく。

朝のうちは、日頃構わなかった家事に追われた。昼になって祐子の失踪を知らされ、恩師と元山鉦まで捜しに出掛けた。恩師の思惑通り、廃墟になった共同浴場の広い湯舟の縁に座り込んでいた祐子を保護して学校に連れて行くと、緑化屋の墜落事故の知らせが待っていた。祐子と恩師と一緒に三人で町まで下り、緑化屋が運び込まれた総合病院へ急いだ。幸い緑化屋の傷は軽く、ほとんど怪我がないといってもよいくらいだった。背骨を折って死んだパイロットとは、はっきり明暗を分けた形だった。

「祐子はどうするんだい」

十二畳の板敷きのアトリエの隅で、テレビに見入っていた息子の修太が不意に声をかけた。

「恩師の家に泊まることになった」

「何だ、チェロの所へ行ったのか。うちに連れてくれば良かったのに」

「そうはいくまい。あの子は心を開いてくれないからな。修太、お前にだって話さないんだろう」

小さくうなずく修太の肩が落ちたように見えた。

「センセイが悪いんだ。祐子と光男を叱るからな」

陶芸屋の脳裏に、眼鏡の縁を指先で持ち上げる癖のある女教師の顔が浮かんできた。廃校になるのを二年後に控えて退職した温厚な地元教師の代わりに、都会から臨時教員として住み込んで一年しか経っていない。たった三人しか子供のいない分校なのに、保護者が学校を訪ねることを嫌がる雰囲気があった。家庭ぐるみの教育が普通であった前任者とは、まったく違う教育方針だった。しかし、後一年と思う気持ちが、陶芸屋を学校から遠ざけたままで済ませていた。

「あのセンセイは厳しいのか」

「いや、俺には優しい」

修太は、話題を打ち切りたように簡単に答えた。

「他の二人にだけ厳しいのか。でも、祐子ちゃんは病気なんだろう」

「口をきかないだけだから、病気には見えないんだろう。センセイが打っても泣きもしな

い」

「えっ、手をあげるのか」

陶芸屋が驚きの声を上げたとき、横に置いてある電話が鳴った。

入院した緑化屋からの電話に違いないと思った陶芸屋が、すかさず受話器を取った。

「陶芸屋はいるかね」

ドスのきいた低い声が受話器から流れてきた。

「私だが、あんたは」

「俺は産廃屋の竹前って者だ。緑化屋は随分と命強かったようだな。でも、幸運も長続きはしないぜ。お前もいい勉強になったろうが。つまらない反対運動は今日限りやめることだな」

「墜落事故のことを言ってるんだな。あんた、まさか緑化屋のヘリコプターに、」

「何もしちゃあいさないさ。反対反対と、うるさいことを言っているから事故が起きるんだ。お前も緑化屋も、かわいい子供がいるんだから、身体を大切にされた方がいいと心配して忠告しているんだ。まあ、俺の親切心ってやつよ」

ゆっくりと、念を押すように話す産廃屋の声の後ろに、時折女の声が混ざる。かん高い喘ぎ声が受話器の中で遠く「コロシテ、コロシテ」と聞こえてくる。

一瞬、陶芸屋の胸に恐怖が込み上げた。しかし、一呼吸おいてから、妙に女の声が怪しく官能的であることが知れた。

「今時のやくざは、女とお楽しみの最中にも脅しの電話をかけてくるのか。随分忙しくなったもんだな」

「ふん、これも親切心の一つき。命が無くなったら、女を泣かすこともできはしない。よく覚えておくことだな。勉強になっただろうが」

産廃屋の声の彼方で、ひとときわ高く「ヒー」と延びた女の歓喜の声が聞こえ、電話は一方的に切られた。

ツー、ツーという発信音だけが流れる受話器を握り締めた陶芸屋の喉元に、苦いものが込み上げてきた。

不思議なことに、脅迫された恐ろしさはない。受話器の中に響いてきた女の喘ぎだけが耳の底に残った。下半身が怪しく疼く。

妻の陽子が去って以来、女の柔らかな肌を抱くことも絶えて無かった。既に五年になる。滑らかさといえばもう、土の感触しか思い出せそうになかった。

身体の芯に熱く固いものが突き刺さっていくのを感じ、昼下がりの恩師の寺で見た、きりっとした女の表情が目を掠めた。

「誰か来たよ。小役人の村木が新しいゲームでも持って来たのかな」

入り口の引き戸を叩く音が聞こえ、テレビの前から立ち上がった修太が戸の前に向かった。

外から引き戸が力強く開けられ、暖められた室内に冷気が走り込んだ。

「あんた誰。変なやつだな」

修太が頓狂な声を上げる。

「今晚は。客に挨拶もできないあなたの方が、よっぽど変なやつだと思わない」

平然と答えた訪問者は、夜なのにオレンジ色のサングラスをかけた長い髪の女だった。アメリカンフットボールの控え選手が着るような、足首まである黒いコートを着て土間に立っている。

修太はあっけにとられ、返す言葉がでない。

「それに変なやつとは何よ。子供でも、言って良いことと、悪いことがある。見掛けで人を判断するのはやめたがいいわ。あんたみたいな、人の痛みが分からない子がイジメをするのよ。もう小学校六年生なんでしょう。もっと良くお父さんにしつけてもらいなさい」

「うるさいキチガイ女。説教しに来たのか」

痛いところを突かれた修太が一步を踏み出し、Mの足を蹴った。途端に平手打ちが修太の左頬でピシッと鳴った。

頬を張られて床に飛ばされた修太は、ショックでしばらく声も出ない。ぼう然として立ちすくんでいたが、突然大声で泣き出す。赤く手形のついた頬を手で被い、泣きじゃくりながら自分の部屋へ逃げ込んでしまった。

思いもかけぬ事態にあっけにとられていた陶芸屋も、修太の泣き声で我に返った。

サングラスで表情を隠していたが、恩師の寺で会った女に間違いなかった。

「わざわざ、俺の息子をいじめに来たのか」

「いじめたわけではないわ。しつけてやっただけよ。私はわざわざ、あなたに会いに来たの。あの息子は礼儀知らずだわ。しつけが必要よ」

「分かった。でも、自分の子供の顔を張られて、黙っているわけにはいかない」

「じゃあ、私の顔を張ったら」

Mは黒いブーツを脱いで、ろくろの前に座ったままの陶芸屋の前に進んだ。

「確かMと言ったね。あんたも十分すぎるほど礼儀知らずだ」

「名前を覚えていてくれて光栄だわ。あなたも私をしつけてみる」

陶芸屋の顔を見下ろしたMが、大きく胸を張って挑戦的に言った。

黒の長いコートからのぞいた足は素足だった。白く形の良い足先が悩ましく、陶芸屋の目の前で息づいている。肌の滑らかさは、毎日こねる愛用の粘土以上だと思われた。品良く揃った両足の指がかわいらしい。その持ち主が「私をしつけて」と誘うように言ったのだ。

見る間に陶芸屋の頬が赤く染まっていく。Mはしばらく間を置いてから、低い声で言った。

「良くしつけるには、お仕置きが必要なのよ。私のしつけが間違っていたのなら、私がお仕置きされてもいいわ」

「いや、間違っていたとは言っていない。唐突な訪問にびっくりしているだけだ」

「迷惑だというのね」

曖昧にうなづく陶芸屋の態度に、思わずMの口元がほころぶ。もう、思いのままに運べるはずだった。

「私の目を見て」

ほころんだ口元を意識して締め付け、冷たい口調でMが言った。

上に向けられた陶芸屋の視線を、Mの目がじっと捉える。しっかりと開かれた陶芸屋の瞳の中に、狂おしく燃え盛る炎を認めた。Mは大きくうなずいてから静かに話し始める。

「私は、あなたに迷惑をかけたのだから、あなたに罰してもらわなければならないわ。寺で会ったときから私はそれを望んだし、あなたも望んでいたと思うの。さあ、私の身体を良く見て」

患者に病状を告知する医師のように言い聞かせ、身にまとったコートを脱ぎ捨てた。

黒いコートが床に落ち、真っ白なMの身体が陶芸屋の目を打った。素っ裸だった。美しい裸身に黒い麻縄が縦横に食い込んでいる。

じっと、食い入るように裸身を見つめる陶芸屋の瞳の中で、燃え盛る熱い炎が陶然と広がっていった。

Mの裸身を走る黒い麻縄は、ほっそりしたうなじの両側から胸元に延び、豊かな両の乳房を菱形に囲んで、ウエストを二巻きした縄目に結ばれていた。僅かに上を向いたピンク色の二つの乳首が、陶芸屋の視線を挑発して揺れる。ウエストの中央から二条、股間に延

びた縄が黒々とした陰毛の中に分け入っていた。

「どうぞ罰してください」

Mの声に促されて、ぎこちなく立ち上がった陶芸屋は、よろけるように裸身にすがりついていた。

「陽子っ」

喘ぐ声で言った陶芸屋の頬にビシッと、身体を引いたMの平手打ちが飛んだ。

「私は陽子さんではないわ」

Mの大声が陶芸屋の耳を打った。

「悪かった。許してくれ。こうして縛られた陽子の姿を、どれほど夢見たか分からないくらいなんだ」

「私はM。私を縛って。そして、罰してください」

優しく答えたMは、レイバンのサングラスを外し、燃える目で陶芸屋の瞳を見つめた。オレンジ色のガラスの陰から現れた黒い瞳が、陶芸屋を誘ってきらめく。いつとき陶芸屋と視線を絡ませた後、Mは静かに背を向ける。両手を後ろに回し、高々と両手首を背中で交差した。

「本当に縛っていいのだろうか」

当惑した陶芸屋の掠れ声が、背中で響いた。

「高手小手に厳しく縛ってください。ほとんど自分で縛って来てしまいましたが、お望みなら縛り直してください」

裸身を戒めた縄目は陶芸屋が思い描いていたとおりだった。後は、自由な両手を緊縛するだけだ。

おずおずとした手つきで陶芸屋は、首の後ろで束ねられていた縄尻を解いて長く延ばした。

背中で交差した両手首を陶芸屋が縛り上げる。厳しく後ろ手を縛った縄を首縄に通し、両の二の腕を縛した後、腰縄で縄止めした。

菱縄後手縛りに緊縛されたMは、縄目を確認するように小さく肩を揺すってから振り返り、膝を折って正座した。上手な縛りだった。

肩で大きく息をついた陶芸屋の目の前に、素っ裸のまま後ろ手に縛られて正座する豊かな裸身があった。

その姿は、楚々とした中に凛とした風情が漂う、高度に洗練された白磁の陶風さえ感じ

させた。

「あなたの好きなように罰してください」

Mの声が遠のき、陶芸屋は別れた陽子の姿をMの裸身に重ねてしまっていた。

無理やり陽子を縛ったのは五年前、彼女が家を出る数日前の夜だった。

それまで何度も陶芸屋は、妻に縛らせてくれるように頼んだものだった。自分でもあきれるほどに仲睦まじい夫婦だったが、身体を縛らせることだけは、頑として陽子は拒絶していた。

普通のセックスなら、あられもない姿態を見せる陽子が、なぜ縛られることを、それほどまでに嫌うのか不思議で仕方なかった。

しかし、拒絶されればされるほど、陶芸屋の思いは益々強くなるばかりだった。そのころはまだ陶芸も思うにまかせず、その日暮らしのような生活に、嫌気が増すばかりだった。収入のすべてを看護婦をしていた陽子が賄っていたのだ。

まだ道筋さえ見い出せない陶芸の代わりに、彼が自らの自信を見い出せるのは、お互いに優しく寄り添える陽子だけだった。その愛する陽子を縛ってみたい。

縛り上げられた美しい陽子の姿が妄想となって、日夜浮かび上がって来るようになっていた。

その夜、いつものように激しく燃え合った後、陶芸屋は素っ裸のまま横たわる陽子を残して作業場へ行き、用意しておいた麻縄を手にして戻った。

「ちょっと話があるんだ」

布団の上に素っ裸のまま座って話しかける陶芸屋を訝しく見上げた陽子も、起き上がって前に座った。

「お願いだから縛らせてくれ」

手を突いて、頭を下げて頼んでいた。

「何を言い出すかと思えば。嫌ですよ。絶対に嫌だと言っているのに、どうしてそんな嫌がらせをするんですか」

「美しい陽子を縛ってみたいだけだよ。そばにいることを実感したいだけなんだ」

「いつだって私はあなたのそばにいますでしょう。縛り付けておかなければ安心できないんですか。そんなに私が信用できないのですか」

興奮気味に全裸の陽子が抗議した。その、ひたむきさを見るにつけ、陶芸屋の欲望は抑

えきれないまでに膨らんでいった。この一途さを縛り上げて、俺の全身の中に入れてしまいたい、そう思った。

「頼む」

一言いって、陽子をうつ伏せに押し倒した。尻の上にまたがって両手を背中で交差させる。用意した麻縄で手首を乱暴に縛る。抗いながら激しく動く陽子の尻が肛門に触れ、陶芸屋の官能を否応もなく高める。

うつ伏したまま後ろ手に縛られた陽子の口から「イヤヨッ」と言うかん高い悲鳴が何度となく発せられた。

隣の部屋からは、幼い修太の泣き声も聞こえてきた。

どぎまぎした陶芸屋は、後ろ手に縛った陽子を乱暴に引き起こす。悲鳴を上げる口に、脱ぎ捨ててあったパンツを丸めて押し込んでしまった。鼻から荒い息を吐き続ける陽子の縄尻を引き絞り、胸に回して乳房の上下を二巻きした。

すっかり緊縛された陽子は急におとなしくなる。横座りになった膝の乱れも気に掛けず、放心したように目をつむったまま、力無くうつむくばかりだった。

スタンドのほのかな明かりに照らし出された、素っ裸で縛られた陽子の姿は美しく、まるで清冽な白磁の花器のようだった。

想像力の中で陽子と一体となった感覚に支配された陶芸屋は、現実を確認したい一心で陽子を押し倒し、猛り立ったペニスを無理に押し入れ、二回に渡って射精した。

静まり返った部屋に、隣室から聞こえる修太の泣き声が響き渡っていた。

縄目を解き「済まなかった」と言う陶芸屋に返事もせず、背を向けて横たわった陽子は、その後一言も口をきかず、数日後に家を出た。

離婚届と短い手紙が陶芸屋の元に届けられたのは、一週間後のことだった。「嫌がる私に、あなたは義父と同じ仕打ちをしました。黙っていた私がいけなかったのですが、察することのできないあなたも同罪です。まさか、あの憎らしい義父が私にしたことを、愛するあなたにまでされるとは思いませんでした。憎みます。私の息子をどうぞ、立派に育ててください。逃げ出した私に子育ての資格はありません」

涙が限りなく陶芸屋の頬を伝ったが、彼の脳裏に浮かぶ陽子の姿は、素っ裸で後ろ手に緊縛されてうつむく、華麗な白磁のような裸身だった。

「どうぞ、あなたの好きなように罰してください」

目の前にうづくまるMがまた言った。

「本当にいいのか」

当惑して、陽子の姿を追い払った陶芸屋の問いに、Mは涼しい声で答えた。

「はい、それが私の望みですから」

身体全体を舐め尽くす熱い炎に焼かれた陶芸屋の、どもった声が部屋中を圧した。

「M、這いつくばって、尻を高く、高く突き出せ」

「はい」と一声答えたMは、膝でにじって身体の向きを変え、高々と交差させて縛られた後ろ手と尻を陶芸屋の目に晒した。

両の膝でバランスを取って双臀を上げ、ゆっくりうつむいていき、頭で床を支える。

陶芸屋の目の下に、股間を黒い二条の麻縄で縦に割られた美しい尻が姿を現す。

「股縄を解いてもいいか」

「すべて、あなたの思い通りに」

こんな事があって良いのだろうかと思いつつ、陶芸屋は屈み込んで股間に手を伸ばした。裸身を縦に割った縄を解くと、大きく割り開かれた股間の深奥で蠢く肉襞と、ヒクヒクと収縮するピンクの肛門が見えた。

これでいいのかと、また陶芸屋は思ったが、覚めた意識はそこまでだった。

壁に掛けた鯨尺の厚い竹の物差しを手に取り、高く掲げた尻を打ち据えた。

「ヒー」と口を突く悲鳴に頓着せず、立て続けに三発、剥き出しの尻を打った。白い滑らかな尻に四条、真っ赤なミミズ腫れが走る。

「口を、口を」と訴えるMに、興奮に任せたまま「猿轡は要らぬ」と応える陶芸屋。もはや、アトリエは官能の作業所だった。

Mは、高く掲げた尻を手酷く叩く竹の鞭に悲鳴を上げ、赤く腫れ上がった双臀を悩ましく振り立てて陶芸屋を挑発する。

鞭打ちの合間に、上目遣いに見た奥のドアの隙間に人影があった。こっそりとのぞく修太の姿が見えた。

汗ばんだ裸身の深奥から響き渡る官能の嵐の音を聴きながら、Mは修太の視線をそっと追っていた。

また、私のステージが始まる。Mはそう確信した。

冷え切ったアトリエの空気を、窓から差し込む早春の日が明るく照らし出した。

部屋の中央に、毛布を被った二つの裸身が横たわっている。Mと陶芸屋の官能の火は夜明けまで燃え上がり、堪能した二人は床の上で寝入ってしまった。

深い眠りの中で、突然尻を襲った鋭い痛みでMは目を覚ます。

窓から射す朝の光が目にもぶしい。すぐ目を閉じ、肌寒さを感じて手探りで毛布を探すが、無い。裸のまま丸くなって床に寝ているのだ。

また、尻に痛みが走り、ピシッという鋭い音が耳に響いた。唐突に鞭打たれたことに戸惑い、まぶしさに耐えて目を開け周囲を見回す。

鯨尺の物差しを振りかぶった修太の姿が、視界の隅にあった。

Mは起き上がって修太の前に立った。

物差しを投げ出し、二、三步後ずさった修太が憎しみに燃える瞳でMを睨んでいる。左の頬に昨晚Mに張られた手形の痕が残っていた。

「復讐しようというわけ。寝込みを襲うなんて、君もなかなかやるわね。確信犯って事ね」

「なぜ、朝までいるんだ」

青いニットのタートルネックの上で、修太のへの字に閉じた口が開き、怒りに満ちた低い声で言った。

頭から毛布を被って床で寝ている陶芸屋を、横目で睨んだ。まだ十二歳に成るか成らないかの、子供の素振りとは思えない憎悪に満ちた態度だった。

「君が見ていたとおりのことを一晩中お父さんとしていたのよ。それで、朝になってしまったの」

修太の頬が見る間に赤く染まった。

「お母さんのために、私に腹を立てているの」

「違う」

「自分のためなの」

修太の小さな頭が、こっくりとうなずく。

「お父さんと私がしていたこと、君は嫌い」

今度は小さく首を振った。

「好きなのかな」

「俺たちのクラスには、祐子しか女がいないからできないけど」と言って、また頬を赤く染めた。遊びはみんな性的なものなのだから、昨夜の官能に子供の修太が興味を持つのは

当たり前だとMは思う。

「すると。頬を張られたことが気に入らないんだ」

「本気で打つたろう。俺はまだ子供だ。子供を苛める大人は最低だ」

「ひどく打ったことは認めるわ。ごめんなさい」

見る間に修太の顔に笑顔が戻る。プライドが高すぎる子供なのだ。悪いことではないとMは思った。

「俺にもお前を打たせろ」笑顔を引き締めて修太が言った。

「私の頬を張りたいというの」

「いや、さっきと同じで尻でいい。打たせれば許してやる。打たせなければ二度と許しはしない。お前が好きな方を選べ」

「いいわ。打って。それから、私はM。お前ではないわ」

言い終わったMが修太に背を向け、四つんばいになって尻を掲げた。

ビシッ。物差しの鞭が剥き出しの尻で鳴った。

「ヒッ」と短い悲鳴を上げる。続けて襲う打撃に備えて肛門をつぼめ、尻全体で緊張する。しかし、次の鞭打ちは襲ってこなかった。

「もういいの」と尻を掲げたまま問う。

「もういい。Mの尻は真っ赤に腫れていてかわいそうだ。俺、学校に行く」

ランドセルを背負った修太が玄関で靴を履き、振り返って「行って参ります」と言って外に飛び出した。

「行ってらっしゃい」

素っ裸で四つんばいになって言うには馴染まない言葉だと、声に出してからMは思った。口元に微笑が浮かぶ。

楽しく暮らせそうな予感がした。立って行って引き戸を開ける。

火照った素肌を冷たい朝の空気がなぶった。荒涼とした山塊がすぐ目の前に立ち塞がっている。

4 溪谷

Mが陶芸屋のアトリエに住み着いてから一か月が経った。

会社には休職の届けをファックスで送ってあった。担当した観光パンフレットのことも気に掛けずに、陶芸屋と修太との楽しい官能の世界に浸り続けていた。この、日溜まりに
いるような心地よさは、まるで家族との団らんのようなだった。

陶芸屋に感じた熱い予感も、ただの揺らめきだったかも知れないと思えてしまう。刺激
が足りないのだ。

アトリエの隅にビニールシートを敷き、思いを巡らせながら粘土をこねる作業を繰り返
していたMに、ろくろを回す手を休めた陶芸屋が声をかける。

「随分暖かだし、風もないようだから散歩にでも行くか」

部屋の隅でゲームをしていた修太がすぐ立って来る。

「行こう、行こうよM。俺、飽きちゃっていたんだ」

「それじゃあ、連れていってもらうかな」

手を休めてMが答えると、陶芸屋が「修太、縄を持って来てくれ」と嬉しそうに言う。

「はい」と答えて壁に吊った棚に走り寄る修太を横目に「縛るの」とMが尋ねると「暖か
いから当たり前だ」と陶芸屋が笑う。

確かに暖かいと思い、壁際の洗面所で粘土にまみれた手を洗った後、Mはアトリエの中
央に立った。一週間前まで、大きな石油ストーブが置かれてあった場所だった。

黒いトレーナーを脱ぎ、ジーンズを脱ぐと、Mはもう素っ裸だった。このアトリエに住
み着いてからずっと、下着を着けたことはない。

「裸になるのか」

びっくりした顔で陶芸屋が言った。

「暖かいから当たり前よ」

涼しい顔でMが答える。

「でも、昼日中にいいのかなあ」

「何言ってるのよ。裸になるのは私なのよ。それとも、あなたも裸になる。さあ、きつく
縛って」

壁にもたれたまま修太が、二人のやり取りをニヤニヤしながら見ている。どうひいき目

に見ても、父の分がいいときは一度もなかったと修太は思った。とにかく、Mは子供心にも凄く格好良かったのだ。

形良く盛り上がった尻の上で、後ろ手に高く交差した両手が縄を催促する。

思い切って立ち上がった陶芸屋が修太から黒い麻縄を受け取り、背中で交差させた両手首を厳しく緊縛した。手首を縛った縄を首筋近くまで引き上げ、左右に分けた縄尻を豊かな胸に回す。乳房の上下を二巻きした縄を二の腕に回し、背中で縄止めした。

「随分シンプルな縄目ね。腰縄も打ってちょうだい」

不満そうに言うMに「散歩に行くんだから。活動的な縄目の方がいいよ」と、陳腐なことを言う陶芸屋。Mに言われるままに、もう一本の黒縄でウエストを二巻きして、腰縄の端を持ち「さあ、行こう」と声をかけた。

小さくうなずいたMは、幾分うつむいて歩を進める。

先に立って引き戸を開けた修太に続いて戸外に出る。穏やかな春の日差しがまんべんなく裸身を包み込む。白い肌が光に包まれ、透き通ってしまいそうだ。陶芸屋も修太もまぶしそうに、後ろ手に緊縛された裸身に見入った。

「誉川の上流へ行ってみよう。上流なら人の来る心配がない」

陶芸屋の言葉に、またMが噛みつく。

「私は、いくら見られても構わないのだから。下流がいいな。修太の分校も見ておきたいし」

「そんな、恥ずかしいよ。分校はいつでも見られる」

「私の身体のどこが恥ずかしいの。別に自慢する気はないけれど、恥ずかしい所などありはしないわ」

Mの剣幕に身体を縮めた陶芸屋が即座に話題を変える。

「ごめん。悪かった。上流で通洞坑の入り口を見せたかったんだ。通洞坑というのは、鉾山の一番下に水平に掘られた坑道なんだ。この通洞坑を中心に、鉾脈に沿って縦横に坑道が走ることになる。いわば基本となる坑道だね。これから散歩に行く先に元山鉾の通洞坑があるんだ」

「そう、勉強になるわね。それから修太、小さな方のウインチを持って行ってね。高い木から吊り下がってみたいの」

陶芸屋の解説を上の方で聞き流したMが、修太に何気なく命じる。

聞いていた陶芸屋の顔に、また驚きが走る。

驚きの表情を横目で見たMが、にっこり笑って機嫌を直す。

小型のウインチを入れたザックを背負った修太に先導されてMは歩み始めた。縄尻を持った陶芸屋が後に続く。黒のトレーナーとジーンズ姿の親子に挟まれた白い裸身が早春の日に輝いている。

荒れ地を横切って誉川の川岸へと向かう。Mの素足に石くれが痛い。歩を進めるごとに積み重なっていく微かな痛みの集積に、ゆっくりとした速度で官能が疼き出す。

全身に降り掛かる日差しが熱いくらいだった。

Mは背筋を伸ばし、心持ちうなじを垂れ、股間を隠すように内股で歩く。擦れ合う左右の内腿が、いやが上に性感を高める。胸元に目を落とすと、黒い縄で緊縛された乳房の上で固く尖っていく乳首が見えた。

いつの間にか後ろに回った修太が、手に持った竹の物差しの先で意地悪く裸の尻をつつく。切なそうに左右に振られる双臀に味をしめた修太は、今度は尻の割れ目を狙ってくる。物差しの先が肛門に当てられ、歩みに連れて粘膜を割り開く。小さな声でMが喘いだ。

濡れ始めた陰部を不器用に突いた後、竹の物差しが股間で固定された。持ち主が代わったのだ。

日差しを受けて火照った滑らかな肌と、悩ましく腰を振る歩みを見て、耐えきれなくなった陶芸屋が修太から竹の物差しを奪ったのだ。代わりに縄尻を持った修太が楽しそうに前に回り、緊縛された裸身に打った腰縄を曳いて歩く。

陶芸屋の持った竹の物差しが股間深く差し込まれた。見下ろしたMの視線に、燃え上がる陰毛を分けて前方に突き出した物差しが映った。物差しは絶えず陰部に向けて上げられている。性器と肛門を怪しくなぶられながら、Mは尻を左右に振って歩いた。股間を襲う悩ましい痛みが全身に伝わる。陶芸屋は物差しに加える力を微妙に加減したり、差し込む角度を変えたりして、切なく悶える裸身の反応を楽しんでいる。陵辱の待つ刑場に曳かれていく女囚のようだと、Mは思った。

限りなく肌が火照り、汗が滲み出す。じつとりと素肌から染み出した汗が裸身を濡らし、陶芸屋の目を楽しませた。これだけ美しい艶は陶磁器では出せないと、またもや陶芸屋は思い知ってしまうのだった。

いつしか道は、溪谷沿いに急勾配で上っていた。切り立った山が両側から迫り、日差しを遮っていた。眼下に誉川の急流が渦を巻いている。冷たくなった風も、今のMには心地よかった。

歩き始めて三十分も経ったころ、股間をなぶる物差しが急に引き抜かれた。

「着いたよ」と言う修太の声で前方を見ると、錆びて赤茶けた鉄橋が対岸の道路へと続いているのが見えた。長さは十メートルほどで、断ち切った兩岸の岩壁を繋いでいる。

突き出した巨岩を回り込んで小道を行くと、高く断ち切られた岩盤の真ん中に、石をアーチ状に積み上げた坑道の入り口が穿たれていた。鉄扉の閉まった入り口の幅は約二メートル、高さは三メートルほどで、意外にこじんまりとしたものだった。アーチの上に、やっと読み取れる文字で通洞坑と標されてあった。

「対岸の道路はかつて、トロッコの線路だったんだよ」

自慢そうに話す陶芸屋の解説を聞き流して、Mは眼下に続く溪谷を見下ろした。

蒼く輝く溪流は、二十メートルほど下で美しく渦巻いている。この荒れ果てた土地に、再び恵みをもたらす命の水だ。

「美しい溪流だろう。元山沢の誇りなんだ。この溪谷を産業廃棄物で埋め尽くそうとするやつがいるんだからあきれろ。俺は絶対に許さない」

陶芸屋の興奮した声がMの耳元を掠め、溪流を下っていった。

しばらくの間、吸い込まれてしまうほど熱心に溪流を見つめていたMが、表情を固くした陶芸屋を振り返った。上下を厳しく緊縛された乳房を前に押し出すようにして、毅然とした声を響かせる。

「お願い。私を溪谷に吊して。このままの姿で頭から溪流に向かって吊して欲しいの」

「そんな、無茶な」

「無茶じゃないわ。修太がウインチを背負ってきたでしょう。それを鉄橋に据え付けて、私を吊り下げて欲しいの。きっと私は、美しいあなた達の溪谷と一体になれるわ。ねえ、お願い」

大声で訴えるMの言葉の中で「あなた達の溪谷と一体になれる」と言った声が、陶芸屋の胸を打った。

「えっ、産廃処分場反対のために、人柱にでもなるつもりか」

我ながら陳腐な言葉が口を突いた。

「そんな者にならないわよ。ちょっと想像力が過剰なんじゃない。いくら私が裸で縛られているからといって、ご都合主義に流れられたのでは、たまったもんじゃないわ。もっと現実的に、遊び心で考えてくれないかしら」

「すまん」

また謝った陶芸屋が修太を呼んだ。背中のザックからウインチを取り出し、赤錆びた鉄橋の一番太い鉄骨に据え付ける。

「修太は下に降りてMをサポート」

勝手知った遊び場の斜面を、飛ぶように修太は下って行った。

「足首を嚴重に縛って」とMが訴える。

「タオルを巻かなくてもいいのだろうか」

「そんな物、持ってこないでしょう。あなたは、自分の溪谷に素っ裸で吊される陽子さんの姿でも思い描いてなさい」

Mの言葉で吹っ切れたように、大きくなずいた陶芸屋が足元にうづくまる。用意した黒縄を四重にして足首を縛り上げた。その四本の縄を束ねてウインチのフックに繋ぎ止めた後、冷静な口調で鉄橋の端に腰掛けるように指示した。

冷たい鉄骨に座ったMの尻を冷気が舐める。まだ、引き返せると思ったがプライドが許しはしない。

「行きます」

短く陶芸屋に告げたMは、前のめりになって溪谷へ身を躍らせた。

一瞬ふわっと宙に舞った裸身が瞬く間に落下し、両足首を緊縛した四本の麻縄で空中に支えられた。

全身を衝撃が襲い、激痛が足首から脳へと駆け下りる。

激しいショックで失禁し、胸に伝い落ちる生温かい尿の感触で冷静さを取り戻した。

逆さまになった風景が馴染まず、首を起こして上を見ると、意外に近い所に鉄橋があった。心配そうに身を乗り出した陶芸屋の見開かれた目と、目が合った。無理して微笑みかけてやると、やっと安心した表情が戻った。かわいい人、とMは思う。

「大丈夫よ。ずっと下まで降ろして」

陶芸屋がうなずくのを見てから頭を下ろした。

世界は相変わらず逆立ちしている。山が、谷が、樹木が、溪流が、すべてが逆立ちしてMを迎えている。

感覚が慣れると眼下に遠く、渦を巻く清冽な溪流が流れ下っているのが見えた。その風景が不規則に揺れる。身体も頻りに、頼りなく揺れる。意志に関係なく前後左右に揺れ動く感触は、自分の肉体を自分で制御できない頼りなさと不安を、強烈にMに教えた。まる

で日常の暮らしに隠された秘密を、まざまざと見せ付けられたみたいだ。

「ああ、やっぱり、何ほどのことはない」

声に出したとき、身体が下がっていくのが分かった。陶芸屋がウインチの操作を始めたのだ。

溪流のドウドウという岩を噛む音が、Mの間近で響いている。長く落ちた髪のを急流が洗っていくのが分かる。時折岩にぶつかり、跳ね上がった飛沫が顔や乳房にまでかかった。

足首に痛みは感じなかったが、長く延びた銀色に光るワイヤーの先を支点にして身体全体が揺れ動いた。川岸の大きな岩の上に、修太が逆さまになって立っているのが見える。感動した眼差しでみつめる視線がくすぐったかった。

谷を渡る冷たい風が容赦なく裸身をなぶって川下に下っていく。風は剥き出しの股間で陰毛をなびかせ、長い髪を揺すっていった。ちょうど、溪谷のまっただ中に身体があり、その肉体はもう、溪谷の主要な一部になったと、ふっと身体を離れていく意志が肉体に告げていった。

ぼんやりと霞む視界に、鮮やかな光景が浮かび上がる。溪谷と一体となった逆立ちの裸身が、瞬く間に産業廃棄物で埋められていく。瓦礫の山に埋没した裸身が空気を求めて喘いでいる。息苦しさが身体全体を被ってしまい、溪谷が身悶えした。

真っ暗な視界の中で産業廃棄物に埋め尽くされるもう一人の裸身に、Mは必死で追いつがろうとした。鼻の奥でツンッと鋭い刺激臭がして、頭が痛んだ。

陶芸屋の目の下で、逆立ちした裸身が揺れている。

きつく揃えた足首を緊縛された二つの足裏が、ピンク色に見える。内に折られた足指が時折、そっと外に開く。かかとの後ろに丸い尻が見え、尻の割れ目が引き締められたり緩んだりして揺れる。風が立つと長い髪がなびき、溪流に踊っていた。陶芸屋は目を見開いたままじっと、飽かずに揺れ動く尻を見つめ続けた。

「何をしているんだ。お前の家に寄ってきた所なんだぞ」

不意に対岸から大声で呼び掛けられた。

ギョッとして声の方を振り向くと、ジャンパー姿の緑化屋と白髪の老婦人が、あっけにとられた顔で陶芸屋を見ている。白髪の老婦人は町医者のお奥さんであることが知れた。

「いや、ちょっと取り込み中なんだ」

「困るじゃないか。産廃処分場が及ぼす悪影響についてのレポートを、県知事に出すことは言ってあったはずだ」

「俺は専門的なことは分らないよ」

「誘致反対の要望書も添えたいんだよ。あんたのサインと印がいるんだ」

「明日にしてくれないか、」

陶芸屋が答えきらないうち「アッ」という叫びが、町医者のおさんの口から洩れた。

気付かれたと思ったとき、緑化屋の興奮した声が耳を打った。

「あの女は何だ。裸で吊り下げられているぞ。どうしたんだ、早く助けないと大変なことになるぞ」

「川沿いの岩の上にいるのは修太ちゃんよ」

俺の方が大変なことになったと、陶芸屋は頭を抱え込んでしまった。

「父ちゃん。大変だよ。Mがぐったりした」

修太のかん高い叫びが耳を打った。慌てて下を見ると、まるで人形になってしまったように、Mの裸身が無機的に揺れている。さっと頭から血が引いて行くのが分かった。震える手でウインチを操作するが、思うように動かない。

鉄骨伝いに鉄橋を渡って来た緑化屋が陶芸屋を押し退け、ウインチのストッパーを外した。レバーを動かし、ワイヤーをゆっくり引き上げ始める。

「そうだ、ストッパーだった」

力無くしゃがみ込んだ陶芸屋の口から、情けない声が洩れた。

緊縛された足首が手の届く所に上がってくる間、陶芸屋には永遠に近い時間が流れたように思われた。

てきぱきと事を運ぶ緑化屋を手伝い、引き上げた足首をしっかりと両手で支える。手に伝わる冷たい肌の感触が、陶芸屋の全身を凍らせる。

早く全身を引き上げようと、両手に力を入れると、Mの腰縄に手をかけた緑化屋の叱責を浴びる。

「だめだ。ゆっくり引き上げるんだ。鉄骨に当たって肌が破れてしまうぞ」

二人で裸身を抱え上げ、ようやく水平にした足首からウインチのフックを外す。脚を持った陶芸屋が急いで足首を縛った縄を解き、岸に運び込もうとすると、胸を抱えた緑化屋が押しとどめた。

「そっちはだめだ。俺の車に行こう。奥さんもいるから見てもらえる」

対岸の道路に止めた白いステーションワゴンを顎で指す。車の前に、心配そうにこちらをうかがう町医者のおさんの顔が見える。看護婦の資格を持ったおさんがいれば安心なはずだった。

仕方なく従おうとすると突然、緑化屋が両腕で抱えた裸の胸に顔を寄せる。陶芸屋がギョッとしたときにはもう、上下を黒い麻縄で緊縛された左の乳房に耳を当てていた。

「大丈夫。鼓動はしっかりしている。さあ、行くぞ」

緑化屋の声に、ほっと胸をなで下ろしたが、すっかり仕切られてしまった陶芸屋は慙然とした表情になる。

ワゴンの後部ドアを開き、緑化屋が一步車内に入った。

「私は大丈夫。頭に血が上ってしまっただけよ」

カラッとしたMの声が響き渡った。

「それから、私も産廃処分場に反対することに決めたわ。ここで暮らす人たちには、この沢が必要なのね。逆さまになって溪谷と一体になったとき、よく分かったわ」

宣言するように大声で言ったMは、脚を抱えた陶芸屋を蹴って遠ざけ、ワゴンの床に腰を下ろした。

慌てて手を離れた緑化屋を、Mが振り返って見つめる。

「ありがとう」

明るい声で言う前から、大きく息を吸って立ち上がった。足を開いて大地を踏みしめ、後ろ手に緊縛された胸を張った。ゆっくりと周囲を見回す。

「逆さまの世界もいいけれど、普通の世界も、まんざら捨てたもんじゃないわ」

平然と言ったのけたMの顔を、全員の目が見つめた。

「Mっ」

対岸で修太の叫ぶ声が響いた。

さっと、ガードレールの前まで走ったMが、修太に向かって緊縛された裸身を左右に振る。

三人の目の前に、Mの後ろ姿が残された。

すらりと長く伸びた脚の上で、豊かに引き締まった尻が奔放に左右に打ち振られている。とんでもない散歩になったと、陶芸屋は後悔した。

次の日曜日の朝、緑化屋と町医者のおさんが連れ立って陶芸屋のアトリエを訪ねて来た。

先週はMの救出騒ぎで、産廃処分場の問題を片付けることができなかったのだ。

緑化屋はダークスーツで身を固めていた。白いシャツの襟元を飾った、紺地にシルバーのストライプタイがまぶしい。今からでも中央官庁に出勤できるような身支度だった。これまで作業服かジーンズといった、くだけた格好ばかり見慣れていた陶芸屋の目には、改めて緑化屋の置かれた地位を知らされるようだ。

「そんなに見つめるな」

一声かけてアトリエに上がって来た緑化屋は、陶芸屋の前にゆったりと座った。

部屋の隅でつまらなそうにテレビゲームをしていた修太が、二人に挨拶もせず立ち上がり、奥の部屋に消えた。

「歓迎されてないみたいね」

つぶやくように言った町医者のおさんが緑化屋の隣に腰を下ろす。

「先週のことを気にしているのか」

緑化屋が尋ねた。

「いや、そんなことはない」

陶芸屋は即座に答えたが、二人を前にして気まずさがないと言えは嘘になった。

「あの女の人は大丈夫だったの」

緊張した雰囲気の中で、おさんが直截に尋ねた。陶芸屋の顔がやっとなごむ。

「ええ、元気なものです。Mっていいです。今は市に行っている」

「そう、Mさんっていうの。今も一緒にいるというのなら、あなたが乱暴をしたわけではないのね。安心したわ」

「いくらおさんでも、怒りますよ。俺が女に乱暴するわけがないでしょう」

言ってから陶芸屋の頬が、さっと赤くなった。乱暴したのでなければ一体、俺は何をしたのだらうと思ってしまう。Mなら「好きなことをしただけよ」と涼しい顔で答えるだらうと思い。はっきり答えられぬ自分が我ながら情けなくなる。

「Mは今、産廃処分場反対のビラを作るために、市へ調査に行ってるんです。町の人たちにビラを配るそうですよ。行動的なことが好きなんです」

話題を変えようとして言った言葉に、おさんが「まー、良く気が付くわね」と感動した声で応じた。

「町の人に、俺たちの考えを知ってもらうのはよいことだ。しかし、もう知事の許可を待っている段階だからな。やはり知事に働きかけるのが一番いい」

冷静な口調で断言した緑化屋が、手元の書類鞆を開けて厚く綴じたテキストを取り出す。
「産業廃棄物処理施設が生態系に与える悪影響と、排水水が河川を汚染する蓋然性についてまとめたものだ。今日、個人的に知事と会って渡してくるから、地元住民の反対要望書にサインをして印をついて欲しいんだ」

陶芸屋は、難しい言葉に煙に巻かれた気持ちだったが、差し出された一枚の紙に見入った。良く読みはしないが、文末に並ぶはずの氏名が空欄になっているのは分かった。

「誰もサインしてないじゃないか」

「お前の後に俺がサインする」

「やはり、年長者の奥さんが先がいいな」

「奥さんはサインできない」

「えっ、元山地区には分校のセンセイを除けば三世帯しか住んでいないんだぜ。全員サインしなければまずいよ」

驚いて言いつのる陶芸屋の声に、太いエンジン音が重なった。車のドアを閉める金属音に続いて、玄関の引き戸が開けられた。

「ただいま」と言う、明るい声とともにMが入って来る。

「まあ、皆さんお揃いで深刻な顔しちゃって、落城前の鳩首会議みたいね。まだ、戦は始まったばかりなんだから、もっとリラックスしなければだめよ」

Mの陽気な声を無視するように、町医者 of 奥さんが話し始める。

「陶芸屋が言うことはもっともだと思うわ。私と孫の光男はこの地区に住んでいるのだし、産廃処分場の建設にも反対なのだから、サインするべきなのね。でも、どうしてもできないのよ。これは、亡くなった夫の遺志なの」

「先生は、あんなにこの溪谷が好きだったのにどうしてですか」

陶芸屋が反射的に聞き返した。

「確かに、町の診療所を閉鎖して、ここに住み着いたときから、私たち夫婦はこの谷が好きになったわ。でも、ここに来る前に、町では色々なことがあったの。あなたも少しは覚えているでしょうけど、鉾毒を巡ってたくさん争いがあったわ。夫は医者だったから、様々な思惑で利用されそうになったの。総合病院の初代院長にならないかという誘いもあった。でも、夫は医業以外、何一つしようとしなかったわ。医者は病気を治すことだけ考えていればいい、というのがあの人の口癖だった。暮らしについては、住んでいる人が自分自身で決めればいい。医者が影響力を行使すべきでない、ということなのね。だから、私

も夫の遺志に従うことにしたの。今だって奥さんって呼ばれるくらいなもの。夫と縁が切れないのよ」

元山沢を杖を突いて散策する、穏やかな表情の在りし日の老医師の姿が目には浮かび、陶芸屋は目を伏せて黙り込んだ。

「奥さんは医者ではないでしょう。今は、この地区の住民の一人なんでしょう。亡くなった人の思惑などに縛られていないで、自分の責任と人格で選択すべきだわ」

手に持った分厚いデザイン資料を床に置いて、Mが言い切った。

「Mさんというんですってね。まだ紹介もされていないのに失礼だけれど、あなたのように自由に決断できる女性はそれほどいないのよ」

奥さんも、はっきり言い切った。

「今からでも遅くないわ。奥さんも自由に決断できる女になればいい」

「随分乱暴な意見だと思うわ。人にはそれぞれが生きていく上で背負ってきた規範というものがある。そう簡単に手放すことができるものでないのよ」

「規範があろうと、法律があろうと、生きていくのは自分一人の仕事でしょう。独りでも生きるんだと決意すれば、どんな規範からも自由になれる。所詮、人が作ったものですから、決心さえすれば人が自由にできると思いますよ」

「自由にも色々あるわ。ひょっとして先週の事件も、あなたが自由に演出したことなのかしら。裸になるのは自由だけれど、びっくりさせるのは困り者よ」

奥さんが、興味深そうに尋ねた。

「ああ、逆さまになって溪谷と一体になったことね。あれは、陶芸屋と修太、そして私の共同作業よ」

「危険だとは思わなかったの」

「肉体の危険を冒さないで、自分の決心を検証することはできません」

「そう。私などが考えもつかなかった新しい女性が生まれてきているのね。楽しくなるわ。でも、だからといって、私はあなたのように自由に決断することはできない。私は私の規範を選ぶわ」

「そうでしょうね。別に強制はしない。私はサインするわ。今はこの谷の住民なんだから、真っ先にね」

Mは素早く陶芸屋のそばに行き、紙片を取って座り込む。ウエストバックからボールペンを取り出し、素早くサインし押印した。

「いいのか」

慌てて問い掛ける陶芸屋に「ま、いいだろう」と答える緑化屋。

「当たり前よ」と、Mの声が被さる。

奥さんを除く三人が署名捺印を済ませた。

県知事に会いに行く緑化屋と、奥さんを送ってMと陶芸屋も外に出た。

明るい光と、さわやかな風が全員を包み込む。奥さんと話す陶芸屋のそばから抜け出し、緑化屋がMと並んだ。

「Mさん。縛られるのがお好きなようだけど、」

言葉を詰まらせる緑化屋に頓着せず「好きよ」と短くMが答える。

「あの、縛ることは好きじゃないの」

ダークスーツに身を固めた頬を真っ赤に染め、小さな声で尋ねた。

「裸の男を縛り上げるのも大好き」

楽しそうに笑って答えるMの顔を、緑化屋がのぞき込む。朝の光を浴びた瞳の中に、ぼっと点る赤い火が見えた。縄で縛られる感触が緑化屋の全身に甦る。背筋を熱い予感が走り去った。Mに縛られてみたいと心の底から熱望した。

白いステーションワゴンの助手席のドアを大きく開けたまま、緑化屋とMを待っていた奥さんが浮き立つような声を出した。

「Mさん。今、陶芸屋と話していたんだけど、弦楽五重奏団の花見コンサートにご招待するわ。ぜひ、皆さんで来てください」

「あのモーツァルト。奥さんも演奏するんですか」

「ええ、私は、ゲストの第二ヴィオラなの。コンサートマスターのチェロには私から言っておくから、ぜひ来てくださいね。夜桜見物を兼ねた個人的なコンサートだから、何か新しい決心があれば、遠慮せずに検証してくださって結構よ」

「ええ、弦楽五重奏曲第四番ト短調と、爛漫の桜に相応しい自己検証をするわ」 楽しそうなMの声が、山並みに流れていった。

5 演奏会

うららかな季節が、またやって来た。

四月も半ばになって、やっとこの山間の町にも桜前線が上がって来ていた。この週末が満開で、一番の見頃になると町の人たちはうわさし合っている。

年度始めの事務が立て込み、残業が続いていた村木も、浮き立つ気分になっていた。

半分開けたアパートの窓から心地よい夜風が流れてくる。

村木はカメラケースから、買ったばかりのコンタックスAXを取り出す。まだ一度も月賦を払っていない借り物のようなカメラだった。28ー85ミリのツァイス製バリオゾナーを装着してシャッターを押す。カシャッ、心地よい音に酔いしれて、村木の頬が上気する。

明日の休みは、満開の桜を撮りに行くつもりだった。

その時、風に揺れるカーテンの陰から音楽が響いてきた。

チェロの音色だった。

寺の先生が練習を始めたのかと思ったが、方角が違う。そのうちヴァイオリンの音色が割り込み、ヴィオラが和した。もう完璧にストリングスのアンサンブルになっている。

笑うように、泣き吸るように、チェロ、ヴィオラ、ヴァイオリンの三種の楽器が、歓喜と悲嘆を交互に様々な音色と味わいで統合していく。

村木は窓辺に立って行ってカーテンを開けた。真っ暗なはずの精錬所の構内に明かりが点っている。モーツァルトの調べも、その方角から聞こえてくる。

目を凝らしてじっと明かりを見つめたが、白い光の中で人が動いている様子が見て取れただけだ。

村木は部屋の中央に戻り、カメラケースの中から十五倍の双眼鏡を取り出した。ついでに時計を見る。午後九時を少し回ったところだった。

急いで窓辺に駆け戻り、双眼鏡のピントリングを回した。揺れる画像をできるだけ静止させようと、肩の力を抜いて双眼鏡を構え直す。

丸く切り抜かれた十五倍の画面の両隅に、爛漫と花を付けた桜の老木が二本立っている。左右から延びた枝の下で、弦楽五重奏団のメンバーが椅子に座って楽器を操っている。し

なやかに動く弓に応じて、モーツァルトの歓喜と悲嘆に彩られた調べが舞う花のように流れてくる。

その五重奏団の頭上に、村木は奇妙なものを見た。

「女だ。裸の女が宙に浮いている」

興奮して大声を出し、その声に慌ててまた画像を大きく揺らした。姿勢を正し、静かに、できるだけ興奮を抑えて双眼鏡を操る。

裸の女は宙に浮いているのではなかった。二本の桜の木に渡した太い竹竿から縄で吊り下げられているのだ。

素っ裸の女は正面を向き、両膝を立てた姿勢で股間を大きく広げている。左右の膝頭を縄で無惨に縛られて吊された姿が、まるで宙に浮いているように見える。

見つめ続ける目が双眼鏡に慣れ、女の表情まで見えるような気がしてきた。しかし、下を向いた女の顔には長い髪が垂れかかり、顔を隠している。時折、全身を襲う苦痛に耐えかねるように裸身をよじった。大きく髪が揺れた瞬間を逃さず、村木は表情を追う。レンズが捉えた黒い瞳に見覚えがあった。

「まさか、M」

声に出した瞬間、双眼鏡を通した村木の視線に気付いたかのように、もだえ動く女の動きが止まった。間違いなく早春の日に、この場所まで案内してきたMに違いなかった。

あの自信に溢れ、自分の美しさを良く知った理知的なMが今、素っ裸のまま満開の花の下に吊り下げられているのだ。

双眼鏡を通して視線を交わし合ったと思った瞬間、画像が揺れ、苦しそうに身体をよじったMの裸身も揺れた。緊縛された裸身の上に、はらはらと白い花びらが散った。花びらは風に乗って、長い黒髪や、滑らかな肩先、大きく開いた股間の上を、意地悪くなぶっていくかのように果てしなく舞った。

村木は全身がかっと熱くなり、何がなんだか分からなくなってしまった。小刻みに頭を振ってカメラケースの前に戻り、習慣的にハイスピードのフィルムをコンタックスに装填した。カメラを首に掛けるやいなや、明かりも消さずに外へ飛び出して行く。

首に掛けたカメラを両手で握ったまま、村木は一心に駆けた。

心地よい春の宵に関わらず、全身から汗が滴り落ちる。五分間ほど走り続けて、水瀬川に架かる鉄橋まで来た。ドウドウと溪谷にこだまする水音と、弦楽五重奏の華麗な音色が

混然と混ざり合う。川風に乗って、微かに甘い花の香りがした。

鉄橋を渡りきった右手に、精錬所の門が聳えている。巨大な鉄扉は細く開かれたままだった。村木は身体を斜めにして門を通り抜け、構内に駆け込む。

五十メートルほど先に演奏会場の明かりが見えた。

モーツァルトの歓喜と悲嘆のアンサンブルは高く、低く、絶えることがないように音色を変え、執拗に繰り返されている。

ほっとして辺りを見回すと、月明かりに照らされた得体の知れぬ建屋や鉄骨の櫓が、闇の中に数知れず続いている。小さな家ほどもあるガスタンクの傾いた支柱の影に回り込み、ねじ曲がった太いパイプの横に身を寄せた。照明に浮かび上がる二本の桜からは五メートルの距離だ。

誰にも悟られる事はなかったが、目の前の演奏会は村木に背を向けていた。

半円を描くように座った弦楽五重奏団の中央に恩師の背中が見える。背筋をまっすぐに伸ばし、一心にチェロを操っている。

チェロの回りに居並ぶヴァイオリンもヴィオラも皆、髪が白くなった女性たちだ。そのうちの三人は村木の恩師だった。第二ヴィオラを操る品の良い老婦人は町医者のお奥さんだ。五人の白髪に桜の花びらが舞い懸かる。

花びらは、二本の老木の間に全裸で吊されたMが悶える度に、梢から散った。

村木の目に剥き出しの背中が見える。長い髪が首の右側から胸へ垂れ下がり、白くのぞいている細いうなじが苦しそうに揺れる。そのうなじに届きそうなほど高く、後ろ手にされた両手が交差され、黒い麻縄で痛々しく縛られている。時折固く握られた手が開き、細い指先が震えた。

村木は握りしめていたカメラを構え、ファインダーをのぞいた。ファインダーの中に広がる異様な美しさに負けないように、何回となくシャッターを切った。

アングルを変え、左側の桜の幹まで視野に入れたとき、急にカメラを持つ手の力が抜けた。

老木の幹の影に陶芸屋がたたずんでいたのだ。

「あっ、先輩。どうして先輩がいるんだ。やはりMと何かあったんだ」と声に出して一枚、シャッターを切り終わったとき、陶芸屋の背後から信じられないものが現れた。

素っ裸で後ろ手に縛られた緑化屋が、照明の中に歩み出てきたのだ。

弦楽五重奏曲第四番ト短調の第一楽章のエンディングが近付き、歓喜と悲嘆を交互に繰

り返す主題が短く繰り返される中で、陶芸屋に腰縄の端を曳かれた緑化屋が、吊されたMに向かって胸を張って歩いて行く。

Mの前に立った緑化屋が、大きく開いた股間にすっと顔を埋める。

しばらくして「ウー、アー」という艶めかしい呻きが、小さくなった楽曲の音色を縫ってMの口から洩れた。

その異様な情景に向かって数回、白いストロボの閃光が走った。楽章最後の音を、ヴァイオリンがそっとおくのと同時だった。

静寂が戻った廃墟に、思わず駆け出した村木の靴音がこだまする。

カメラを握ったまま桜の下に走り出た村木の顔に、陶芸屋の右ストレートがきれいに決まった。カウンターパンチを浴びて地面に尻餅を付いてしまった村木が「俺じゃあないよ、俺じゃあないよ。俺はストロボなんて持ってないよ」と泣き声になって叫ぶ。

急に村木が主役となり、学校の文化祭で上演する喜劇のような場違いな情景が繰り広げられた。

「S・Mショーの次は、お笑いが始まるのかい」

落ち着いた低い声が響き渡り、片手にストロボを着けたニコンを持った産廃屋が、照明の光の輪の中に大きな体を現した。

「俺の仕事を邪魔するやつが、二人揃ってお楽しみってわけかい。たっぷり目の保養をさせてもらったぜ。それに、傑作写真も撮れたようだ。できあがったら一枚と言わず、何枚でも町中に配ってやるから楽しみにしていろ。嫌だったら、つまらない反対運動はやめることだな」

楽しそうに大声を上げる産廃屋に、チェロが静かな口調で話しかけた。

「産廃屋さん。今夜は個人的な演奏会なんだ。騒いでもらっては困るね。最低のマナーは心得てもらわないとね」

「こんなすけべショーには、ちょうどいいマナーと思うがね」

澄ました顔で産廃屋が応じる。

「やくざにお似合いのマナーってことね。品性の卑しさが滲み出ているわ。花見コンサートの意味も知らないで、すけべショーとはよく言ってくれたものよ。開いた口が塞がらないわ」

宙に吊されたMが、怒りに満ちた声を頭上から落とした。

産廃屋が初めて気が付いたかのように、とぼけた顔でMを見上げる。

「いや参ったねえ。素っ裸で吊り下げられた姐さんが一番威勢がいいね。せっかくのお言葉だが、大腿を開ききってご開帳をしているんでは、口が塞がらないのは仕方がないってもんよ。上の口は知らないが、下の口はぱっくりと開きっぱなしだからな。すけべが過ぎるというもんだぜ」

吊り下げられたMの裸身が怒りで真っ赤に染まる。

「性を笑う者はきっと性に泣くわ。覚えておくがいい。今夜のコンサートはあなたのような恥知らずと、元山沢が一切縁を切るという画期的な儀式よ。元山沢を楽しむ人たちが集い合って、この精錬所の過去の罪業を、桜とモーツァルト、そして性の営みで、今宵限りきれいさっぱり洗い流したわ。明日からは二度と過ちは繰り返さないという決意の儀式よ。あなたなどの出る幕はないわ」

「ハハハハハ、盗人にも三分の理とは、よく言ったもんだ。素っ裸で股を広げきって、お楽しみの姐さんにお似合いの言葉だ。こう大っぴらにすけべショーをやられたんじゃストリッパーだって恥ずかしくなる。聞いた風な口を叩く前に、相方の行方でも捜したがいい」

憎々しく笑う産廃屋を睨み付けていたMの視線が、緑化屋と陶芸屋を捜した。二度周囲を見回した目がやっと、桜の陰に立ちすくんでいる陶芸屋の姿を捕らえた。陶芸屋の背後に、素っ裸で後ろ手に緊縛された緑化屋が小さくなって隠れている。Mは唇をきつく噛みしめた。情けなさで涙が出てくる。緊縛された両手を思わず握り締めた。

「ヤイツ緑化屋に陶芸屋、こそこそと隠れやがって。色キチガイの姐さんが一人で恥ずかしがっているぞ。何が反対運動だ、笑わすんじゃない。縮み上がったペニスをちょんぎられないように、せいぜい大事にすることだな」

凄みのきいた声で言って全員を睨み付けてから、産廃屋はゆっくりと背を向けて門の方へ立ち去っていく。

勝ち誇った様子が後ろ姿に溢れ、怒らせた大きな肩先で花が舞った。

二本の桜の間に吊り下げられたMの裸身が、産廃屋を見送って激しく揺れる。

揺れることのない決心が腹の底から改めて沸き上がってくる。

「産廃処分場の建設など、決して私が許さない」

血が出るほどきつく唇を噛みしめ、去っていく産廃屋の背に無言の怒りを浴びせかける。

股間に燃え上がる黒々とした陰毛の上に、白い花びらが積もっていた。

6 役場

五月の連休が終わった後のさわやかな朝、Mはできあがったビラを役場の前で住民に配ることにした。

その日はちょうど、精錬所が閉鎖になり、この鉱山の町が鉱業と縁を切った記念日に当たっていた。

まっ青に澄みきった空が、ひととき高い蒼鉾岳の上空に広がっている。気温は高いが肌を掠める風は気持ちよい。

「美しい五月だ」とMは思った。

目前に迫った山並みを越え、役場の玄関先を照らし出した強い日差しが目には痛かった。グリーン ウェストバックからオレンジ色のサングラスを出してかける。黒のタンクトップからのぞいた白い肩の産毛が金色に染まった。

右手に持った手作りのビラごと両手を高く上げて、大きく伸びをした。山間の空気がおいしい。

「陶芸屋も来ればいいのに」と、Mは声に出して言った。

学校のある修太でさえ来たがったのに、中心になるべき陶芸屋は、展示会に出す作品の遅れを理由にパスすると言った。花見コンサート以来、急に陶芸に精を出すようになったのだ。

「根性なしめ」

また声に出し、ちっぽけな商店街へと続く役場の前の道に目をやった。

「初めてのお客さんだ」

うれしそうな声がこぼれる。

まだ開いていない床屋の角を曲がり、中年の男女が連れだって歩いて来る。

近寄って行ったMを避けるように進路を変えたが、構わず追って行って声をかけた。

「おはようございます。産廃処分場の建設に反対しましょう」と言って二人にビラを渡す。

怪訝そうな顔で「おはよう」と応えてビラを受け取った二人は、歩きながら目を通して

いる。

「まあ」という女の声と、「ほう」という男の声が同時に聞こえ、後ろ姿を見送っているMを二人一緒に振り返った。

「頑張りなさい」

男が愉快そうな声で言い、女がそっと会釈をした。

「ヤッター」とMは思った。最初から、想像した以上の反響だった。

ビラはB五版の大きさだった。用紙を縦に使い、右側にキャビネ大に引き延ばしたカラー写真をタチ落としにして、縦位置においてあった。

写っているのは元山溪谷だ。美しい山並みをバックに、渦を巻く溪流が岩を噛んで前景へと大きく下っている。その上方に、溪谷に架かる赤錆びた鉄橋が遠景で横たわり、左隅にアーチ型の通洞坑の入り口が写っている。鉄橋の太い鉄骨から一条、銀色のワイヤーが溪流に向かって延び、全裸で後ろ手に緊縛された女の両足首に繋がっていた。逆さ吊りになった女の黒い髪を清冽な流水が洗い、白い飛沫が裸身に飛び散っている。きゅっと締まった豊かな尻の割れ目が命の息吹を伝えていた。

その写真に被せて右隅に、縦の文字列で大きく「助けてください」と手書きの見出しが躍っている。

写真下に横長に採ったスペースには、横書きの活字で「水瀬川に新たな鉃毒の恐れ」というヘッドコピーと「産廃処分場建設絶対反対」というサブコピーがバランスを取って配置してあった。

写真の左には、適度に余白を取った位置に建設反対の趣旨を書いたリード文が載っていた。ビラの発行元は「元山沢を楽しむ会」としてある。

とにかく、大きく採った元山溪谷のカラー写真が目を引いた。その美しい風景のただ中に、全裸で縛られて逆さ吊りにされた女と「助けてください」と打たれた見出し。人の目を引くのに十分すぎるデザインだった。

役場を訪れた百人ほどにビラを配り終えた後、Mは反響の素晴らしさに内心ほっとしていた。

「二度も逆さ吊りになった価値が十分あったわ。村木の写真も捨てたものではなかった」と思い、にこやかに笑った。

もっとも村木は、自分の撮った写真が何に使われたかまだ知らない。

花見コンサートの写真を撮りまくった罰だとMは思う。あの時の行為を責めて撮らせた写真だった。

「修太の見出しもいいわ」

何回となく修太が書き直した「助けてください」の、微妙にねじれた筆跡を見直す。

「これで奥さんにも喜んでもらえる」

カラーコピーで三百枚作ったビラの制作資金のほとんどは、町医者のおさんの援助だった。

ビラにしては贅沢すぎる造りだったが、Mは口から口にうわさが広がり、手から手に回されていくビラが作りたかったのだ。手渡してすぐ、読まれることもなく捨てられるものだけは作りたくはなかった。

「よし、配りまくるぞ」

午後の熱い日差しを浴びて額に浮き出た汗を右手で拭い、残ったビラの束を握りしめた。

その時、役場の構内に白い大型のベンツが滑り込んで来た。スモークフィルムが張られた車内は見えなかったが、モクセイの木陰で停車したまま大きなエンジン音を轟かせている。

ちょうど役場を訪れる人が途切れたときだったので、Mはベンツに近付き、運転席の窓をノックした。

音もなく黒い窓が十センチメートルほど下ろされた。

「産廃処分場の建設に反対してください」と言ってビラを差し出す。細い女の手が伸びてビラを受け取り、後部座席から「ありがとよ」と言う掠れた声がした。

聞き覚えのある声に車内を良く見ようとしたが、視線を遮るように窓はすぐ閉められてしまった。

ちょうど右手からやってきた青年にビラを配ろうと、ベンツに背を向けて小走りに急ぐ。「この写真のモデルは誰。きれいな身体だね。この町には、こんないい女はいないんじゃない」

ビラを手にした青年が無邪気に話しかける。

「モデルは私に決まってるでしょう。そんなに気に入ったのなら君も産廃処分場に反対してよ」

目を丸くした青年に楽しそうに訴える。

突然、背にした役場の玄関口で、軋むような金属音が響いた。

ぎょっとしてMが振り返ると、玄関のスロープに車椅子が見えた。二十分ほど前にビラを手渡した十七、八歳のかわいらしい身体障害者の少女が乗っている。

車椅子を後ろから押す真っ黒な巨体が目に飛び込んできた。少女に微笑み掛けようとしたMの顔が急にこわばる。とてもボランティアなどに見えるはずもない産廃屋が、凄い力で車椅子を押して走って来る。車輪の軋む音が静かな役場の構内を圧した。

産廃屋が手を離すやいなや、スピードの乗った車椅子はまっすぐMに向かって突進した。「キャー」という少女の悲鳴が響く。

Mは反射的に手に持ったビラの束を投げ出し、腰を落として両手を広げ、身体全体で車椅子を受け止めた。

胸と膝に強烈な痛みが襲い、全身に衝撃を感じた。少女の細い身体がMに倒れ掛かり、反動で車椅子が斜めに転覆した。

仰向けに転倒したMは、両手で少女の細い身体をきつく抱きしめてコンクリートの地面から守った。

「ふざけたことをするんじゃない」

頭上で大声が響き渡り、怒りで顔を真っ赤にした産廃屋が落ちていたビラの束を蹴散らしていく。憎々しくビラを蹴り散らす足が、仰向けになって少女を抱いたMの尻を蹴りつけた。

身体障害者の少女まで巻き込んだ、最悪の嫌がらせだった。

「卑怯者め」

渾身の力を出して叫ぶと、見下ろす産廃屋の顔に薄笑いが浮かんだ。

「とっとと帰るんだな」

一声言った産廃屋は、もう一度Mの尻を蹴りつけ、きびすを返して玄関に向かった。真紅のスーツを着た秘書役のカナが、無表情に後に続いて役場の中に入っていく。

コンクリートの上に仰向けになったまま、Mはほっと息を吐き周りを見回す。

傍らに、ビラを手にした青年がぼう然として立っている。広い役場の構内のそこかしこに二十人ほどの人が、息を潜めたまま成り行きを見守っているのが見える。

狭い町のことだ。美しい五月の午後に役場で見た信じがたい光景は、ビラとともに住民の間に伝えられていくはずだった。

痛む身体全体が思わず高揚してくる。全身を賭けて車椅子を止めたお陰で、最高のPRができたと思った。口元に笑いが込み上げてくるのが分かる。

Mの笑顔を見て安心したのか、そばに突っ立っていた青年が屈み込み、倒れていた車椅

子を引き起こしてくれた。

駆け寄って来た作業服姿の若い女性と二人で、Mが庇った少女をそっと抱き取り、車椅子に戻して座らせた。

元気良く立ち上がってジーンズの尻をはたくMと少女に、青年が「大丈夫ですか」と声をかけた。

「大丈夫」

少女がしっかりとした小さな声で答え、Mが大声で和した。

四人の間で笑い声が広がる。

「僕も産廃処分場の建設に反対します。それから、この子の車椅子は故障が心配だから、僕が押して送っていきます」

青年が力強く言った。

「でも、君はまだ、役場に行っていないでしょう。用事はいいの」

「いいんです。車を買いたくて印鑑登録に来ただけで、今のオートバイで十分だと思い直したから、いいんです」

「そう、君には車よりバイクが似合うわ」

Mの答えに、青年は真っ白な歯を見せて笑った。

「今度、オートバイの後ろに乗ってください」

「もちろん乗せてもらおうわ」

車椅子を押して遠ざかる青年の背に大声で答える。堅苦しい役場の構内に温かいものが流れ、周りで見ていた二十人近い人がそれを共有した。

Mは心持ち両足を開き、背筋を伸ばして黒いタンクトップの胸を大きく張った。

まぶしい光の中にたたずむ人たちに、これ以上はないという優しさを込めて、大きな声で「ありがとう」と言った。

溜息と、まばらな拍手がMの身体を包んだ。視線を落とすと、タンクトップとジーンズの胸から腰にかけて、白い二条の車輪の痕が見えた。追突の衝撃で落ちたレイバンのサングラスが転がっている。まき散らされて踏みにじられたビラを、作業服の若い女性と老女が集めてくれていた。

「きれいなビラは幾枚もなかったわ。悔しいわね」

作業服の女性が、ビラの束を差し出しながら言った。

「ありがとう。ビラは汚れてしまったけれど、ビラ以上のことを皆さんに知ってもらえた

と思うの」

「本当にそうよ。私に汚れたビラを何枚かちょうだい。工事現場の仲間に配りたいの」
構内にいた人たちも寄って来て、ビラは瞬く間になくなってしまった。

「次ははじめだわ」

厳しい声でMは言って、右上がりになじれてしまったオレンジ色のサングラスをかけ直し、役場の玄関に向かった。

玄関先で、勢い良く飛び出して来た村木と鉢合わせする。

「Mさん困るよ。僕の写真をあんなビラに使うなんて、僕困るよ」

Mの顔を見るなり泣き声を出す。

「あなたが撮った写真だなんて、誰も知るはずがないわよ」

「弱ったなあ。知っている人が来たから困ってるんですよ。僕は地方公務員ですから、政治的な動きは禁じられているんです。全体の奉仕者だから、一部の人の利益を図ることはできないんです。一部の人って、Mさんのことですよ。分かってるんですか。ねえ、困りますよ」

本当に泣き出しそうな声で村木は愚痴をこぼす。

「心配性が過ぎるんじゃない。もっとしっかりしなければ生きていけないわよ。あんな写真、Mが勝手に使ったんだって言えば済むことでしょう」

「でも、著作権がある。やっぱり僕の責任になりますよ」

「それも著作権侵害で私を訴えれば済む事よ。きっと産廃屋が何か言ったのね。さっき、あの人たちが来たでしょう。あなたの所へ行ったの」

「僕の所へなんか来ませんよ。今、凄い剣幕で助役さんと話してます。助役室のドアが開いていて、写真のことも聞こえたんです」

「早く、それを言うのよ」

言い捨てて、村木を置き去りにして役場の中に駆け込む。

受付の女性職員に「助役室はどこ」と声をかけた。

「二階の突き当たり、町長室の隣です」と答えるのを背で聞きながら、階段を二段ずつ駆け上った。

助役室に近付くと、開けられたドアから産廃屋の怒鳴り声が聞こえてきた。

「公務員の親玉がふざけたことをするなってことよ。町長が産廃処分場を誘致すると言っ

ているのに、助役が反対だなんて聞いたことはない。助役といえば、町長の女房役で役人の親玉だろうが。その親玉が手下に写真を撮らせて、反対派に利用させるとは、どういう見か聞かせてもらいたいって言ってるんだ」

「さっきから何度も説明しているように、産業廃棄物処理施設の誘致については、町長が賛成する旨の意見書を添えて、県知事に送達してあります。後は、知事の決断に基づいて粛々と事務を執行するだけです。職員の撮った写真については、職員が関知しないうちに無断で使用されただけの話でしょう。ビラを制作した団体には嚴重に本人から抗議させますが、決して職務で行ったのではないことは申し添えておきます」

「そんなことはどうでもいい。そのビラを配っていた女を、この町に引っ張り込んだのは助役だと聞いているぞ。何か俺たちに含むことがあるのと違うか」

そこまでドアの外で聞いて、Mは室内に入って行った。

思ったより助役室は狭く、両袖の木の事務机の前に応接セットが置いてあるだけの簡単な造りだった。机を背にしたソファに助役がゆったりと座り、向かいの肘掛け椅子に産廃屋が背を向けて座っていた。壁際に立った秘書役のカンナが、Mの顔を見つめてわざとらしく咳をする。

産廃屋が秘書役の合図で振り返る前に、Mは話し始めた。

「私はM。この町の観光パンフレットを請け負った広告会社の社員よ。助役さんに呼ばれてこの町に来たのではないわ」

怒りで顔を真っ赤に染めた産廃屋が、振り返ってMを睨んだ。

「お前なんて、ここに呼んだ覚えはないぞ。恥知らずのすけべ女め。調べは全部済んでいるんだ。広告屋の社員がいつから陶芸屋の住み込みになったんだ。ふざけるのもたいがいにしる」

「私は今、休職中よ。元山沢が好きになったので、この町にホームステイしているだけ。れっきとした住民なのだから、産廃処分場にも反対するのよ」

「地位も金もない露出狂のあばずれ女に今更用はない。つまらないビラにまで汚い裸を晒しやがって、あきれ返ってもものも言えない。でも、助役さんは地位のあるお方だ、露出狂でもない。下手な動きをしてプライバシーまで探られ、今の地位を台無しにしないよう、くれぐれもお気を付けてくださいよ」

産廃屋がMを無視して、もったいを付けて低い声で助役に言うと、カンナが黒い書類鞆から四つ切りの写真を取り出して産廃屋に手渡した。

「挨拶代わりにどうぞ」

冷たい声で言って写真をテーブルに置く。

ピントがボケてはいたが、大きく引き伸ばされた写真の中央に写っているのは確かに助役だった。

助役は黒っぽいスーツ姿で、腰の高さほどのテーブルにうつ伏している。首を巡らしてレンズを見ていなければ、誰が見ても助役とは分からないだろう。だが、少年のように輝く目で助役が振り返って見ているのはレンズではなかった。

レンズの前に半身になった女性が立っている。女性は開いた右手を、テーブルの上につ伏した助役の尻の上で振りかぶっている。助役はその女性を見ている。訴えるような視線は、熱く燃えていた。

助役の尻は剥き出しだった。ズボンと下着が足元まで下ろされている。

白い裸の尻の割れ目の右側には赤く、手の痕が見て取れた。

助役のうつ伏したテーブルの後ろには黒板が写っている。きっとテーブルは教卓に違いない。古ぼけた教室の様子が元山地区の分校を想像させた。

「この町の雲上人が、どんな粗相をしたかは知らないが、剥き出しのケツを突き出して臨時教員にお仕置きされているんじゃ、町民の皆さんも事情が知りたくなるってもんさ」

「私は雲上人ではない」

怒りに満ちた声で助役が答えた。

「まあ、どっちだって俺は構いはしない。ただ助役さんは、おとなしく町長を補佐するのが職分だって事を忘れないでもらいたいだけさ」

低い声で言って産廃屋は立ち上がり、Mを押し退けて部屋を出ていった。すれ違いざま耳元で「今度会ったら殺すぜ」と囁く。

卑劣なやり口ばかり見せ付けられたMは、この男なら本当に殺すだろうと思い、背筋に冷たいものを感じて身震いした。でも、決して負けるわけにはいかない。新しいステージは始まっているのだ。

部屋には疲れ切った表情の助役とMだけが残された。テーブルの上には、裸の尻を突き出した助役と女教師が写った大きな写真が投げ出されたままだ。

「助役さんも産廃処分場に反対なんですね」

居心地の悪さに耐えかねてMが口を開いた。

「勘違いしては困る。私は反対などしていない。住民にとって一番良いことを願い、執行しているだけです。それからMさん、村木の撮った写真を反対のビラに使うのは今日限りやめてください。たとえ公務外で撮ったにしろ、職員には職務専念の義務があります。訴えられたりすれば、決して言い逃れはできない。分かりましたか」

「分かりました。もう使いません」

「分かってくればいいのです。まあ、掛けませんか」

勧められるままにMは、産廃屋の座った椅子に腰を掛けた。目の前の大きな写真が目につき、目のやり場に困る。

「今ご覧になったように、役場には色々な人が来る。Mさんを含め、そうした人すべてに満足して帰ってもらうことなど到底できることではないのです。しかし、大多数の人に満足してもらえるように政策を進めるのが私たちの仕事だ。町長と私はこの町に、鉾毒事件まで含めて、鉾山のすべてを展示する鉾山記念館を作ろうと思ったのです。たとえ、人口が減って町が村の規模にまで落ち込み、滅びることがあっても、この国の歴史と共に歩んだ鉾山の記憶は滅びることはない。この町の住民はその記憶とともに、語り部となっても生き続けるべきだと思ったのです。この事業には膨大な金が必要。私は手作りでもいいから少しずつ、諦めることなくやっていけばいいと思うのだが、選挙を戦う町長には、目に付く実績を上げるために、すぐ事業に取り掛かる資金が必要なのでしょう。産業廃棄物処理施設は迷惑施設です。住民を納得させるための迷惑料として、建設業者は町への寄付を惜しむことはないのですよ」

「よそ者の私に、そんなに話してしまっていいのですか」

「構いません。隠すものなど何一つないのですから、誰にでも同じ事を話しますよ」

「でも、美しい溪谷が産業廃棄物で埋め立てられ、なくなってしまうのは耐えられませんか」

「この町ではかつて、精錬所の煙害で山の緑が一切なくなってしまったこともあったのです。人が今後も生きていかねばならないのだとしたら、なくなることはない自然など、この世の中にあるはずがない。特に、この町を預かる助役として、この町の矜持を込めて、誰にでも言っておきたいと思っていることがある。Mさん、どれほどのものがなくなったとしても、人はその場で生きていくのですよ」

「今も元山沢で生きている人がいます。私もその一人だから、産廃処分場の建設には反対を続けます」

「それも、もうすぐ知事が決めることです。そして、あなた方の反対運動によって、住民の声も沸き上がってくるでしょう。私は結果を待って最善の処置をするだけです」

さっきまで小さく見えた助役の身体が、また堂々とした体軀に戻ったような気がした。

「失礼だがその写真、良かったらMさんが持って行ってください。私は気にならないが、ここに飾って置くわけにはいかない。あなたは、そんな物はすべて、呑み込んでくれるように思うのだが、どうだろうか」

「助役さんの言葉ではないですが、人が男性と女性で生きていかなければならないのだとしたら、個人間に起こる性的な出来事は、すべてを認めるべきだと思っています。様々な性的な出来事を、お互いにもっと知り合った方がいいとさえ思います。この写真も所詮、出来事の一つなのでしょうから、私が持ち帰ります」

テーブルの上の写真を取ってMは立ち上がった。

「お邪魔しました」と言って頭を下げると、助役が立ち上がって軽く会釈をした。

Mはそのまま部屋を出てドアを閉めた。

写真についての説明も弁解も、助役は決してしなかった。一人前の男に出会ったとMは思う。男と女の間にはなんだって有りなのだから、言い繕う必要などない。

それに引き替え、私が気に入る男は根性なしばかりだと嘆いてしまう。

フッと息をついてまじまじと見た四つ切りの写真の中で、助役の裸の尻の割れ目から黒い陰毛が卑猥にのぞいていた。

7 分校

夏休みは都会に帰ろうかとセンセイは思った。

元山地区の分校に付属している教員宿舎で、終業式に合わせた白いワンピースに着替えながら、眼鏡の縁を右手の人差し指で上げた。

指先を見つめ、つまらない癖だと思う。都会に帰ればコンタクトレンズにして髪を茶色に染めることもできる。若さと情熱に任せて分校の教師を引き受けているといった、殊勝な教員のイメージを捨て去ることができるのだ。別に、嫌いなイメージではなかったが、助役の好みで装っているスタイルに執着は感じなかった。

「変わった男だわ」

センセイは助役との出会いの時を思い出してしまう。都会でクラブのコンパニオンをしていたときから、もう二年も経ったのだ。クラブといっても三流の場所だった。酔客に身体を触られることも珍しくはない。

体罰教師の汚名とともに有名私立の教職を追われ、いっそのことと飛び込んだ夜の世界で出張中の助役に出会った。

常連客に連れられてきた助役は、もちろん身分を隠していたが、酒を注ぐセンセイの身のこなしに厳しさがあると、場違いなことを言ったのだ。その一言に気を許し、酔いに任せて前歴を話してしまったセンセイは、身体で誘うコンパニオンとしては失格だったが、厳しい躰を肯定する助役とは意気投合してしまった。

その夜、久しぶりに気持ちの晴れる思いをしたセンセイは、誘われるままに助役のホテルに同行した。

しかし、父ほどの年齢に近い助役はセンセイを抱こうともせず、頻りに母の思い出話をするのだった。幼いころに亡くなって教職にあったという母。その母に生き写しとまで言われ、センセイはくすぐったい気持ちになった。髪を染め、ピアスを飾って大きく胸を開けた姿態に重ね合わされたという、助役の母親像に疑問を持ったりもした。でも、町の助役という身分を明かされ、代理教員として鉾山の町に来て欲しいと言われた時にはびっくりした。即座に、その場しのぎで生きることをやめる決心が付いた。

別に楽しんでしているコンパニオンではなかったし、三人しか子供がいないという山の分校にも興味が湧いてきた。どうしようもないマザーコンプレックスの中年男に、今後を

託すのも面白いと思ったのだ。

その助役から先ほど、電話がかかって来た。

一緒に出掛ける予定になっていた一泊の温泉旅行に行けなくなったというのだ。

県知事が、産業廃棄物処理施設の建設を認可しない腹を固めた、という情報が入ったのだという。町の方針を巡って助役は忙しくなるのだろうと、センセイは思った。でも、「私に関係がないことだ」とも思う。

「私は、助役を通してだけこの町と繋がっている」と感じ続けていた。

子供たちからセンセイと呼ばれてはいても、分校や子供に愛着を感じることはできなかった。

特に、一言も口をきかない祐子には手を焼いていた。頭の悪い子ではなかったが、敏感すぎる神経がいちいち気に障った。立ち居振る舞いや礼儀など、成長してから必要と思われるしつけをしてきたが、一向に聞こうとはしない。口答えをしない代わりに、反抗的としか思われぬ目で、怖じる気配もなくじっとセンセイの目を見つめる。まるで世界の一切を、既に知っているのだという目で見つめるのだ。かわいくない子だと、つい思ってしまう。それに、もう三度も、センセイの目を盗んでいなくなってしまった。祐子に試されているのだ、と思う以外になかった。

その祐子に迎合するかのように、気の弱い光男が行動する。決して祐子に口をきいてももらえるわけではないが、祐子に気持ちを添わせることで、どうしようもない気の弱さを補っているとしか思えなかった。幼児のころに両親を飛行機事故で一瞬のうちに亡くし、こんな山間に住む祖母に引き取られた光男の、やるせない気持ちは分からないではなかったが、弱い者同士で群れようとする行動が鼻に付いた。

やはり、単純明快な修太が一番安心して見ていられた。年相応というか、幼いというか、同じ生意気に見えても祐子と違い、底が割れていて邪気がなかった。

「コンプレックスは苦手だわ」

口に出して言ってみた。

子供が三人しかいない分校で、おかしな子が過半数を超えるのだから、二度目の教師商売も先が見えたと思ってしまう。おまけに、両親と暮らしている子は一人もいない。社会が複雑にねじれすぎているのだ。自分の経験だけで子供を処遇することは既にできなくなっている。やはり大人の世界がいつも、子供たちとは関係なく、勝手に正常という規範を作るのだとセンセイは思った。

「センセイ、祐子がまだ来ないんだけど」

級長を命じてある修太が、当惑した顔で呼びに来た。

時計を見ると、あと二分で始業の時間だった。子供たちには常に、五分前の集合を命じてある。

「終業式に遅刻するようでは困りますね。光男さんは来てるの」

「祐子は自分勝手なんだ。光男は来てるよ」

修太の言葉に満足そうにうなずく。そう、祐子は身勝手なのだ。周囲の人たちの気持ちも考えず、自分自身を閉ざしている。これが自分勝手になければ、何が自分勝手なのかと思う。

「一緒に教室に行きましょう」と言って手をつないでやると、修太の熱い動悸が指先に伝わってくる。かわいい。

一礼して机が三つしかない教室に入り、教壇に備え付けた始業のベルを鳴らす。たとえ子供が三人しかいなくても、きちんと時間のけじめは着けるべきだと思い、町に設置させたベルだった。

元気な声で朝の挨拶を交わし合った後、自分自身どうでもいいと思う終業の講話を始める。話の途中で教室の後ろの戸が開き、うつむいた姿勢で、黙ったまま祐子が入って来た。

「祐子さん。遅刻よ。そこで立っていなさい」

大声で叱って、話の続きをする。

助役からの電話を切ったときから続いていた、もやもやした気分は幾分内輪になっていた。しかし、視線を交わそうともしない祐子の態度が悪びれているように見えて、今度はしゃくにさわった。

十分ほど立たせておいてから席に着かせ、通知票を配ることにする。

教壇の前に三つ並んだ席は、級長の修太を真ん中に、窓際に祐子、廊下側に光男の順で並んでいた。

一人一人名前を呼んで通知票を渡す。テストの成績は一番悪いが、通知票では修太が一番にしてある。何ととっても小学校では学習態度が大事なのだ。それにまだ六年の一学期の成績だ。中学へ送る資料は二学期の成績で十分だった。

三人しかいない教室でも、通知票を受け取った子供の反応は三十人の学級と大差はない。先ず細く聞いてさっと目を通す。思ったほど落ちていない成績に安心すると、大胆に広げ、

しばし見つめる。そのうち人の成績が気になりだし、比べてみたくなる。修太が机の上に自分の通知票を置いたまま、左右をそっと見回した。さっと手を伸ばし、祐子の手から通知票を取り上げる。

ぱっと目を通してから「なんだ、俺より悪いじゃないか」と言って笑った。

立ち上がって、祐子の目の前で通知票をひらひらさせる。それを見て油断した光男の手からも、素早く通知票を奪った。

「あれ、お前、俺より算数ができるんじゃない。生意気なやつだ」

気の弱い光男はもう、べそをかきだしている。

「修太さん、やめなさい。通知票を二人に返すのよ」

腕白小僧そのままの修太の行為に苦笑しながら注意すると、祐子がさっと隣の机に手を伸ばし、修太の通知票を取り上げる。瞬く間に二つに引き裂き、修太に向かって投げ返した。慌てて拾い上げて泣き出す修太を平然と見て、祐子は自分の通知票を取り戻す。遅れて光男がそれになった。

「祐子さん。何をするんですか。いくら修太さんが悪いからといって、人の通知票を破くなんて許しませんよ」

大きな声で叱るが、祐子は動じる気配もない。

「修太さんの通知票を元通りに貼り合わしなさい」

厳しい声で命ずると、今度は自分の通知票を破り捨てた。

どういうわけか、光男までが真似をして、泣きながら通知票を二つに引き裂く。

「自分の一学期の成果を破るなんて、もう許しません。二人とも机に向かって立ちなさい。お仕置きです」

表情も変えずに立ち上がって机の前で後ろを向く祐子と、啜り泣きながらぐずぐずと立ち上がる光男を横目に、センセイは黒板の端に掛けてある竹の笞を手にとった。長さ一メートルほどのよく撓る細身の笞だ。

「最悪のことをしたのだから、センセイは厳しく罰しますよ。初めに三回ずつお尻を打ちます。今日は裸のお尻にします。二人とも、ズボンとスカートを脱いで、下着を足首まで下ろしなさい」

「センセイ、もう二度としませんから、お尻を裸にするのは許してください」

光男が泣きながら哀願する。尻を剥き出しにするのが恥ずかしいのだ。

「だめです。お仕置きなのよ。早く脱ぎなさい」

光男が渋々ズボンを脱ぎ、祐子が唇を噛みしめてスカートを下ろした。二人ともそのまま、下着姿で立ちすくんでいる。

「修太さん。あなたの通知票が破かれたのだから、二人のパンツを脱がしてしまいなさい」

鼻を吸って立ち上がった修太は、先ず光男の背後に立ち、パンツを一息に足元まで下ろした。光男の吸り泣きが一段と激しくなり、剥き出された小さな尻が震えた。

急に元気ついた修太が祐子の方に向かおうとすると、祐子はパンツの両端を摘んで屈み込み、自分で足首まで下ろしてしまった。

機先を制されてしまった修太は大きく鼻を鳴らして教台に上がり、センセイの横に立って二人を見下ろす。

「やーい、臭い尻が二つも並んだ」と、悪態を突く。

修太の声に、唇を噛んだ祐子の頬がさっと赤く染まった。

「二人とも、机に両手を突いてお尻を出しなさい」

尻を剥き出しにされて諦めたのか、二人とも命じられるままに身体を曲げ、机の端に両手を突いて尻を掲げた。

教室中が急に暑くなったような気がする。まだ九時を回ったばかりなのに、今日もまた猛暑になるのかとセンセイは思った。

修太の机を挟んで、微かに汗ばんだ尻が二つ並んでいる。小さくて丸い、かわいらしい尻だが、やはり少年と少女で形が違う。祐子の尻は、もうすぐ大人の女の尻に成長しそうなほど丸く、豊かで、深い尻の割れ目が艶めかしかった。

声も立てずに祐子の尻に見入っていた修太がずっと近寄り、腰に垂れかかっていたシャツの裾を胸の辺りまでたくし上げる。

「センセイが尻を叩きやすいようにするんだ」

勝手にこじつけて言い、光男の後ろに回って同じようにシャツの裾をたくし上げる。しかし、光男の方など見ようともせず、下を向いたまま尻を掲げた祐子の胸を見つめている。大きくたくし上げた白いシャツの裾に、思ったより豊かな乳房の膨らみがこぼれていた。

「さあ、お仕置きを始めます」

二人を怖がらせるために、センセイが大きく厳肅な声で言って祐子の横に立つ。

「祐子さん、お仕置きをするわ。お尻の穴に力を入れて身構えなさい」

声をかけて、竹の笞を大きく振りかぶった。

しなやかに振り下ろした笞が白く丸い尻でピシッと鳴り、赤いミミズ腫れが走った。

しかし祐子は、呻き声すら上げない。じっと下を向いたまま目を大きく開けて歯を食いしばって耐えている。両目から二筋、涙が頬に伝った。センセイには悔し涙にしか見えなからかわいくない。

センセイは光男の横に位置を変えた。やはり、弱い者から落としていかなければだめだと得心がいったのだ。

「今度は光男さんの番よ。いいわね」

言い終わる前に笞を振りかぶり、続けて三発、裸の尻に見舞った。三本のミミズ腫れが柔らかな肌に残った。

「キャー、ヒィー、イタァー、痛いよー、センセイ痛いよ。許して、許して」

身体を振るわせて絶叫し、泣きじゃくる光男に、笞を尻に当てたまま言い聞かせる。

「もう二度としないわね。いい。悪いと思ったのなら手を突いて謝るのよ。分かった」

「謝ります。もう二度としません。お仕置きをやめてください」

「分かったわ。許して上げます。しかし、決して忘れないように、あと二発お尻を打ちます。お尻の穴に力を入れて我慢しなさい」

大きく笞を振りかぶってピシッと一回打つ。少し間を置き、恐怖心を高めさせてからもう一回、ピシッと打った。小さい尻に五本のミミズ腫れができた。

「さあ、謝るのよ」

光男は、ほっと肩をなで下ろし、パンツを穿こうとする。

「だめ、そのままの格好で手を突いて謝りなさい。もう一度お仕置きされたいの」

下半身剥き出しのまま光男は、振り返って前を向いた。つるつるの股間で小さなペニスが、皮を被ったまま萎んでいる。その姿のまま光男は床に正座し、両手を突いて頭を深く下げた。

「悪いことをしました。もう二度としません。許してください」

泣きながら小さな声で許しを乞う。

「大きな声でもう一度、はっきりと言うのよ」

光男は泣き声で、怒鳴るように繰り返した。

「いいわ。お礼はどうしたの」

「お仕置きありがとうございました」

顔を真っ赤にして言い終わると、床に突っ伏して泣きじゃくり始める。

「だめ。立ちなさい。お仕置きの続きがあるのよ。反省のためにそのままの格好で一時間立たせます。分かりましたか」

センセイが厳しい声で言って教卓の端を笞で叩いた。大きな笞音にびっくりして光男が跳ね起き、赤く腫れた尻とペニスを見せて立ち上がった。

大きな目を光らせて興奮した修太が、光男をからかう。

「いい気味だ。祐子の真似ばかりするから恥ずかしい思いをするんだ」

そうだ、まだ祐子がいた。これはまだまだ手間取るかなとセンセイは思った。でも、明日からは夏休みだ。甘い顔は見せられないと表情を引き締めて再び祐子の横に立った。

「祐子さん、あなたも反省しましたか。光男さんは、謝ったから許してやったのよ。あなたも謝りなさい。そうすれば一回のお尻叩きで許します」

「うへー、狡いんだ。いいな」

隣で修太が冷やかす。

「どう、祐子さん。分かったなら首を縦に振りなさい」

センセイの言葉が終わらないうちに祐子は、大きく首を横に振って嫌々をした。

「何て強情で悪い子なのかしら。もう謝っても許しませんからね。十分にお尻の痛みを噛みしめて反省しなさい」

センセイは殊更ゆっくりと笞を振りかぶり、スピードを付けて振り下ろした。

ピシッと小気味よい音が尻で響いた。

またゆっくりと笞を振りかぶり、尻の割れ目を挟んだ反対側の丸い丘を狙って振り下ろす。

ピシッと軽やかな音がした。汗の浮かんだ真っ白な尻に三本の赤いミミズ腫れができて、祐子は呻き声すら上げない。顔を真っ赤にして歯を食いしばり、じっと痛みを耐えている。

センセイの額から汗が滴ってきた。暑い教室の中に、なおさら暑苦しい空気が立ちこめる。遠くセミの声が聞こえた。

「修太さん。祐子さんの足を広げなさい」

喘ぐ声で命じると、祐子の足元にしゃがみ込んだ修太が両足首を両手で持って、左右に大きく広げた。

上を向いた修太の目に、鮮やかな赤い股間が見えた。

ピンクに染まった肉襞の先の、小さな性器の周りに黒い陰毛が淡く生えだしているのが見えた。きゅっとつぼめられた肛門が、祐子の呼吸とともに、そっと開くのがかわいらしい。

修太はつい、Mの股間と比べてしまう。やはり祐子の股間は幼すぎて迫力に欠けると思った途端、自分の股間が熱くなった。上を向いた顔が真っ赤になっていくのが分かる。センセイに分からないように慌てて下を向いた。

難しい算数の問題を考えようと、額に皺を寄せてみたが空しく、股間の熱は益々上がっていき、ペニスははち切れそうなほど大きくなっていった。勝手に膨れ上がっていくペニスに戸惑い、得体の知れぬ恥ずかしさに震えながら助けを呼ぼうとしたが、ここには助けを呼べる相手がいないことが分かっていた。

「Mっ」と修太は、胸の中で大声で助けを呼び、股間の熱が収まることを願った。

センセイの目の下に、両足を左右に開いた祐子の尻があった。股間で小さくなって両手を広げている修太の姿がユーモラスだ。

開かれた尻の割れ目で、剥き出しになった肛門の赤い粘膜がびくびくと動くのが卑猥だった。

センセイは祐子の前に少し離れて立ち、笞を振りかぶった。びくびくと震える肛門に狙いを定めて笞を振り下ろす。

ビシッと、これまでより重い音が響き、尻の割れ目に添って縦にミミズ腫れが走った。僅かばかり的が外れはしたが、あの強情な祐子の尻が痛みで震えたのが分かった。

もう少しだ。センセイは汗の流れ落ちる顔を笞を握った右手で拭ってから、また高々と笞を振り上げた。

慎重に肛門を狙い、手首にスナップをきかせて笞を振り下ろす。

「ヒッ」という呻きが初めて、祐子のきつく閉じられた口から洩れた。白い尻が肛門を守って左右に揺れる。

やっと引き出した祐子の声に我を忘れ、センセイは何度も笞を振り上げ、逃げまどう肛門を狙って打ち据えた。

修太の頭上で傷ついた肛門が左右に逃げまどっている。広げた両手で握った足首が苦痛で暴れる。全身に汗を流しながら、両手に渾身の力を加えて祐子の足首を握りしめる。

熱くはち切れそうなペニスを無視して、上を向いて祐子の股間を食い入るように見つめた。肛門を笞が襲う度に、祐子の呻きは高まり、今や「ヒィー」という長く尾を引いた悲鳴が耳に痛いほど聞こえてくる。

何度目の笞打ちだったろうか。

ひときわ高い悲鳴が聞こえ、逃げまどう尻が止まった。修太の両手の先で暴れていた足首からも力が抜けた。見上げた股間は幾筋ものミミズ腫れが交差し、無惨に傷ついた肛門が力無く蠢いている。赤く腫れ上がった粘膜が痛々しかった。

小刻みに震えている小さな性器の陰から、小さな滴が落ちた。滴は細い雫となり、修太の顔に降り掛かってくる。祐子が失禁したと悟った瞬間、熱く固く張り切っていたペニスが爆発した。

暴力的な快感が、凄まじい速度でペニスの先から脳の間まで、何度も駆けめぐった。熱く焼けたペニスから、祐子の細い雫とは比較にならないほどの奔流がほとばしる。衝撃的な快感が遠ざかってからも、奔流はいつ果てるか分からないほど流れ続けた。「Mっ」と、今度はペニスの中で助けを呼んだ。

ふと「人の痛みも分からない子」と言って頬を張った、Mの恐ろしい表情が甦った。遠く去っていく快感に代わって、身を焼かれるほどの恥ずかしさが込み上げてきて、修太の頬に涙が流れた。初めての射精だった。

「祐子さんは本当に最低な子ね。反省もしないうちに、おしっこを漏らすなんて、あきれてものも言えないわ。もっとたくさん、お仕置きが必要なようね。修太さん、あなたは級長なのだから代わってお尻を打ちなさい。センセイが許します」

頭上から聞こえたセンセイの声で修太は立ち上がった。

両目から流れる涙を拭おうともせず、正面からセンセイの目を見つめる。

「嫌です。祐子は病気なんだ。打ったりしてはいけないんだ。俺もセンセイも人の痛みが分からなかったんだ。早く祐子の手当をしてやろうよ」

駄々っ子のようにセンセイに縋がって訴える修太の声に、遠くから掠れた女の声が重なった。

「山の分校という所は、案外面白い所ね。人が足りないから、子供が先生を教えるんだね。ほんとに感心したよ」

いつから立っていたのか。広い教室の後ろの壁にもたれて、すらっと背の高い女が冷やかす口調で言った。

「あなたは誰ですか。勝手にお教室に入ってもらっては困ります」

予期せぬ侵入者に、センセイが上擦った声で抗議した。

「あたしはカンナ。産廃屋の秘書役のカンナだが、今は秘書じゃないよ。ちょっと強面の現業員をしているところさ」

妙な自己紹介をしながら、ゆっくりと近付いて来る格好も普通ではなかった。

カンナは朱に近い赤のタンクトップに、煉瓦色のジーンズを穿いている。タンクトップの薄い胸の横に黒いショルダーホルスターを吊り、ベレッタM92Fの軍用自動拳銃を入れていた。腰に大型の黒いウエストバックを巻き、幅広の黒のベルトには、四、五本の手錠をぶら下げている。細面の端正な顔は能面のように表情がなく、黒い瞳の上の眉は無かった。

「帰ってください。お教室には関係者以外は立入禁止です」

二人のお仕置きで全身のエネルギーを使い、汗びっしょりになった先生がありったけの威厳を込めてカンナを制止した。

「ふん、よく言うよ。何がお教室だ、拷問蔵かと思ったぜ。もっとも、あたしはそっちの方が得意だけどね。まあ、算数の授業中でなくて助かったよ」

ゆったりとした口調で話しかけ、三人から二メートルの所まで迫って来た。

「早く帰ってください、さもないと、」

震える声で言って、センセイは右手で握った竹の笞を振り上げた。

「ほう、いい度胸しているね。あたしに暴力で刃向かおうというんだ、いつでも受けて立つからかかって来な」

凄みのきいた言葉にセンセイの顔がひきつる。初めてカンナの意図を探った。

「何の用があって、ここに來たのですか」

「やっとう件を聞いてくれたね。あんたの所の子供をさらいに來たのさ」

「なんですって」と言って、センセイはまた笞を振りかぶった。

「眉なし女、帰れ」

修太がセンセイをかばうように走り出て、大声で言った。

素早いフットワークで修太の前に進んだカンナが、鋭く修太の頬を張った。

「人の痛みが分かるようになったんじゃないのかい」

笑いを浮かべて言葉を続ける。

「元気がいいね。お前は修太かい」

「俺は光男だ」

Mとの時と違って、頬を張られても泣き出さなかったことに誇りを持った修太は、余裕を見せようとして嘘をついた。

立たされている光男の肩が小さく震えた。

「素直でいい子だね、ごほうびを上げよう」

さっと伸ばした手が修太の腕を捉えた。右手で修太を抱き寄せて身体に巻き込み、左手でベルトに吊した手錠を取る。修太が放されたときには、後ろ手に手錠をきっかりとかけられてしまっていた。

「これで話は簡単になった。腫れた尻を晒しているのが修太と祐子なんだ。二人とも、このカンナさんが助け出して、いい所に連れて行ってやるからついておいで」

「なんですって。子供たちを誘拐されてたまるもんですか」

大声で言ったセンセイが答を振るった。

鋭い答の打撃を軽く受け流したカンナは、センセイの頬を力いっぱい右手で張った。あまりの衝撃に立ってられず、床に腰を着いてしまったセンセイの背後に回り込み、修太と同様、素早く後ろ手に手錠をかけてしまう。

「あまりに早いカンナさんのお手並みね。時間が余ってしまったから、尻を腫らした修太と祐子の復讐をしてやろうかね」

楽しそうな声で言ったカンナは、乱暴な手つきで後ろ手錠のまま床に座り込んでいるセンセイの髪を持って立ち上がらせる。

「先生、人の痛みを知る番が来たよ」

薄ら笑いを浮かべてセンセイの尻を蹴り、教壇の前まで追い立てる。

「教卓にうつ伏せになんな、大人の流儀でお仕置きをしてやるよ」

冷たく言ったカンナがセンセイをうつ伏せにして両足を開かせ、教卓の左右の脚に手錠で足首を繋ぎ止めた。おもむろにウエストバックから黒い縄を取り出し、センセイの首に犬の首輪のように巻き付ける。その縄尻を引き絞って反対側の脚に厳しく縛り付けてしまう。

あっという間にセンセイは、教卓の上でうつ伏せに繋ぎ止められてしまった。

「このままじゃフェアじゃないね。あんたが打ちのめした子供たちは、みんな尻が剥き出

しだったのだから、先生はオールヌードといこうかね」

薄笑いを浮かべ、拳銃の横に吊った大型の軍用ナイフを無造作に引き抜く。

「こんなに汗をかいて、暑そうでかわいそうだから涼しくしてやるよ」

「ヤメテー」と叫ぶセンセイの悲鳴にお構いなく、カンナは外科医なみの冷静さでナイフを使った。

白いワンピースの襟首に当てた刃を迷いもなく裾まで、一気に切り裂く。返す刃先で両袖を無造作に裁ち切った。

左手で、残骸になったワンピースの白い生地を身体から外す。

もう、センセイの背に残った布地はブラジャーとショーツだけだ。そのブラジャーの紐を刃先に引っ掛けて切り落とした。

「次は一回ではだめそうね。面倒をかけるわ」

楽しそうにつぶやいて、ショーツの生地を摘んでナイフで切った。同様に片側も裁ち切る。

「さあ、臭い尻の御開帳だよ」と言って、辛うじて腰を被っていたレモンイエローのショーツの残骸を股間に落とした。

「意外にきれいな尻なんだね」

剥き出しになった小振りの柔らかな尻を、ナイフの刃を横にしてピシピシと叩きながら感心したように言う。

「ウー」と唸ったセンセイは、素っ裸で後ろ手錠のままうつ伏せになっている。両足を左右に開かされているため、開いた尻の割れ目から赤黒い肛門がのぞいている。

「随分毛深いんだね。尻の穴の周りまで黒い縮れた毛が生えているよ」

カンナの残酷な言葉に、センセイの白い裸身が羞恥で赤く染まった。汗で濡れた尻が恥ずかしさに、わなないている。

「子供の前で、恥ずかしい格好をさせないでください、お願いします」

力のない訴えが、首縄で引き下げられた頭の下から洩れた。

「おや、おかしい事を言うね。さっきまで子供たちに、その恥ずかしい格好をさせていたのは先生じゃないか」

「お願いします。子供の目には触れさせないでください。もうじき思春期なんですから、影響が心配です」

「つまらないことを言わないで、自分の身体を心配した方がいいよ。オケケの生え出した

女の子の尻をまくって、腫れ上がるほど笞打った先生の言葉とも思えない。何が思春期だ。さあ、三人ともこっちに来て、先生の恥ずかしい姿を良く見てやりな」

下半身を剥き出しにしたまま、ぼう然と立っていた祐子が一人でカンナのそばに来た。「ほらご覧。先生といたって丸出しにしちゃえばただの女だよ。恥ずかしがって尻の穴をひくひくさせているよ。ほとんど馬鹿にしか見えないだろう」

祐子の背に合わせて中腰になり、頻りにセンセイをなぶるカンナの頬に、大きな音を立てて祐子の平手打ちが飛んだ。

一瞬事態が分からず、怪訝な顔付きになったカンナがすぐ体勢を立て直し、長い脚を回して祐子の剥き出しの尻を蹴った。さんざん笞打たれた尻を蹴り飛ばされた祐子はひとりたまりもない。背中を見せて床に倒れ込んでしまう。即座に屈み込んだカンナが両腕を背中にねじ曲げ、祐子にも後ろ手錠をかけた。

立ち上がって打たれた左頬に手をやったカンナは、最後に残った光男に声をかけた。「修太。お前も手を後ろに回しな。どいつもこいつもろくなガキじゃないね」

呼び掛けられて修太は、反射的に後ろ手の手錠を鳴らしてしまった。「やばい、光男が本当のことを言う」と思って、暑い室温にも関わらず冷や汗が吹き出た。しかし、修太と呼び掛けられた光男は黙って後ろを向き、両手を背中に回した。カチッと手錠をかける音が教室に響く。

「修太が一番素直だね。痛くしないようにしてやるよ」

カンナの言葉に修太は、また顔が熱く火照った。けちくさい嘘などつかなければ良かったと思う。

「それにしても、この先生は子供の教育がなってないね。行き掛けの駄賃にきっちり、お仕置きをしてやるからね」

床に落ちていた竹の笞を拾ったカンナは、センセイの掲げた尻の前に立った。

「さあ、音楽の授業だよ。剥き出しの恥ずかしい尻を振って、大きな声で歌うんだね」

言い終わらぬうちに、振りかぶった笞が打ち下ろされた。

ピシッというかん高い、素肌を打つ音が子供たちの耳を圧した。

「ヒッー」という悲鳴がセンセイの口を突いた。

笞は何度も何度も数え切れないほど、センセイの剥き出しになった尻で位置を変え、角度を変えて打ち下ろされた。

高く、低く、途切れることなく、陰惨な悲鳴が教室中にこだました。

「あれ、笞が折れてしまったよ。たわいがないねえ」

急に静まり返った教室に、カンナのとぼけた声が響いた。

「まあ、こんなところで勘弁してやるか。こらえ性もなく糞、小便を垂れ流されたんじゃ、臭くてやってられないよ」

ヒクヒクと痙攣しているセンセイの裸身が、恥ずかしさにまた赤く染まった。

白い尻全体が赤く腫れ上がっていた。無数のミミズ腫れが尻の割れ目を挟んで錯綜し、所々で皮膚が裂けて血が滲んでいる。執拗に狙い打たれた肛門は赤黒く爛れ、括約筋が力無く弛緩してしまっている。

その肛門の周囲は排泄物で汚れていた。足下には多量の糞尿で水たまりができていた。

笞を投げ捨てたカンナが素手で、二倍ほどに赤く腫れ上がった尻を叩いた。

「ヒィー」呻き声に似た長い悲鳴が、センセイの口を突く。

「よく鳴く先生だね。名残惜しいけれど、そろそろさよならするよ。子供はもらっていくから、保護者によろしく言うておくんだよ。それから、あたしたちが半端じゃないことは、もう飽きるほど分かったはずだ。警察には頼らない方が身のためだよ」

静かな口調で話し終えたカンナは、ウエストバックから細縄を取り出す。

恐ろしさに顔が蒼白になった祐子と光男を小突いて並ばせ、二人の手錠を手にした縄で連結してしまった。

「さあ、あんたはこっちだよ」

修太の手錠に手をかけて、後ろ向きに教卓の方へ曳いていく。センセイの首から延びた縄の前で正座させ、片方の手錠を外し、縄に通してからかけ直した。

「じゃあ凱旋するからね」と言って、祐子と光男を後ろ手に連結した縄尻を持って歩き始める。

下半身を剥き出しにした祐子と光男が、肩をぶつけ合いながら曳き立てられて行く。

正座させられたままの修太が大声を出した。

「俺も連れていけ。眉なし女。俺が修太だ。お前は間違ってるんだぞ」

叫びながら立ち上がろうとすると、後ろでセンセイの悲鳴が上がった。首に繫いだ縄に修太の手錠が連結されているため、喉を絞められたのだ。

「畜生。俺が修太だ。俺を連れて行け」

再び正座して叫ぶが、祐子と光男を曳き立てていくカンナは、高らかな笑いを残して教室を出て行ってしまった。

泣き声になって「連れて行け、連れて行け」と叫ぶ修太の声が、蟬時雨の戸外にまで轟き渡った。

8 通洞坑（1）

朝の九時前だというのに、大気はもう焼けるように暑い。

日差しはまだ、背後に立ち並ぶ山塊を越えて差し込んで来なかったが、昨日さんざん炙られた地面が未だに熱の放射を続けているようだった。

Mは肩に下げた重いコンタックスAXを揺すって、元山溪谷への道を急ぐ。カメラは嫌がる村木から無理やり借りたものだ。広告会社の指示で、溪谷の写真を撮らねばならなかった。昨日受け取ったファックスには、休職を許可したのだからパンフレット用の写真を一枚撮れと命じてあった。どう入手したのか、Mがビラに使用したのと同じ図柄が欲しいという。ただし裸は要らないとのことだ。今更村木に頼むわけにいかず、仕方なしに撮影することにした。まだ退職したくなかったし、下流の市にまで、数少ないビラが行き渡っているのが嬉しかった。

この一か月、Mは町で開かれる産廃処分場反対のミニ集会に、毎日のように呼ばれていた。

役場で配ったビラが、住民の間に大きな反響を呼んだのだ。

新たな鉰毒の恐れが、住民の不安を呼び起こしていた。既に鉰山と縁を切っている住民には、なんの遠慮もない。自分たちの暮らしが、健康が、阻害されることだけを恐れたのだ。そして何よりも説得力があったのは、この町のかつての繁栄の基礎を築いた元山鉰のあった場所に、未だに住み続ける住民がいて、その住民が体を張って、産廃処分場の建設に反対をしているという事実だった。

もう、知事も産廃処分場建設を認可することはできないだろうと、Mは思う。

やっと産廃屋を追い詰めたのだ。産廃屋に残された手段は、Mたち住民を谷から追い払うことしかない。できるはずがないとMは思っていたかった。元山沢に住民がいる限り、谷は自然のまま残るに違いないのだ。

Mは目前の勝利を予感し、足取りが軽くなった。溪谷に近付いたためか、吹く風も涼しく感じられてきた。

Mはしっかりした岩を選びながら崖を下り、渦巻く溪流に大きく突き出た岩場にたどり着いた。村木が写真を撮った場所に違いなかった。

腰を落としてカメラを構える。ちょうど100ミリほどの画角で、村木の撮った写真と同様な構図ができた。ワイドレンズを使ったのかと思っていたが、鉄橋まで結構距離があったのだ。そのまま絞りを変えながら三回シャッターを切ったところで、白い大型車が対岸の道路を上って来て、鉄橋の前で停車してしまった。

思わぬ邪魔に創作意欲をそがれ、ファインダーから目を外して車を見つめた。一向に動かぬ車に腹が立ち、立ち上がったとき左側のドアが開いた。赤い服を着た女が車から降り立ち、後部ドアを開けた。半身を車内に入れて、しばらく何かしているようだ。やがて、二人寄り添うようにした子供が降りてきた。二人の子供を先にして三人で鉄橋を渡ろうとする。

おかしい三人組を良く見ようと、200ミリにズームアップしてファインダーをのぞく。フォーカスボタンを押すと電子音がしてピントが合った。

先頭に行く二人は男の子と女の子だ。下半身を剥き出しにされ、後ろ手錠に縛られていた。その手錠は二人一緒に縄で連結されている。ヨチヨチと危なげに、鉄骨だけになった鉄橋を渡って行く。渡って行くというより、渡らせられていた。

黒いザックを背負った女が手錠に繫いだ縄尻を手にして、子供たちを追い立てているのだ。

距離が開いているため、200ミリの望遠でも確かな表情までは見て取れなかった。しかし、女の雰囲気に見覚えがあった。タンクトップとジーンズという格好だったが、その赤い色がすぐ、産廃屋の秘書役のカナを思い出させた。

「誘拐」という卑劣な言葉が即座に浮かんできた。慌てて子供たちを良く見たが、男の子は修太ではない。光男と祐子に違いないとMは思った。修太の姿が見えないことに安堵と不安が交差する。

三人が溪谷を渡って下るつもりなら、急げば三分で行き会えるはずだった。

Mはカメラを首に下げ、力強く崖を上り始めた。

突き出た山の端を回り込めば通洞坑の入り口という所まで、Mは息せき切って走ってきたが一行の姿はなかった。

石をアーチ状に組んだ坑口の前まで行ってみたが、対岸に止まった白いベンツが見えるだけで人の姿はない。

辺りを見渡し、上流に向かったのかと思ったとき、坑口を閉ざした赤錆びた鉄扉の潜り

戸の部分に微妙なずれを見出した。下ろされていたはずの錠も見当たらない。

即座に鉄の潜り戸を開けて踏み込もうとしたが、すんでの所で思いとどまった。当然中は真っ暗闇のはずだった。Mにライトの用意はない。一行が坑内に入っているとすれば、闇に目が慣れたカンナに分がある。今日の服装も暗闇では不利と思われた。Mには珍しく、白のタンクトップにホワイトジーンズという姿だった。おまけに帽子も靴も白だ。

「ついてないな」とつぶやき、鉄扉の前にうずくまって目を閉じ、中の様子に耳を澄ませた。

二分間ほどそのままの姿勢でいたが、中からは物音も聞こえてこない。やはり上流の方に行ったのかと思ったが、入り口の錠が外れた通洞坑をチェックしないわけにはいかない。

Mは姿勢を低くしたままそっと、辛うじて身体が通る程度に潜り戸を開け、素早く身体を滑り込ませた。前方に広がる漆黒の闇の中に、一瞬ポッと光る明かりが見えたと思ったが、すぐ闇に包まれてしまった。

熱く焼けた肌をひんやりとした空気が包む。思ったより広く感じる坑道には、意外に新鮮な空気が流れていた。各所に外に通じた空気抜きがあるに違いない。坑道の奥からチョロチョロと水の流れる音が聞こえてくる。地下水が流れ出しているのだ。

闇の奥から、じっと息を凝らしている人の気配だけが不気味に伝わってきた。静まり返った闇が、張りつめた緊張感さえ運んでくる。

Mはカメラを置き、側壁に身を寄せて屈み込んだ。

入り口からぼんやりと射し込む光で、岩盤に打ち込まれた太い坑木の列が見える。坑木は天井にも水平に渡され、向かいの岩盤から突き出た垂直の坑木で支えられている。まるで鳥居のような坑木の列が、ずっと奥まで続いているらしかった。視線を落とすと、黒い地面の中央に、トロッコのレールの跡がまっすぐ奥へと続いている。枕木だけを残し、レールは撤去してしまっている。等間隔で続く枕木が肋骨のように見えた。

意外に良く見渡せる視界が、M自身も暗闇の中から見通されている危険に気付かせた。身を屈めたまま音を立てないように、そっと奥の闇に紛れ込んでいく。

しばらく進むと立ち止まって、全身で闇の奥の気配をうかがう。この動作を何回も繰り返すうち、果てしないと思われる闇の奥から、微かに地面を擦る靴音が聞こえてきた。身じろぎする人の波動も伝わってくる。

入り口から百メートルほど進んだはずだ。

屈み込んだ姿勢で更に進み、すぐ目の下にあるはずの白いトレッキングシューズさえ見

えなくなったとき、意外な近さでかん高い声が上がった。

「怖いよう、怖いよう」

二度、子供の声が響いた。男の子の声だった。光男に違いない。坑道の割には残響が少ない。

聞き取りやすい声だったが距離がつかめない。Mは駆け出したくなる気持ちを押さえて、闇の奥をじっとうかがった。

しばらく間を置いて、再び「怖いよう、怖いよう」と光男の声が響いた。

突然、正面から目を貫く鋭い光を浴びせられた。少し外れた光の焦点が顔に向かって、修正される。その隙にMは、突き出た坑木の横に素早く張り付くが、光線は的確にMの顔を捉えた。

Mにとって幸いなことに、光線でMを捉えたカンナは、その優位さを冷静さに変えることなく、凄い速度でMに向かって突進してきたのだ。

向かってくる光線のまぶしさに固く目をつむったMは、カンナの動きにだけ精神を集中させた。屈み込んだままのMに、カンナの強烈な足蹴りが飛んだ。Mは反射的に倒れ込んで蹴りを避ける。

Mの肩があった位置で、固い坑木にカンナの蹴りが決まる。カンナは手にしたマグライトとともに地面に崩れ落ちた。すかさず倒れた身体にMがのし掛かり、ライトを奪い取る。頻りにライトを奪い返そうとするカンナの手を、マグライトの長い柄でしたたか打ちのめした。

「キャッ」という悲鳴がカンナの口を突く。

自信を持ったMは、ライトを左手に持ち替え右腕でカンナの首を抱きかかえて締めつける。思いの外カンナは強くはないと思った。

腰を曲げた姿勢でカンナを立ち上がらせ、首を絞める右腕に力を込めてカンナの抵抗心を奪う。左手を挙げて坑道の奥をライトで照らしだした。

五メートルほど奥に子供たちの姿が見える。寄り添って立ちすくんだ二人は素っ裸に剥かれていた。

思わずカンナの首を絞めた右腕に力がこもる。腰を折って尻を突きだしたカンナが腕の下で「ヒー」と呻いた。

「もう大丈夫、すぐ助けてやるわ」

二人に大きく声をかけて、カンナを引きずりながら近付いていく。

立ちすくむ子供たちの二メートルほど前の枕木の上に、ぽつんと置いてあるランタンが見えた。蛍光灯を光源にした電池式のランタンだった。マグライトを持った左手が自由になると思ったMは、カンナの首を右腕で締め上げたまま屈み込み、ランタンを点けようとした。その僅かな隙をカンナが突く。

カンナは身体を外側にひねって地面を蹴り、横に倒れ込んだのだ。不安定な格好のままカンナに倒れ込まれたMは、首を抱え込んだ姿勢で後ろ向きに地面に倒れ落ちた。運悪く後頭部が枕木に当たり、鋭い衝撃と痛みが脳に渦巻いた。

薄れかかった意識の隅で、咳き込むカンナの喘ぎと、カチャカチャ鳴る金属音を聞いた。

両腕を背中に回される痛みで意識が戻ったときには、カチッという音とともに後ろ手に手錠をかけられてしまっていた。

断然優位に立ったはずのカンナは、相変わらず苦しそうに咳き込んでいる。込み上げる吐き気に耐えて喘ぎ、落ちていたマグライトを拾う。そのまま入り口に向かって、右足を引きずって歩いて行く。

意識のはっきりしてきたMの視界に、遠ざかっていく明かりが見えた。

よろける足で起き上がったMは、後ろ手錠のままカンナを追った。何度も枕木につまずいて転び、胸と肩を手酷く打った。あと五メートルの所まで追い縋ったMの目を、まぶしい夏の光が打った、瞳を打つ痛みで立ち止まったとき、鉄の潜り戸が嫌な音を立てて閉じられ、闇が戻った。続いて、錠のおろされる金属音が聞こえた。

慌てて戸の前まで進み、渾身の力を込めて肩で押すが、錠の外れる可能性は皆無だった。

しばらくして、遠くにベンツのエンジン音が聞こえ、また静寂と闇が戻った。

「出口なしってわけね」

仕方なく笑って見たが、優位に立ったカンナがなぜ坑道を閉ざしただけで去ってしまったのか分からなかった。

カンナは産廃処分場に反対している住人の子供を狙って誘拐し、監禁したのだ。皆殺しにするのでない限り、後は無体な要求が待っているだけだと思われた。それだけに修太の姿が見えないことが不安だった。

「怖いよう、寒いよう」

また光男の声が聞こえた。

「待っていなさい。今行くわ」と大声で闇に叫んで、Mは漆黒の中に慎重に歩を進めてい

く。中央に敷かれたレールの跡を、枕木につまずかないようにゆっくりと歩いて行った。
「怖いよう、暗いよう」と泣き声になった光男の声を距離の頼りにして進む。時折「大丈夫よ、すぐだからね」と大声を出して子供たちを元気付ける。

それにしても祐子は、こんな状況でも人を頼らない。自閉症といっても恐怖は感じるの
だろうと思い不憫になる。

光男の泣き声がすぐ近くになった。足が枕木に触れる度に一本一本慎重に足で探る。さ
っきの格闘で転がらなかった限り、そろそろランタンがあるはずだった。耳の間近で上
がる光男の悲鳴が煩わしい。

「泣くのはやめなさい。もうすぐ明るくして上げるから、黙りなさい」

光男は黙った代わりに、頻りに鼻を吸り始める。

十数本の枕木を丁寧に足で探ったが、ランタンは見当たらない。両手が使えればと情け
なくなったとき。足先が何かに触れた。

胸のときめきを感じながら後ろを向いてしゃがみ込み、手錠をかけられた両手で空間を
探る。やっと両手に持てたランタンのスイッチと思われる部分を、指先であれこれと操作
する。頬に当たった水滴にびくっとしたとき、突然ランタンが点った。

三人の周りはいまるで昼のように明るくなった。

ちっぽけな蛍光灯がこんなに明るいものとは、今まで気付いたこともなかった。その明
るさの周りを漆黒が押し包んでいる。明かりのお陰で逆に、闇が黒く恐ろしく感じられる
のだ。

ランタンの光に照らされて、無惨に裸に剥かれた少年と少女が肩を寄せて後ろ手錠のま
ま震えている。タンクトップの肩先が、ひんやりとするほどの肌寒さなのだ。時折、暗い
天井から太い坑木を伝って冷たい滴が頬に落ちる。

三人のいる場所は坑道の分岐点になっていて広々としていた。片側の低くなった部分を、
地下水が音もなく流れていた。その先の分岐した狭い坑道の入り口付近には、直径二メー
トルほどの池ができている。

「さあ、明るくなったでしょう。もう怖くはないわ。私はM。みんなの友達の修太と住ん
でいるのよ、だからみんなとも友達。いいわね」

元気に声をかけると、やっと光男の顔に微笑みが浮かんだ。祐子の顔も嬉しそうに和ん
でいる。

「ところで修太はどうしたの」

Mが聞くと、途端に一步踏み出した光男が口を尖らせて話し始めた。

「修太は、センセイと一緒に学校で縛られているよ。でも、あいつは狡いんだ。自分のことを光男だって、あの眉なし女に言ったんだ。だから、僕が修太にされて、こんな目にあってしまったんだ。でも、僕後悔しない。修太も恨まない。祐子と一緒にだからそれでいいんだ」

皮の被った小さなペニスを振り立てて、まくし立てる。まだ子供の身体から抜けきっていない幼い裸身だ。

「そう、祐子と一緒に良かったわね。でも、もう少し男らしくなれると、祐子が喜んでくれるかも知れないね」

光男の頬がさっと赤くなり、肩が落ちた。隣の祐子を横目でうかがう。祐子の方が五センチメートルは背が高い。頻りに光男に背を向けようとしている。明かりが点いたため、裸を見られるのが恥ずかしいのだ。もう、かなり少女に成長した裸身だった。胸が膨らみウエストのくびれが目につき始めていた。腰つきも立派になり、股間にうっすらと陰毛が萌えだしているのが見える。

「寒いでしょう。さあ、二人とも私の所に来なさい」

声をかけると二人してMの身体に寄り添った。光男が前に回り、祐子が背後に回った。全員が後ろ手錠をかけられているため、抱き合うこともできず、猫のように身を擦り寄せるばかりだ。子供たちの肌が冷たかった。

「ここは寒すぎるわ。みんなで入り口の所に行きましょう。あそこなら、少し光が入るし暖かいわ。しっかり私についてくるのよ、いいわね」

後ろ手にランタンを持ったMの後を、裸の子供たちが追う。ユーモラスな図だが、子供たちは歩きやすいはずだとMは思った。

出口を閉ざした鉄の潜り戸の前にMと光男は腰を下ろした。

「ほら、暖かいでしょう。外の光も少し入ってくる。閉じこめられてしまったけど、すぐ助けが来るからね」

Mが明るい声で言うと、光男が怯えた声で応える。

「そうかなあ。また、あの怖い眉なし女が来るかも知れない。だってあいつが鍵を持っているんだ」

「あの人はもう来ないわ。私が懲らしめたのを知っているでしょう。私と一緒にいれば大

丈夫よ」

「それはそうだけど。僕らがここにいることは誰も知らないんだ」

「悲感的にならないの。私がここに来ることは修太のお父さんが知っているんだから、きっと捜しに来るわ」

言ってみてから時間が気になった。陶芸屋が捜しに来るとしても、きっと日が落ちてからだと思った。産廃屋の方が早く来るに違いないと確信したが、子供たちに言うわけにはいかなかった。

「祐子も座りなさい。地面が乾いているから裸でも気持ち悪くないわ」

話題を変えて、まだ立ったままの祐子に声をかけた。

「祐子は座れないんだ」

光男が代わって答えた。

「えっ、どうして」

「お尻が腫れ上がっていて、痛くて座れないんだ。きっとお尻の穴も爛れているんだ。センセイがあんなに打つからいけないんだ。僕は五発だけだったから座れるけど、祐子は数え切れないほど笞で打たれたんだ」

光男が吐き捨てるように言った。

「えっ」と絶句したMは、静かに祐子に言った。

「後ろを向いて、お尻を見せなさい。傷口が汚れて膿んだりしたら取り返しがつかないわよ」

もじもじする祐子に「見せなさい」と優しく、強い声で言った。

後ろ向きになった祐子に、ランタンを跨いで足を広げるように命じる。

ランタンの光に下から照らされた祐子の尻は悲惨だった。尻の割れ目を挟んで無数のミミズ腫れが縦に走っている。肛門の周りは赤黒く爛れ、その全体が泥や埃で汚れていた。

「すぐ治療しなければだめよ。ここでは仕方がないから、とりあえずさっきまでいた場所に戻って地下水で洗いましょう。光男はここで待っていなさい」

「嫌だ、僕も行く。独りじゃ怖くて待ってられない」とべそをかく。

仕方なく同行を許し、さっきと同じように後ろ手でランタンを持って、もと来た道を帰って行った。

地下水の池の畔にランタンを置き、祐子に池に入るよう命じた。

「しばらくお尻を水に浸けてから、良く洗った手で丁寧に洗うのよ。水が冷たいからあまり傷に沁みないし、腫れを冷やすこともできるわ」

言われるままに祐子は池の中央まで進み、剥き出しの尻を水に浸けた。池といっても地下水が広がっているだけなので適度な流れがある。祐子は尻を水に浸けたまま、後ろ手も手錠ごと水に浸けてよく洗っている。二分ほど尻を水に浸けさせてから、手を使って丁寧に洗うように言った。

Mも池の縁に膝をついて水で口をすすいだ。冷たくて清潔な水の味が口中に広がる。

それにしても、まだ未熟な性を無惨に痛めつけるなど、とても許せることでなかった。

「その先生も懲らしめてやるわ」

つい声に出して言ってしまった。

「センセイは眉なし女に、祐子より酷く痛めつけられたんだ。それも素っ裸にされてだよ。ほんと、怖かったよ」

光男が興奮した声で言った。

「そう、あのカンナが」と言って、Mは口を閉じてしまった。

後ろ手で尻を洗っている祐子に声をかける。

「もういいわ。上がりなさい。ここに来て私にお尻を出してしゃがみなさい」

良く洗えたかどうか検査をされると思った祐子は、渋々近寄ってきて、腫れた尻を突きだしてしゃがみ込んだ。

「ここでは何の治療もできないから、私が舐めるわ。悪い病気はないから大丈夫よ。さあ、大きく足を開きなさい」

後ろ手に手錠をかけられた不安定な姿勢のままMは横になって、祐子の大きく開かれた尻に口を付けた。肛門を中心にゆっくり舌を這わせる。爛れた肛門が舌に悲しい。思わず涙がこぼれた。子供たちに涙を悟られないよう、股間の奥まで首を伸ばし、舌を這わせる。

足を開いてしゃがみ込んだ祐子も尻を上下左右に振って、Mが良く舐められるように協力する。冷たかった尻が暖くなるまで、Mは尻に舌を這わせ続けた。

仰向けになって性器の近くまである筈痕を舐めているとき、祐子の目からこぼれ落ちる涙を見た。

「Mは、動物のお母さんみたいだ」

横で見ていた光男が感に堪えたような声を出した。

「お姉さんと言ってくれる」

股間で答えると光男が笑った。その笑い声に混じって確かに、祐子の笑い声も聞いたとMは思った。

9 事務所

「なんだって、ガキを誘拐したって。早まったことをしてくれたな。これから県知事に裏工作をしても、まだ間に合うんだ。代議士だって使える。大学から学者を呼ぶこともできるんだ。誘拐だと警察が入る。とんでも無いことになるぞ」

「そんな悠長な時間は、あたしには残っていないよ。どんなことをしたって、あたしたちの目的をかなえるんだ。負け犬なんかになってたまるか。もう、負け続けることには懲り懲りなんだ」

古ぼけたコンクリート造りの部屋に、産廃屋の低い掠れ声とカンナの興奮した高い声が響いた。

小さな窓を通して、くたびれきったクーラーの室外機のノイズが聞こえてくる。鉦山と町を繋ぐ道路を握するように建った、三階建ての事務所の二階だった。あと三か月で町が解体する予定のビルに、鉦山会社の親企業の許可を理由に産廃屋が事務所を開いて一年になる。

「とにかく考えが甘いんだよ。俺たちの仕事は遊びでやってるんじゃない。産廃処分場建設の認可を取ることが先決なんだ。その後はゼネコンのおえらさんたちが何とかする。俺たちはいわば、現地対策本部なんだから押すだけではだめだ。反対派なんて、認可を取ってから一人ずつ締め付ければいい。お前のやり方は後先が逆になってるんだ。百歩譲って誘拐するにしても、何で三人まとめてしない。やり方も中途半端だ」

「反対の要望書に署名したのは誘拐した二人の親よ。子供をネタに要望書を取り下げさせるのよ。もっと締め上げれば、子供を帰すことを条件に谷から追い出すこともできるかもしれない」

「とにかく甘いんだよ。それに、Mにやられて帰ってきたんじゃない目も当てられない」

聞いていたカンナの肩が怒りで震えだした。

「あの女も署名しているんだ。ちゃんと手錠をかけて閉じこめてきたんだから、たっぷり痛い目に遭わせて賛成の署名に変えさせればいいんだ」

ソファーに座って大きな足を前のテーブルに投げ出したまま、産廃屋がぼそっと言った。

「俺は気に入らないな」

テーブルの前の肘掛け椅子に座っていたカンナが、椅子を鳴らして立ち上がった。タン

クトップに隠された薄い胸が激しく上下する。眉があつたらへの字になって逆立ったに違いない。相変わらず左脇に黒いショルダーホルスターに入れたベレッタM9 2 Fを吊っている。

「気に入るも、入らないもあるもんか。あたしはもうガキを二人誘拐して、Mと一緒に手錠をかけて通洞坑に閉じ込めてあるんだ。あんたがビビってるんなら、独りで戻ってけじめてくるよ。もう、あたしには時間がないんだ」

顔全体を真っ赤にして叫ぶと両手を頭に上げ、茶色に染めたショートカットの髪を引きむしった。

乱暴な手の動きに应じて、頭髮全体がすっぱりと引き抜かれた。

無毛の頭皮が窓から射す夏の日差しに輝く。歪んだ口元からのぞいた白い歯茎に赤く、血が滲んでいた。

慌てて立ち上がった産廃屋が、身体を折って嘔吐をこらえているカンナに駆け寄る。

「また具合が悪いのか」

いつになく優しく尋ねると、カンナが顔を上げる。痛みに耐えているのか、両目に涙が滲んでいた。

「長かった夏休みが終わってしまうんだ。きっと、全身の血が反乱を起こしたんだろう。強い抗ガン剤と放射線を使っても、いつまで持つか分からないと医者が言ったろう。休暇みたいなもんだって。一年続いた夏休みなんだから、文句は言えないよ。とにかくもう、時間がないんだ。このまま負けるわけにはいかない。今更ベッドの上で、仏様面している柄じゃないんだ。独りでもけじめてやる」

「分かった。俺も行こう。かつらを被れよ、秘書役らしくないぞ」

疲れ果てた声で産廃屋が応えた。

「もう、こんなものは要らない。秘書役はやめたよ、兄さん。また妹に戻してもらうからね」

汚らしいものを見るように、手にした茶髪のかつらに目をやったカンナは、部屋の隅の屑籠に、そのままかつらを投げ入れてしまった。

壁に並んだロッカーを開け、赤い野球帽を目深に被る。

「これで十分よ。用意ができたわ。兄さんはいいの」

産廃屋の目尻に涙が浮かんだ。カンナに見られないようにロッカーを開け、大型のランタンとマグライトを出した。しゃがみ込んで新しい電池に入れ替える。

最下段の奥に手を伸ばし、平たい木箱を取り出す。

「持っていくの」

カンナが背中に声をかけた。無言でうなずき、木箱を開ける。

ずっしりとしたトカレフがガンブルーに輝いている。銃把を飾る赤い星が不気味だ。中国製の八連発自動拳銃、口径7・62ミリだった。

マガジンを抜いて弾丸が装填されていることを確かめる。黒いマガジンからのぞいた金色に光る薬挟の上に涙がこぼれた。

「用意はいいぞ」

力無く声を出した。

「妙に湿っぽい声を出すね。これから戦に行く風には見えないよ」

「大丈夫か。痛みはないのか」

産廃屋はつい聞いてしまう。

「つまらないことを聞かないでよ。体中が痛むんだから、冗談を聞いたって笑ってられないんだよ」

言った後、きつく唇を噛みしめる。

産廃屋の目頭がまた熱くなった。

「行くぞ」

無理に元気な声を出してカンナの前に立った。

照明機材と、さり気なくトカレフを入れたバックを肩にしてドアを開ける。

「何が白血病だ」

後ろからカンナの舌打ちが聞こえた。

修太は後ろ手錠のまま正座した姿勢で半身をひねり、懸命に歯を使った。

センセイの首を巻き、教卓の脚へと引き延ばされて括り付けられた縄を、歯で噛み切ろうとしていた。

口の中に縄の繊維が残り、唾とともに喉を通っていく。もう少しで噛み切れそうだった。細くなった縄の感触に喜び、首を突きだして曲げ、犬歯できつく縄を噛みしめる。

頭を左右に大きく振ると、ギシギシと音を立てた後ぷつんと縄が切れた。同時に喉を絞められたセンセイの「ウー」という呻きが頭上で聞こえた。

「センセイ、縄が切れたよ」

大きな声で言って立ち上がり、教卓にうつ伏したセンセイの白い裸身を見下ろす。

「ありがとう。ちょっと後ろを向いていて」

うつ伏したまま修太を見上げたセンセイが、しっかりした声で言った。

裸身に見入った頬を赤く染め、修太がさっと後ろを向く。

センセイは、教卓の脚に手錠で縛られたまま大きく左右に開かされた両足に力を入れて立ち上がった。

疲れ切った顔の下のはっそりした首に、黒い縄が二重に巻かれていた。形の良い小振りの乳房が荒い呼吸に応じて震えている。キュッと締まったウエストから腰が広がり、開かれた股間で豊かな陰毛が黒々と燃え立っていた。

鼻の先までずり落ちていた眼鏡を顔を左右に振って払い落とす。

床に落ちた眼鏡が鋭い音を立てて割れた。

振り返る修太に「見ないで」と厳しい声で言って、左右に開いた両足を動かそうとした。しかし、足首を噛んだ手錠はビクともしない。

急に暑さが気になる。素っ裸にされた身体全体から、粘った汗が噴き出しているようだった。汗に含まれた塩分が沁みるためか、火照った尻と疼く肛門が悲鳴を上げている。

「つむじ風のようなだった」

声には出さず、疲れ果てた心の中でぽつんと言った。

終業式の教室を瞬時に襲った暴力の嵐を思い返す。長い長い屈辱の時間が終わったことを、汗にまみれた裸身の痛みでやっと実感できた。

やはり、何かが狂ったとしか考えられなかった。

産廃処分場の建設反対の運動が盛り上がり、県知事が建設の認可を与えない腹を固めたことは、今朝の助役の電話で知っていた。しかし、産廃屋がこうも早く、それも反対派の子供たちを拉致することで局面の打開を計るなど、今でも考えられなかった。例え破れかぶれで反対派を拉致したとしても、警察が介入する刑事事件として処理され、産廃処分場建設の認可など雲散霧消してしまうに違いなかった。

計画的な事件ではないとセンセイは思った。あの秘書役といていた女が、独断で動いたものと確信した。

「軽率には動けないな」とセンセイは思った。

確かに教室から子供が拉致されたのだから、本来ならすぐ警察に通報すべきだった。しかし今は、産廃処分場を巡って事態が入り組みすぎている。とりあえず産廃屋からの反応を待つべきだと思う。特にこの格好では警察は呼べない。センセイは惨めな裸身を見下ろし、身体全体を赤く染めた。

白いワンピースの残骸が敷かれた教卓の上にまた、うつ伏してしまう。そのままの格好で修太に声をかけた。

「修太さん。お父さんと呼んできて」

「うん。警察も呼んでもらおうか」

「いいえ、警察はまだいいわ。とにかく、すぐ来てもらって。お父さんには、その時センセイがよく話すから。急いで」

「うん」と、元気良く返事をした修太が、後ろ手の手錠を鳴らしながら駆け出していく。

陶芸屋に縛られた恥ずかしい裸身を見られるのは仕方がない。センセイは覚悟を決めた。その後の対応が難しいのだ。祐子や光男のことより、そのことが優先されると、当然のようにセンセイは思った。十分威信を保たねばならない。

久しぶりに教師の矜持を感じ始めていた。

修太は後ろ手のまま休まず駆けた。全身から汗が噴き出し、大量の熱気を吸い込む喉が痛んだ。

ログハウスのある対岸に渡る橋の袂で転んでしまった。顔から地面に倒れ、額と頬を擦りむく。構わず立ち上がって走り始める。

開け放たれたアトリエの戸から土間に飛び込み、喘ぐ声に力を込めた。

「父ちゃん、大変だよ。祐子と光男が眉なし女に誘拐されたんだ」

ろくろの前に鉢巻き姿で座り、大振りの皿と取り組んでいた陶芸屋が顔も上げずに答える。

「今日は終業式だったな。よっぽど成績が悪かったんだろう。悪い冗談はやめて食事の支度でもしろ。Mは留守だからな」

「冗談じゃないよ、本当だよ。ほら、俺も縛られているんだ」と言って後ろを向き、後ろ手の手錠を突き出した。

やっと顔を上げた陶芸屋が、修太の後ろ手を見て笑った。

「やっぱり玩具の手錠じゃないか。悪ふざけもたいがいにしろ」

「玩具じゃないよ。金属製だよ。どうやっても抜けないんだ」

「子供のくせに玩具の使い方も知らないのか。指で鍵穴の辺りを探って見ろ。小さなレバーがあるから、指先で上げるんだ。すぐ外れてしまう」

修太は言われたとおり、右手の人差し指で左手首を拘束した手錠の鍵穴の部分を探った。平らな金属の上の鍵穴の縁に、小さなレバーの感触があった。指先に力を入れてスライドすると、簡単に手錠が外れた。

あまりのあっけなさにしばし、ぼかんと口を開けて右手にぶら下がった手錠に見入った。金属でできてはいたが、修太の目にも精巧な造りには見えない。一目で玩具と分かった。だから眉なし女は、みんなを後ろ手にして手錠をかけたんだ、と得心がいった。あの恐ろしい状況の中で、後ろ手に手錠をかけられれば、それを玩具と疑う者など一人もいない。

あの眉なし女は頭がいいんだと、修太は感心してしまった。

「ほら見ろ、玩具だろう。早く昼飯の支度をしろ」

「確かに玩具だけど。祐子と光男が連れて行かれたのは本当のことなんだ」

誘拐という言葉が、出しにくくなっていた。

いつになく冷静すぎる父の態度が意外だった。この一か月間、秋の展示会に出す作品造りに真剣に取り組んではいたが、それにしても父の対応は素っ気なさ過ぎた。

「本当なんだよ。とにかく学校へ行ってくれよ。センセイが縛られたままだから、助けを呼ぶように言われたんだ」

「もう、お前だって手錠を外ずせるんだから、縛られているのが本当でも俺が行くことはない」

食い違う話に苛立った修太は、やはりMでなければ話にならないと思った。

「Mはどこにいるんだ。Mに頼むからいい」

「Mは会社の仕事で、元山溪谷の写真を撮りに行った。今ごろは、通洞坑の下の溪谷にいるはずだ」

「分かった。俺、行って来る」

「昼飯はどうした」

下を向いたまま、ろくろを回す陶芸屋が厳しい声を出した。

「飯なんか食うな」

大声で怒鳴り、左手から外した手錠を陶芸屋に向けて投げ付けた。

手錠は、ろくろの上で回っている制作中の大皿の中に落ちた。

「コラッ」

叱りつける声にも動ぜず、じっと陶芸屋の目を見つめる。

「父ちゃん。学校には必ず行ってください。センセイが父ちゃんの来るのを待っているんだ」

冷静な声で言えたことに内心喜び、修太は外に向かって一散に走り出した。

修太は元山溪谷へと続く山道を駆ける。

もう、服は汗でぐっしょりと濡れてしまっている。走る身体に布地がべったりと張り付く。修太は立ち止まってシャツを脱ぎ捨て、ズボンも脱いだ。パンツ一枚になったが、そのパンツも汗と精液にまみれている。

思い切ってパンツも脱ぐ。剥き出しの股間に緑陰を渡る風が心地よかった。生え始めた陰毛が風に揺れる。

修太は素っ裸で、また走り始めた。

溪谷の底が見通せる所まで出ると走るのをやめ、渦巻いて流れる溪流に突き出た岩の上を一つ一つ良く見てMを捜した。

しかし、Mの姿はない。見付けることができないまま通洞坑の入り口まで来てしまった。

どこに行ったのだろうと思いあぐね、坑口が見える岩影にしゃがみ込んだ。

目の前にアーチ状の坑道入り口が見える。錆びた鉄扉が入り口を塞ぎ、潜り戸には錠が下ろされている。

力無くうつむいた視界の端で、何か光ったと思った。顔を上げて通洞坑をじっと見つめる。潜り戸に下りた錠が真新しくなっていた。

潜り戸の前に走り、錠を手にとって見た。ずっしりと重い嚴重な錠だが、材質がステンレスだ。以前の、黒く錆びた大型の錠とはまるで違う。

慌てて潜り戸の回りを探る。

地面と接する所に、五センチメートルほどの隙間があった。ちょうどそこだけ固い岩盤が傾斜して窪んでいる。

修太は地面に寝そべって隙間に右目を寄せて坑内をうかがった。闇の中に、戸の隙間からぼんやりと入る光が遠慮がちに場を占めている。よほど闇に目が慣れないと、物の形など見えそうにない。横たわったまま目を瞑り、しばらく待った。

そっと目を開けて見ると、やっと見渡せる視界の果てに反射して光る物が見えた。目を細めて良く見ると、それはカメラのレンズだった。

Mのカメラに違いないと思った。

しかし錠が下りている。不思議だった。立ち上がって戸の前に屈み込み、戸口に口を寄せてそっとMの名を呼んでみた。数回呼び掛けて大声を出そうとしたとき、なぜか眉なし女の顔が浮かんだ。尻を剥き出しにしたまま後ろ手錠で曳き立てられる、祐子と光男の姿も浮かんできた。

ひょっとしてMが閉じ込められたのかも知れない。修太の空想は悪い方へ、悪い方へと進んでいった。

もういても立ってもいられなくなった。坑内に入って確かめるんだ。

修太はニヤッと笑って立ち上がり、凄い速さでもと来た道を走り始めた。通洞坑のある巨大な崖の裏へ回れば、山肌に空いた抜け穴があることを修太は知っていた。

二十分も走れば、崖の反対に出られるはずだった。わずか百メートルの坑道を、二十分かけて迂回するのだ。急げ。

溪谷沿いの道を二百メートルほど下り、道に突きだした巨大な岩を回り込んで木々の立ち並ぶ鬱蒼とした山林に分け入る。周囲の禿げ山が嘘のように、鬱蒼とした雑木の枝が行く手を塞ぐ。

剥き出しの裸身が枝に打たれ、傷つく。構わずに全身に力を入れ、汗を滴らせて山肌を駆ける。

元山沢はみな、俺の裏庭だと修太は思った。

足が痛み、喉元まで喘ぎが込み上げてきたころ、やっと視界が開けた。目の前に見える

なだらかな稜線の下部に、巨大な岩場があった。

大きく息をついてから、修太は岩場に向けて下って行く。

見上げるほどの一枚岩に被さった小振りの岩の影へと回り込み、開いた割れ目に足から裸身を滑り込ませた。すっと身体が落ち、剥き出しの尻にひんやりとした岩肌が触れる。

足が岩盤を踏んだことを全身で確かめてから、ゆっくりとしゃがみ込んだ。硬い岩盤に囲まれた洞窟の下部に、屈んだ背丈ほどの横穴が空いている。屈んだまま天井の岩に手を当てて横穴の中を数歩歩く。手が冷たい岩を離れると、漆黒の空間が広がっていた。

狭い坑道に出たはずだった。右手を側壁に当てたままゆっくりと歩を進める。ライトを持ってくれば良かったと思うが後の祭りだ。闇が怖い。

数メートル歩けば本坑に出るはずだった。側壁に当てた右手に力を入れる。ゆっくりとした歩みだが、規則的に触れる濡れた坑木の列が確実な距離を教えてくれる。こんな無鉄砲な秘密の坑道探検遊びに精出したのも、三年ほど前までだった。今は、成長したにも関わらず、ただひたすらに闇が怖かった。

踏み出す先に底なしの穴が待っているような気がして、上げた足が地面に着く度にほっと溜息が出る。寒い。

踏み出した足が急に水中に入った。

「ヒィー」と、思わず悲鳴が口を突いた。しかし、水の深さは十五センチメートルほどしかない。

池の中を歩く途中で右手に触れる側壁が直角に曲がり、本坑に出た。百メートルほど先に、ぼんやりとした明かりが見える。

入り口から射す明かりではなく人工の灯りだ。Mに違いない。修太は勝手に確信して涙を流した。

恐ろしい思いをして、ここまで来た甲斐があったと思った。叫びだしたくなるのをこらえ、物音を立てないようにしながらそっと近付く。

ひょっとしたら、眉無し女も一緒かも知れないと思ってしまう。しかし、Mが負けるはずがないと思い直し、踏み出す足に力を込めた。

1 1 通洞坑（2）

地下水の池から戻り、通洞坑の入り口の前にMと光男は座っていた。

すぐ横に祐子がうつ伏せに横たわっている。腫れ上がった尻が痛々しい。尻のすぐ上手錠をかけられた両手が置かれている。裸身の下には祐子と光男のシャツが敷かれてあった。祐子の尻を洗った帰り道で見付けた、カンナが置き忘れた黒いザックに入っていたものだ。

ザックは祐子の足下に置いてある。手錠の鍵が入っていないかと、中のものをすべて出して探したが空しかった。めぼしいものは何もなかった。二人のシャツの他はランタンの予備電池があっただけくらいで、チョコレート一枚入っていなかった。何に使うのか、三本の黒い麻縄と真新しいジレットの剃刀が二本入っただけだ。

「お腹空いたね。もう、お昼になったかな」

Mの横で光男が情けない声を出した。

「戸の隙間から射し込む光の様子では、もう午後になっているみたいね。明るさが洩れてくるだけで、光が直接入ってこないでしょう。もう日が西に傾きかけた証拠よ」

「そうか。もう四時間近く、後ろ手に縛られてるんだ。肩が痛いのも当たり前」

また泣き言をいう光男にうんざりして、Mは目を閉じた。

鉄扉の向こうから賑やかなセミの声が聞こえてくる。全身が怠くなるような真夏の昼下がりのはずだった。

「Mっ」と呼び掛ける声が、すぐ近くに聞こえた。

反射的に立ち上がって声のした方を見つめる。闇の奥にぼうっと白い影が浮かび上がった。

「Mっ」と、また影が呼び掛けた。

「修太っ」と叫んでMが駆け寄っていく。

闇の中から現れた素っ裸の修太が、泣き笑いをしている。

「俺、抜け穴から来たんだ。祐子も光男も一緒なんだね」

自慢そうな声で修太が言い、不安な目つきで辺りを見回してから言葉を続けた。

「眉なし女はいないんだね」

「カンナはいないわ。私たちだけ置いてけぼり。私もちょっとミスしたのよ。でも、抜け穴があるなんて思っても見なかったわ。良く来てくれたわね」

素っ裸の修太が急に大きくなったように見え、思わず抱きしめたくなる。後ろ手の手錠を齒がゆく鳴らすと、修太が背後に回った。

「この手錠、玩具なんだ」

「えっ」とMが驚いたときには修太が鍵穴のレバーをスライドし、右手の手錠が簡単に外れた。

「うーん」

Mは唸ってしまった。結構カンナはずる賢いと思ってしまう。また一本取られた気持ちだった。

修太が光男の手錠を外し、Mが屈み込んで祐子を立ち上がらせて手錠を外した。二人とも嬉しそうに、揃って両手を上に上げ肩を回した。

「修太。抜け穴に案内して。こんな所に長居は無用よ」

光の弱くなったランタンを掲げて言ったMは、また屈み込んでカンナが用意した予備の電池と詰め替えた。

「さあ行きましょう」

立ち上がったMが修太と並び、闇の中に歩み出した。

入り口の向こうからベンツのエンジン音が聞こえたが、興奮した子供たちには聞こえなかったようだ。素知らぬ振りをして、Mは足を早める。産廃屋が来るまでには必ず、抜け穴から外に出られるはずだった。

素っ裸の三人がランタンの光に浮かび上がる。洞窟に紛れ込んだ三人の妖精のように美しく見えた。

先が見えると気楽なものだと思い、Mは苦笑した。産廃屋たちの鼻をあかせることは、もう確実だった。

本坑から池を渡り、狭くなった坑道に入った。

五メートルほど歩くと、黒い側壁の下にぽっかりと穴の空いた岩盤の前に出た。「屈んだまま横穴に入って行くんだ」

修太が弾む声で言った。

「慣れている修太が先になりなさい。次に光男と祐子。私が最後に続くわ。ちゃんと先を

行く人の肩に手を掛けて行くのよ」

はっきりとした声で命じてから修太にランタンを渡す。笑ってMの目を見た修太が屈み込んで横穴の中に消えた。瞬く間に闇が周囲を支配する。祐子と光男の身体が緊張したのが分かる。

遅れないように慌てて光男が続いたようだ。「押すんじゃない」と叱責する修太の声が穴の奥から響いてきた。

祐子がしゃがみ込む動きが肩に掛けた左手に伝わる。Mも膝を折って祐子に続いた。横穴は、やっとMが屈んだまま足を運べるほどの広さだ。蟹になったように小さく屈み込んだまま、すり足で前に進む。

「さあ祐子、頭に気を付けて立ち上がるんだ」

修太の声に続いて、一步踏み出した祐子が立ち上がった。肩に載せていた左手を腰が触れていった。首をねじって見上げると、ほんのりと光が入った空間が見えた。岩の裂け目にできた自然の洞窟だ。

胸ほどの高さにある重なり合った岩の裂け目に、祐子の下半身が垂れ下がっている。

「お前は尻がでかいからな。少し肌が擦れるけど引っ張るから我慢しろよ」

修太の声とともに、祐子の白い尻が岩の中に吸い込まれた。笞打たれた傷が岩で擦れ「ヒッ」という、呻き声が聞こえた。

「Mの番だよ」

しばらくして腹這いになった修太の顔がのぞき、突き出されたランタンが岩に挟まれた空間を明るく照らし出した。

痺れた膝を伸ばして立ち上がってみる。洞窟はMが中腰になれるほどの空間だった。目のすぐ下の胸のあたりに、子供たちがくぐっていった岩の裂け目が見える。どう見ても大人がくぐり抜けるのは無理と思われるほど狭い。

「さあ早く。祐子も光男も、もう外に出たよ」

修太が自信に溢れた声で言った。子供たちが外に出られたのなら、それでいいとMは思った。

一応、頭を裂け目に入れてみた。岩に当たりながらも、やっと肩がくぐったが胸は通りそうにない。

「だめ、私は通れないわ。助けを呼んでくれる。警察でいいわ」

「大丈夫だよM。頑張らなくちゃ。服を着ているからだめなんだ。Mらしくないよ、裸に

なってもう一度やってみて」

確かに自分らしくないとMは思った。子供たちは素っ裸なのだから、両手が自由になった今、一人で服を着ている必要はなかった。

黙って頷いてタンクトップを脱ぐ。ホワイトジーンズを脱ぎ去るともう、全裸だった。白い帽子を脱いで、長い髪を左右に揺すった。

さっきと角度を変えて両手を伸ばし、そのまま岩の裂け目に入っていった。肩は簡単に通り、つかえていた胸も辛うじて通過できた。しかし豊かな腰はどうやっても通れないことが分かった。

目の前で腹這いになった修太の目を見て、静かに言った。

「早く助けを呼んで来て。陶芸屋に警察を呼ぶように言うのよ。修太が一人で行きなさい。祐子と光男は外に出た所で待たしておくの。そこなら絶対、カンナに見付からないでしょう。修太も注意していくのよ。分かった」

「うん」と応えた修太がMの手にランタンを渡し、腹這いのまま下がっていく。Mは先ほどの祐子のように下半身だけ垂れ下がった裸身を、やっとのことで元に戻した。

岩盤の間にできた狭い洞窟にMは座り込んだ。冷たい岩が裸の尻に触れる。目の前に置いたランタンの光に目をやりながら、冷静に状況を分析しようとする。

先ほど戸口でベンツのエンジン音を聞いたが、もう心配はなかった。子供たちは危機を脱したのだ。後は、助けを呼びに行った修太が見咎められないように、産廃屋たちを引きつけておくことがMの仕事だった。

「楽しい仕事ではないわ」

口元に笑みを浮かべてつぶやき、屈み込んだまま、すり足でもう一度横穴に入っていく。

狭い坑道に出ると、本坑から強い光が洩れてきた。

大きなランタンを掲げた産廃屋と、マグライトを手にしたカンナの姿が見える。Mの持つ小さなランタンが、蛍の光のようにみすぼらしく感じられた。

両足に力を込めて歩を進め、池を間にして二人と対峙する。僅か二メートルの距離だ。「通洞坑によくこそ。待っていたわ。もう子供たちはいない。抜け穴から外に出してしまったのよ」

両足を少し開き、豊かな胸を張って静かな声で言った。

「ふん、素っ裸になっても、肉が邪魔して抜け穴が通れなかったってわけか」

カンナが憎々しげな口調で挑発した。

「まあ、そういうわけよ。肉体が美しすぎてしまったってことね」

カンナの痩せた身体が怒りに震えるのが分かった。

「あなた方の相手をするのは構わないけど、もうすぐ警察が来るわ。子供を誘拐するなんて、つまらないことをしたものね。これで産廃処分場なんて吹っ飛んでしまうわ」

産廃屋が、掲げていたランタンを下ろした。

「子供が逃げたのなら警察が来る。当たり前の話だ。カンナ、帰ろう。もう終わったんだ」

「終わっちゃいないよ。これから始まるんだ。ガキどもが逃げても、さんざん煮え湯を飲ませてくれた、この女がいる。たっぷり礼をしてやるんだ」

「こんな女は切り札にならない。時間の無駄だ。さあ、行こう」

「あたしには、行く所なんてどこにもない。兄さんが一人で逃げればいい。あたしは独りでもけじめと言ってあったろう」

兄さんと呼び掛けたカンナの言葉にあっけにとられたとき、ずっとカンナが歩を進めた。池の真ん中で立ち止まり、さっと帽子を脱ぎ捨てる。

目の前の無毛の頭皮に、声にならぬ驚きの声を上げたときには、突進してきたカンナの正拳がMのみぞおちを捉えていた。

「ウッ」と、呻いて腰を折ると胸に蹴りを受けた。たまらず仰向けに倒れる。倒れた身体を押さえ付けようと飛び掛かってきたカンナの足を、横に転がりながら両足で払った。今度はカンナが仰向けに倒れる。倒れたまま咳き込んでいるカンナに飛び掛かろうと、Mは急いで立ち上がった。

遅れて池を越えてきた産廃屋の太い腕が、背後からMを羽交い締めにする。両手足を激しく振って抵抗するが、巨大な体はビクともしない。口元に涎を引いたカンナがヨロヨロと立ち上がり、Mの前に立った。続けて二発、膝蹴りが腹部を襲った。

激しい痛みが腹の奥から脳へと走り、吐き気が込み上げる。苦い胃液が口に上がってきたとき、また一発、強烈な膝蹴りが決まった。全身の力が抜け、だらしなく開いた口から胃液が溢れ出るのが分かった。産廃屋が羽交い締めを解くと、Mの裸身はズルズルと地上に滑り落ちた。

カンナが背負っていた黒いザックを下ろした。Mが入り口に置き去りにしたものだ。ザックの口を開け、中の物を地面に広げた。

黒い麻縄を手に取り、腰から崩れ落ちて喘いでいるMの背後に回る。両腕をひねって背中に回し、後ろ手に縛り上げる。念を入れて厳しく両手首を縛り、余った縄を首に回した。首の下で結び目を作り、左右に縄を延ばして豊かな乳房の上下を二巻きして首縄で止めた。別の黒縄を取り、乳房の上下を縛った二条の縄を乳房の谷間できつく繋ぎ止める。

「ウー」とMが呻いた。

残酷な縄目だった。乳房の上下を緊縛した二条の縄が、胸の中心で無理に束ねられたのだ。豊かな乳房は無惨な形に歪み、縄目の間から醜く突き出されてしまった。乳首の先が痛み震える。

余った縄でウエストを二巻きして、正面で縄止めする。もう一本の縄を二重にして臍の上で腰縄に繋ぎ、股間を通して背中に回した。

「さあ、お上品に横座りなんかしてるんじゃないよ。胡座をかきな。股間を丸出しにして胡座をかくのがお前に一番似合ってるんだ」

憎々しげに言ってMの頬を二度張った。

口元をゆがめるMにお構いなく、横に伸ばしたすらりとした足を両手で持って大きく広げた。反動でMは背中から地面に倒れる。後ろ手に縛られた腕が痺れるほど痛んだ。

「さあ、カンナさんが胡座に組ませてやるよ。臭い股間を一杯に広げるんだ」

叫びながら、Mの長い足を持って空中で胡座を組ませる。最後に残った黒縄で嚴重に胡座縛りにした。仰向けになったまま上を向いて組んだ足の間を、冷たい空気が通り抜ける。

「まだまだこれからだよ。兄さん、Mを海老責めにするからね」

声をかけられた産廃屋が無表情のまま近寄り、Mの上半身を起こした。大きな両手で首筋を押さえて力を入れ、顔を地面に押し付けようとする。

Mの口から「ウーッ」と、長い呻き声が洩れる。

柔らかなMの身体はもう、胸の縄目から飛び出した両乳房が胡座に組まされた足と接するほどに折り曲げられてしまった。先ほど股間に通した二本の縄をカンナが取って両肩に回し、首を挟んで下に延ばし、足首を縛った縄に繋ぎ止めた。

産廃屋が首から手を離して引き下がる。

文字通り海老責めだった。Mの白い裸身が極限まで前屈して折り曲げられていた。Mの目の前に胡座に組まされた足首がある。縄目から飛び出した両の乳首が両腿に触れているのが見えた。

絶え間なく口から呻き声が洩れる。股間に食い込んだ縄が性器と肛門を引き裂いてしま

いそうだ。

「兄さん、Mを池に浸けて」

カンナが恐ろしいことを言った。言われるままに産廃屋が海老責めにされた裸身を抱え、二つ折りの裸身を池の中央に下ろした。

冷たい水の感触が、広げきった下半身を襲った。水深は十五センチメートルほどだが、海老責めにされているため、つい目の先に水面が揺れている。

産廃屋とカンナは池を渡り、本坑の広い地面に座り込んだ。

「兄さん煙草」

カンナが催促し、二人で一服始める。目の前には池に浸けられた、海老責めにされたMの裸身が苦痛に悶えている。

「江戸時代の水牢というのはこんなもんかもしれないね。水牢で拷問されたら、たまったもんじゃないよ。失神することもできない。本当にいい気味だ」とカンナが嘲る。

確かに、たまったもんじゃないと、全身の痛みの中でMは思った。池は流水の広がり過ぎないため、絶えず新しい冷たい水が流れて下半身を洗う。たとえ、海老責めの苦痛に気を失いそうになっても、この冷たい水が正気に戻させるに違いなかった。カンナが言うように恐ろしい水牢の拷問なのだ。きつく唇を噛みしめてMは苦痛に耐える。

煙草を吸い終わったカンナに産廃屋が静かな声で話し始めた。

「これで気が済んだろう。警察が来る前に遠くへ行こう」

「兄さんが一人で行けばいい。この女は行き掛けの駄賃なんだ。あたしはMに勝ってから、この暗闇で、この世とおさらばすることに決めたんだ。病院なんかには金輪際行かない」

「そんなに痛むのか」

「海老責めのMより、あたしの方が苦しいんだ。容赦はしないからね」

立ち上がったカンナを産廃屋が苦渋に満ちた顔で見上げる。

「さあ、第二幕の始まりだよ」

無理に明るい声で言ったカンナが脇に吊ったホルスターを外した。無造作に赤いタンクトップを脱ぎ、ブラジャーを外す。煉瓦色のジーンズを黒いショーツごと脱いで全裸になった。二つ置かれた大小のランタンの灯を浴び、無毛の痩せた裸身が怪しく光る。

産廃屋は口をへの字に結んで目を閉じてしまった。カンナは屈み込んで、ベレッタM9 2 Fの隣に差した大きな軍用ナイフを引き抜く。

そのままナイフを持って池に入り、海老責めにしたMの前に立った。

Mは顔を無理に上げて、カンナの裸身を射るような目で見上げた。幼女のように、つるつと剥き出しになった股間にかわいい性器がのぞいている。その愛らしさに思わず、苦痛に歪んだ口元に笑みを浮かべてしまった。

「まったく嫌な女だねえ。あたしの性器がそんなに面白いかい。それならあたしと同じようにしてやるよ」

屈み込んだカンナが両手で水をすくい、頭から浴びせかけた。冷たい水が頭から背に流れ、Mは身震いした。何回も何回もカンナは水を浴びせる。

ぐっしょりと濡れた長い髪のをカンナが左手に持ち、右手のナイフで根元からすっぱりと切り捨てた。

Mの目の前で艶やかな髪のが、幾筋も流水に乗って流れて行った。

「やっとショートになったね。暑苦しくなくていいよ」

楽しそうに笑ってあざけるカンナの前のMは悲惨だった。海老責めに悶える裸身の背を被っていた長い髪はすべて切られていた。もはや、米軍の海兵隊員ほどに切り詰めた髪が、不揃いに頭部を被っているだけだった。

「仕上げをしてやるよ」

言い残してナイフをジレットに持ち替えたカンナが、乱暴にMの頭皮に剃刀を当てる。ジョリジョリと耳を打つ恐ろしい音が連続し、見る間に頭髪が剃り上げられていく。おまけに両の眉まで、あっさり剃り落としたのだ。

「ほら見てご覧、あたしと同じになれて光荣だろう」

カンナが剃り上がった頭にランタンを近付ける。揺れる水面に見ず知らずの他人の顔が映っている。

「随分血が吹き出したが、水で流せばいい。時間が経てばいずれ生え揃うんだ。あたしのよう抗ガン剤で禿げ山になったんじゃないからね。でもね、あたしがその恥ずかしい姿のまま、お前をあの世に送ってやるよ」

見上げたカンナの口元に、陰惨な笑いが浮かんでいる。たまらない悲しみがMの身体を突き抜けていった。

「私もあなたも恥ずかしい姿でないわ。十分に美しい」

苦しみをこらえたMの声が響き渡った。

「へー。元気なもんだね。口先だけは達者なんだ。そんな恥ずかしい格好を晒して、良く

美しいなんて言えたもんだ」

「どんな姿になったとしても。たとえ虐殺されたとしても。独りで生き抜こうとした女は美しいのよ。だから、当然あなたも美しいわ」

「いちいちしゃくに触ることを言うね。そんなに私が美しいなら、お前の股間も同じようにしてやる。海老責めを解いてやるから、お願いしてみな。できるかい」

意地悪く吐き捨てたカンナを見上げ、Mが静かな口調で言った。

「いいわ。カンナさんお願い。私の股間のむだ毛を剃り取ってきれいにしてください」

「ふん、思い通りにしてやるよ、自分で足を大きく開き、剃りやすいようにできなかったら、その場で殺すよ」

カンナはMを海老責めにした縄を切り、ナイフを水中に入れて胡座に縛った縄も断ち切った。

「さあ、早くしな」

カンナに急かされて、Mは痺れきった足でよろめきながら立ち上がった。このまま横に倒れてしまいたいと思う。

Mはカンナの正面に直立し、開けるだけ大きく足を開き、股間を突き出した。

「さあ、きれいに剃り取ってちょうだい」

黙ったまま、新しいジレットを手にしたカンナが、そのまま股間を剃り始めた。よじれた陰毛が剃刀の刃にかかり、飛び上がるほどの痛みを与える。しかしMは、カンナの手の動きに合わせて腰を振って股間をしっかりと突き出す。

「恥ずかしい性器がすっかり顔を出したよ。さあ後ろを向きな。尻の毛も剃り落としてやる」

言われるままに後ろを向いて腰を曲げた。突き出した尻の割れ目に剃刀が走る。

「尻の回りの毛は薄いんだね」

馬鹿にしたようなカンナの声が響く。

「さあ、すっかり丸出しになったよ。恥ずかしくて目も当てられないよ」

「恥ずかしくはないわ。あなたも私もこんなに美しいのに、なぜ気が付こうとしないの」

尻を掲げたまま叫んだMの全身にまた、悲しみが込み上げてくる。頬を流れる涙が止まらなくなる。こらえていても固く閉じた口の端から嗚咽が洩れ始める。

「うるさい。恥ずかしい尻を思い知らさせてやる」

カンナはベレッタM9 2 Fを右手に握り、剥き出しの尻目掛けて発射した。鋭い発射が

スの音とともに直径5ミリの硬質プラスチックの玉が、滑らかな尻に食い込む。激しい痛みでMは悲鳴を上げた。

続けて十五発の玉がMの尻を襲った。針で刺されるような鋭い痛みではないが、太い錐で突かれるような激甚な痛みが尻全体を襲った。

「今度は、その臭い股間の番だよ」

マガジンを入れ替えたカンナが、今度は広げきった股間を狙ってきた。十五発の玉が肛門に食い込み、性器を打ち、肉襞の奥に入ってしまった。叫びに似た悲鳴がMの口を突いた。

しかしMは、襲って来る弾丸を避けようとしめない。従容として全弾を、剥き出しの尻と開かれた股間で受けた。

「ごまを見ろ。尻があばただけになった。醜い尻だ。これでもまだ恥ずかしくないか」

止めどもなく涙が流れた。それでもMは諦めきれずに大声で叫ぶ。

「私は美しい。あなたと同じように美しいんだ。なぜまだ分からない」

「畜生。殺してやる」

陰惨な声で叫んだカンナがベレッタを池に投げ捨てた。産廃屋の所まで飛んで行って、黒いバックからトカレフを取り出す。

「カンナっ」と大声で制止する産廃屋の声を「ズガンッ」という、けたたましい銃声がかき消してしまった。

Mの尻の先を熱いものが掠め去り、耳を圧する銃声と岩で跳ね返る不気味な跳弾の音が錯綜した。

「カンナさんの腕も落ちたもんだ。今度は絶対、外しっこないようにしてやる」

トカレフを持ったままMに迫ったカンナは、銃身を無理やり股間に押し付けた。肉襞に触れた焼けた銃口が鋭い痛みを頭のとっぺんまで伝える。股間に添えた左指で粘膜を押し広げ、カンナは無理やり銃身を挿入する。身体の奥深くまで入り込んだ邪悪な鉄の塊を意識したとき、カンナの手が放れトカレフの重量がそのまま股間に残された。

急に咳き込んだカンナがしゃがみ込み、頻りに嘔吐している。全身の痛みには耐えようとする呻きが殷々と坑内に響き渡った。

振り返ってカンナの様子を見ようと、上体を起こしたMの股間からトカレフが滑り落ちた。

銃把から池に落ちたトカレフが岩に当たって暴発し、凄まじい爆発音とともに第二弾を放った。

銃弾はカンナの異変に驚いて立ち上がり、駆け寄ろうとした産廃屋の腹に命中した。

「ウー」と呻いて身体を折った産廃屋の下腹部から血が滲み出す。

身体を折って吐き続けていたカンナは地面に横になり、転げ回りながら全身の痛みと戦っている。

一瞬にして、修羅の第三幕が始まったのだ。

池の中に全裸で、後ろ手に緊縛されたまま立ち尽くすMの目から間断無く涙が流れた。

頭髪を剃られ、眉を落とされ、股間を剃り上げられた裸身が全身で嗚咽している。

池の向かいの狭い坑道の闇の中で、うずくまった祐子が、涙を流しながらその一部始終を見ていた。

1 2 助役

懸命に走っても汗が吹き出さなくなっていた。

マラソン大会みたいだと修太は思った。しかし、マラソン大会が開かれるのは決まって冬だ。こんな暑さの中を走り続けたのは生まれて初めてだった。しかも、今は全裸のまま走っている。とにかく夏休みはスタートしたのだ。

ゴールのログハウスも近付いている。

坑道に残ったMが少し気掛かりだったが、MはMだ。切迫した不安は感じなかった。何よりも祐子と光男を取り戻したことに全身が高揚していた。走ることも、それほど苦にならない。

快調な足取りを保ったまま、アトリエの中に走り込んだ。

「気が狂ったか。何て格好だ」

相変わらずろくろの前に座った陶芸屋が、あきれ返った顔で大声を出した。

「Mが通洞坑に閉じ込められたんだ。早く助けに行こう」

「Mは溪谷の写真を撮りに行ったんだぞ。なぜ通洞坑に入るんだ」

怪訝な顔で聞き返した陶芸屋にやっと、修太は朝からの事件を説明した。

全裸のまま息を切らしている異様な様子を見て、今度は陶芸屋も最後まで修太の話を聞いた。

「父ちゃんは、まだ学校に行ってなかったんだね。センセイが裸で縛られて助けを待っているって言ったじゃないか」

「センセイが裸でいるなんて聞かなかったぞ。玩具の手錠なんかして帰ってくるから悪ふざけと思ったんだ。もう事情が分かった。すぐ学校に行こう」

あたふたと立ち上がって車のキーを手にする陶芸屋の顔に、修太は不純な高ぶりを感じた。我が父ながら好色がすぎると思う。

「俺も行くから」と大声を出す。

「そんな格好でか」と、浮かぬ顔で言う陶芸屋に「Mも祐子も光男もセンセイも皆裸なんだ、俺も裸で行く」と答え、棚の上からバスタオルを取って陶芸屋に投げた。

「センセイの身体にかける物を持っていかないと、嫌われるぞ」

修太の声に陶芸屋の顔が赤く染まった。

まったく、どうしようもない父だと、また修太は思った。Mが、よく一緒に住む気になったものだと思ってしまう。

あまりに現実と違う陶芸屋の事件に対する認識振りに振り回され、修太はMに頼まれた警察への通報を忘れてしまっていた。

窓を開けたままの教室の教卓の上に、うつ伏しているセンセイの白い裸身が見えた。

陶芸屋は後ろの入り口で立ち止まったまま、後ろ手錠に縛られた裸身に見入った。突き出した剥き出しの尻が赤く腫れ上がっているのが見える。左足首にかけられた手錠が教卓の脚に繋いであった。

何と言ってセンセイに近寄ればいいのか陶芸屋が考え込んでしまったとき、手にしたバスタオルを修太が奪ってセンセイに駆け寄る。

「センセイ。遅れてごめんなさい。祐子と光男は取り戻したからね」

「ほんとう」

センセイの嬉しそうな声が聞こえた。駆け寄った修太がさっとバスタオルを広げ、センセイの裸身を被った。

修太はタオルの下に手を入れて、後ろ手の手錠を外した。屈み込んで両足首の手錠も外す。

センセイはうつ伏したまま自由になった両足を閉じる。腕を両脇に垂らして微かに首を振った。

「良かったわ。祐子も光男も無事なのね。本当に良かったわ。あの女はどうしたの」

ほっとした声で言ったセンセイだが、自分を悲慘な目に遭わせた女のことには触れられなかった。しかし、訊かないわけにはいかない。

「眉なし女は、どこにいるか分からないんだ。Mが通洞坑の中に監禁されていた祐子と光男を救ったときに、坑道に鍵をかけて逃げてしまったまなんだ」

「Mは俺たちと一緒に住んでるんです」

陶芸屋が入り口で、間の抜けた声を出した。

「わざわざ来ていただいてありがとうございます。すぐシャワーを浴びてきますから、待っていてください」

バスタオルを身体に巻いて、ゆっくりと立ち上がったセンセイが陶芸屋に言った。

「はい」と答えた陶芸屋がまぶしそうな目でセンセイを見る。

「あれ、修太さんはなぜ裸なの」

「みんな裸でいるんです」

「そう」と言い残してセンセイは、静かに居住区に去って行った。

手持ちぶさたの陶芸屋が、教壇の所まで入ってきた。

教卓の上に残された白いワンピースとショーツ、ブラジャーの残骸にじっと見入っている。いずれの布も鋭利な刃で鋭く断ち切られていた。

床に目を落とすと、糞尿の溜まった汚れが見える。

「掃除しておいてやろうか」

陶芸屋が小さな声で言うと、即座に修太が応える。

「見ない振りをしていればいいんだ。センセイがいたたまれなくなってしまうよ」

「いつの間に、そんなに気が回るようになったんだ」

感心したように陶芸屋が訊く。

「人の痛みを分かろうとしているだけさ。それより、早くMを助けに行こうよ」

「センセイが待っていてくれと言ったんだ。それにMは大人だから心配ないさ」

「でも、眉なし女と産廃屋がいる」

「眉なし女と格闘して、Mが勝ったって言ったじゃないか。産廃屋は現れはしないさ。自分で墓穴を掘るような真似は、やつはしない」

「そうだ、Mは警察を呼べっていったんだ。忘れていた。すぐ警察に電話しなければ。センセイの電話で父ちゃんが事情を話してくれよ」

修太が先に立って教室を出る、走るように廊下を急ぎ、センセイの居住区に続く角を曲がった。

ちょうど、センセイが部屋のドアを開けて出て来たところだった。洗い髪に白いバスローブを着ている。

「センセイ。電話を貸してください。警察を呼ぶんです」

修太が早口に言うと、センセイはまた部屋のドアを開けた。

「二人とも入って。先ず、今までの経過を良くセンセイに聞かせて欲しいの」

センセイの部屋にしか電話はない。修太は躊躇なく部屋に入った。陶芸屋が修太に続く。

センセイの部屋は八畳ほどのワンルームだった。バス、トイレ、キッチンが使い良さそうに配置されていた。造りは古いが、今時のアパートより余程立派に見える。エアコンが

効き始めていた。クーラーのない陶芸屋のアトリエより住み易そうだった。

三人は部屋の中央で立ったまま話した。センセイの尻の傷が痛んで座れなかったのだ。

通洞坑の闇の中で体験してきたことを、修太が興奮しながら話し終えた。

「祐子さんと光男さんが、二人きりでいるのが気掛かりだけど、もう心配はなさそうね。まず、二人を保護することが先決です。ご苦労でも、陶芸屋さんが通洞坑に行って、入り口の錠を破って坑道に入ってください。その方が、山を回るより近道でしょう。Mさんが坑道にいます。抜け穴の場所は彼女が知っているのでしょうか。二人で協力して光男さんと祐子さんを坑道に呼び入れ、連れ帰ってください。警察への通報は子供たちを確実に保護してから考えましょう。あまり産廃屋たちを刺激すると予期せぬ事故が起こらないとも限りません」

センセイが威厳に満ちた声で決断を下した。修太も従うしかなかった。これが学校の生活なのだ。

「センセイ。俺も父ちゃん行っていい」

「いいでしょう。でも、お父さんのいうことをよく聞くのよ。それから、ここでシャワーを浴びてから行くこと。体中、汗と埃で汚れているわ。いいわね」

「はい」と修太が答え、センセイの浴室に入っていった。ここは学校なのだ。センセイが赤く腫れ上がった笞打ちの痕を隠してしまった以上、つい数時間前に教室で荒れ狂った暴力の記憶も、まるで無かったことのように思えてくる。

センセイの威信が学校に甦ったのだ。

シャワーの音を聞きながら、センセイは話を続ける。

「祐子さんと光男さんの保護者には今、電話で簡単に事情を説明します。帰りが遅いので心配するといけませんからね。まず、祐子さんのお父さんの携帯電話にかけてみましょう。へりに乗っていれば電波が届くと思います」

陶芸屋の同意も待たないで机の上のコードレスの電話を取り、壁に貼った名簿の番号をダイヤルする。

しばらくの呼び出し音の後、雑音のひどい音声が聞こえてきた。

「ええ、そうです。祐子さんが産廃屋の秘書役に拉致されました。しかし現在、無事逃げ出して安全な所に隠れています。これから修太さんのお父さんが保護に向かいますからご安心ください」

同じような電話を町医者のお母さんにもかけた。鮮やかな手並みだ。そばにいる陶芸屋は

あっけにとられるばかりだ。仕事ができる女とは、センセイのような女なのかと思う。今更ながら世間知らずを恥じた。

浴室から出た修太が、バスタオルを腰に巻いてセンセイの前に立った。

「どこに電話したの。警察」

「違うわ。祐子さんと光男さんの家族に経過を説明したの。それから、陶芸屋さん。光男さんのお祖母さんが、ご一緒したいと言うの。立ち寄って、乗せて行ってください」

「大丈夫かな」

修太が不安そうな声を出す。

「産廃屋のことが心配なのね。真っ昼間から乱暴なことをしたら、それこそ後の祭りよ。それにたくさんの人が行った方がいいわ。私も行きたいけど、ちょっと無理ね」

散々笞打たれて赤く爛れた尻が、バスローブの生地に触れて痛んだ。これは予期せぬ事故なのだと、懸命に思い込もうとした。

「そうだ。修太さん、これを持って行って。携帯電話よ。元山沢は市に向かって開いているから電波が通じるはずよ。何かあったらすぐ電話して、いいわね」

机の引き出しから取り出した、ケースに入った携帯電話を修太に手渡す。修太が紐を長く伸ばして、肩から斜めに携帯電話を吊った。

「じゃあ、行って来ます」

陶芸屋と修太が部屋を出る。センセイは廊下に出て二人の背を黙って見送った。

部屋に戻ったセンセイはドアを開けたまま窓まで行き、大きく窓を開けた。修太たちの残り香を追い払おうとしたのだ。

開け放った窓から賑やかなセミの声とともに、湿った熱気が飛び込んできた。微かに森林の香りがした。

瞬く間に入れ替わった空気に満足して窓を閉めた。廊下に出て左右を見渡してからドアを閉め錠を下ろした。静かな学校が戻っていた。

センセイは白いバスローブを脱いで裸身を晒した。

机の横に置いた姿見の前で後ろを向いてみる。想像した以上に悲惨な状態だった。締まった小振りの尻は倍以上の大きさに赤く腫れ上がっていた。無数に赤黒いミミズ腫れが走り、所々に血が滲んでいた。足を大きく開き、股の間から姿見をのぞき込む。真っ先に爛れた肛門が目につく。粘膜が盛り上がるほどに腫れていた。カンナが毛深いと言った陰毛

が、爛れた粘膜に張り付いている。

笞打たれたときの悔しさと恥ずかしさが甦り、涙がこぼれた。

しばらく泣いた後、机の上の電話を取り、迷わず役場の助役室にダイヤルした。

「助役です」

すぐ落ち着いた太い声が、受話器から響いてきた。

「助役さん、私。今、お忙しい」と言って、また涙ぐんでしまう。助役が息を呑むのが分かった。

「何だ、センセイか。今日から夏休みだったね。あいにく私は忙しい」

「忙しそうな声に聞こえないわ」

「はははは、頭は忙しいのだよ。身体は珍しく予定がない。県知事から正式に産廃処分場を認可しないと連絡があったが、町長は出張中で明日まで戻らない。そういうわけで、明日の午後開く緊急幹部会議までは、対策を考える頭の運動しかすることはないのだよ」

いつものように自信に満ちて饒舌だった。涙ぐんでいたセンセイの口元に笑みが戻る。

「助役さん。実は私のお尻、真っ赤に腫れ上がっているのよ。死ぬほど笞で打たれたの」

送話器の前で助役が息を呑んだ。次の言葉を探しているらしい。

「何があったんだ」

直裁に聞いてきた。いつでも時間を無駄にしない人だ。

「会って話すわ。今から来られないかしら。予定が入ってないんでしょう。ねぇ来て」

また沈黙があった。

「三十分後に着く」

電話は助役から切られた。

センセイは電話を置き、押入を開けた。

部屋の中央に布団を敷き、真新しい白いシーツをかけた。

冷蔵庫を開けて氷を取り出し、洗面器に入れた。水を注ぎ入れて白いタオルを水に浸けた。

全裸のまま糊のきいたシーツにうつ伏せに寝て、腫れた尻を冷たいタオルで覆った。

火照った尻が瞬時に生き返るような気がした。そのまま目を閉じてじっと、セミの声に聞き入っていた。

電話を切って、きっちり三十分後にドアがノックされた。

「どうぞ」と答えると、鍵を回す音がしてドアが開けられた。

布団にうつ伏したまま顔を横にして、ドアを見上げる。

自信に溢れる身体を紺のスーツに包んだ助役の笑顔と目が合った。

「本当の話なんだな。私を呼びたくて嘘を言ったのかと思った」

ずかずかと上がり込んできた助役が布団の前で膝を突き、センセイの尻を被った白いタオルを取った。

「うっ」と絶句してから言葉を口にする。

「これはひどい。嘘の方がよほど良かった。何があったんだ」

問い掛けた助役が上着を脱ぎ、氷の浮かんだ洗面器の水で口をすすいだ。

センセイの尻に顔を寄せて、白い肌に無数にできたミミズ腫れに舌を這わせる。血の滲んだ傷を丁寧に舐めると、センセイの口から甘い呻き声が洩れた。

「何があったか話してみなさい。さあ足を広げて」

センセイが話す今朝からの出来事を聞きながら、助役は大きく広げられた股間にゆっくりと舌を這わせた。特に肛門の回りを念入りに舐めた。つぼめた舌が肛門の粘膜を割って入り込むと、センセイの口に歓喜に満ちた呻き声が洩れ、度々話を中断させた。

濡れきってしまった股間を助役の舌が巧妙に這う。話し終わったセンセイは痛みも忘れ、快樂の細い糸をたぐり寄せ始めていた。

「助役さんっ」と叫んだセンセイの腫れ上がった尻が細かく痙攣し、ゆっくりと弛緩していく。

身体を離れた助役が優しい目でセンセイの裸身を見下ろしている。

「そうか、産廃屋の秘書役が血迷ったか。もう、あいつらを許しはしない。私の政治的な立場をはっきりさせるのが遅れたのかも知れない。センセイにも迷惑をかけてしまった。しかし、これでもう勝ったも同然だ。私は立つ」

「えっ、どうするんですか」

上気した裸身をシーツの上で大きく開き、陶然とした目でセンセイが助役を見上げた。

「来春の町長選挙に、私が立つ。もっと早く決断すべきだったんだ。鉾山会社の下請けで財をなしたやつが、町長に収まっている時代ではない。この町のことを一番良く知っているのは私なんだ。産廃処分場など建設させるものか」

「勝てるの」と尋ねたセンセイの瞳が怪しく光った。

「勝ったも同然だと私は言った。今の町長は産廃屋と一蓮托生だ。尻尾を出した産廃屋は

私が全力で叩く。戦が始まるんだ。私は今日限り助役を辞める」

「素敵だわ。勝ったら助役さんのお尻を私と同じようにして上げるわ」

「センセイ。私はこの年まで独身で通ってきてしまった。権威は自分で作るものなのだよ」

見下ろした助役の瞳の底で黒い炎が燃え盛っている。

センセイの裸身を再び快感が駆け抜け、腫れた尻全体が熱く火照った。

1 3 通洞坑（3）

装甲車のような四輪駆動のトラックが元山溪谷に添って山を上っていく。

運転席には陶芸屋が座り、隣に素っ裸の修太がいた。後ろの座席には町医者のおさんとチェロが仲良く白い髪を寄せて座っている。ちょうどおさんの家に五重奏団のことで来合わせていたチェロが、祐子を心配して同行することになったのだ。

「おさんは看護婦だから戦力になるけど、チェロは何しに行くんだい」

修太が憎まれ口を叩く。

「恩師は緑化屋の代理に決まっているだろう。祐子も待っているんだから、気持ちの通じる恩師がいなければ困るんだ」

陶芸屋がたしなめるが、修太は「祐子のお守りなんて要らないよ」と、頻りにチェロに食ってかかる。どうも、相性が悪いらしい。陶芸屋が苦笑するが、チェロはどこ吹く風といった風情で車窓を流れ去る溪谷を眺めている。鋭くカーブした細い道を抜ければ、赤錆びた鉄橋に続く坂道に出る。

カーブを曲がりきって開けた視界に、鉄橋の前に止めた白いベンツが大きく映った。

修太の背筋に冷たい汗が流れる。眉なし女が戻って来たに違いなかった。産廃屋もいるかも知れないと修太は思った。しかし、今更引き返すわけにはいかない。

アクセルを踏む陶芸屋の足に力がこもった。

ベンツのすぐ後ろに、バンパーが触れ合う距離でトラックを止める。

「恩師とおさんは車内にいてください。俺が様子を見てきます」

陶芸屋がドアを開けると同時に、修太が反対のドアから飛び出た。

「お前も車で待っているろ」

怒鳴られても修太は動じる気配もない。勝手にトラックの荷台に上がって荷物箱を開ける。

怖い顔で睨み付ける陶芸屋に大振りのマグライトを渡し、自分は小さなライトを手にした。空いた片手に一メートルほどの鉄パイプを握る。

「そんな物は置いていけ。喧嘩に行くんじゃないぞ」

厳しい声で陶芸屋が言うと、修太が仕方なく鉄パイプを荷物箱に戻す。

「父ちゃんは甘いんだよ」

わざと聞こえるようにつぶやいて荷台から飛び降り、先に鉄橋を渡ろうとする。

「待て、様子を見るだけなんだぞ。暴力沙汰になりそうになったら携帯電話で警察を呼ぶんだ」

修太は返事もせず、黙々と鉄橋を渡った。少し遅れて陶芸屋が続く。修太を殴りつけてでも車内にいさせるべきだったと後悔する。嫌な予感が胸元を掠めた。

アーチ状の石積みで形作った通洞坑入り口の、不気味に細く開いた鉄の潜り戸の前に二人でうずくまり、坑道の中をうかがう。

「ズガンッ」

突然、中から銃声が轟いた。

反射的に修太が立ち上がった。戸を開けて小さな裸身が飛び込んで行く。間髪を入れずに陶芸屋が続いた。もう二人とも頭の中が真っ白になっていた。

大小二つのランタンが照らし出す坑道の闇の中で、カンナの裸身が激しく痙攣している。

全身を襲う痛みを耐えようと、きつく食いしばった唇から一筋、血が流れていた。

「兄さん、殺して。早く楽にして。もう気が狂いそうだ」

開いた口から恐ろしい叫び声が出る。

下腹部に受けた銃弾で出血を続ける産廃屋が、大きく目を見開いた険しい表情で痛みを耐え、下腹部を押さえていた右手を池に伸ばした。池の水に銃創から流れ出た多量の血液が混じり、赤黒い濁りが流れていく。

池を探ってトカレフを拾い上げた産廃屋が、左手を下腹部に当てたままヨロヨロと立ち上がり、カンナの横に立った。

カンナに向けて伸ばした右腕の先で、トカレフが激しく揺れる。

「早く撃って、兄さん早く。また痛みが襲って来た。もう耐えられない」

カンナの悲痛な声が響き、込み上げる嘔吐が次の声を奪う。全身の痙攣が激しくなり、痛みを任せて裸身が地面を叩く。

「カンナ、済まぬ。逝け」

短く言った産廃屋が、トカレフを握った右手に力を込めた。

「ヤメテッ」

Mの絶叫を銃声がかき消す。

銃弾は、のたうつカンナの右太股を貫いた。銃創から鮮血がほとばしる。傷の痛みで責

め苛む病気の痛苦が薄れたのか、一瞬、カンナの悶え苦しむ裸身が静止した。

産廃屋が、動きを止めた裸身に再び銃口を向けた。

その時、

「Mっ」という叫び声とともに、二条の光線が産廃屋の姿を捉えた。

銃口が光の方を振り向く。

「修太っ、伏せなさい」

Mが叫ぶとすぐ、産廃屋が無造作に続けて二発発射した。

発射音と同時に、後ろ手に縛られたMの裸身が地面を蹴って産廃屋へと跳んだ。頭と肩が、したたかに産廃屋の腰を捉える。

産廃屋とともに倒れていく身体の下に小さな裸身が潜り込み、産廃屋の両足を抱え込んでいたのが見えた。

「祐子」と叫ぼうとしたときには、倒れた産廃屋の上を滑ったMの裸身が頭から側壁に追突した。

先に倒れた産廃屋の巨体がブレーキになり、頭部を襲った打撃はそれほどでもなかった。しかし無毛の頭皮が岩角に当たって裂け、眉間の間を生暖かい血が流れていった。

頭を左右に振り、厳しく緊縛された身体を揺すってみた。縄目が食い込んだ皮膚が痛むだけで異常はない。Mの下で横たわる産廃屋は、動く気配もなくなっていた。

「Mっ」と言って、修太の裸身が被さってきた。

修太の流す温かな涙が、冷え切った心を癒してくれる。

「さあ、Mが苦しいだろう」

続いて寄って来た陶芸屋が修太を押し退け、力強い手でMを立たせた。

傍らで産廃屋の足に抱き付いたまま横たわっている祐子を、修太が優しく抱き起こしている。

祐子のすぐ前には鈍く光るトカレフが落ちている。

「二人とも、怪我しなかったのね」

改めてMが尋ねると、祐子と並んでいた修太が立ち上がって自慢そうに言った。

「Mの声で地面に伏せたんだ。頭のすぐ上を銃弾が飛んでいったよ。凄く怖かった」

「もう一発はこいつに当たってくれた」

陶芸屋が、先の吹き飛んだマグライトを目の前に突き出した。

「危ないところだったのね。良かったわ」

明るい声で言って、さり気なく産廃屋の身体を見下ろす。

Mと祐子のタックルを受けて倒れ込んだ産廃屋の頭は、地面から突き出した坑木に手酷く激突していた。妙な形に首がねじれ、見ようによってはユーモラスな姿態にも見える。誰の目にも首の骨が折れているのは明らかだった。

産廃屋の死体を目の当たりにして沈黙した一同の中で、未だ興奮冷めやらぬ修太が、まじまじとMの姿を見て言った。

「それにしてもMは凄い格好になったね。てかてかの丸坊主だ。おまけに眉までない。下の毛も子供みたいに、てかてかにされてしまった。きっと、こいつがしたんだ」

話しているうちに、なおさら興奮した修太が、怒りに頬を赤く染めた。

「この眉なし女め、思い知れ」

大声で叫ぶと、苦痛に呻くカンナの腰を蹴った。カンナは蹴りに反応しようとしめない。左の太股から血を流したまま、全身を小刻みに痙攣させている。流される多量の血で、池も一面朱に染まっている。

「修太。カンナに何をするの。あなたには、まだ人の痛みが分からないの」

これ以上はない怒声で唸り飛ばした。修太の裸身が真っ赤に染まり、急に小さくなった。

「殺して、もう耐えられない、早く殺して」

苦痛をこらえていたカンナが、また悲痛な声を上げた。

「次の痛みが襲ってきたら、もう生き地獄だ。ねえ、誰でもいいから、あたしを殺して」掠れた声で哀願する。

しゃがみ込んでいた祐子が目の前のトカレフに手を伸ばすのが見えた。

産廃屋を殺したと思っているに違いない祐子に、カンナまで殺させるわけにはいかなかった。

「修太と陶芸屋は呼ぶまで外に出なさい。早く。今すぐに」

毅然とした大声に撃たれたように、二人は背を向けて肩を落とし、入り口に向かって歩く。

「祐子は拳銃を地面に置いて、私を良く見ていなさい」

静かに言ってから、Mはカンナの顔の前に屈み込んだ。上を向いた苦痛に歪むカンナと目が合う。

「お願い」

カンナの力無い声が耳を打つ。次の痛みが襲い掛かって来るのが分かったのだろう。

Mは小さく頷いてからひざまずき、耳元でしっかりした声で告げた。

「カンナ、あなたは今でも十分美しい」

新たな痛苦がカンナを襲った。顔が歪み、全身が細かく痙攣する。

Mはカンナの顔を跨いで大きく股間を広げた。無毛の股間の下に、脂汗の浮いたカンナの額が見える。後ろ手に緊縛された胸を張り、無毛の頭をまっすぐに正し、できるだけカンナの口と鼻が柔らかな粘膜に触れるよう細心の注意を払って、Mは腰を下ろした。

嗚咽とともに、止めどなく涙が流れる。新たな苦痛の波に襲われたカンナが尻の下で全身を震わせる。

尻の下の顔が左右に振られ、ひととき強く股間を吸われた。

カンナの最後の命が吸っているのだとMは思った。

「ウワッー」という絶叫がMの口を突いた。尻の下のカンナの全身が固く硬直し、そのまま動かなくなった。

カンナの呼吸を奪った姿勢を二分間続けた後、Mはよろよろと立ち上がった。

そっと見下ろしたカンナは、瞼を閉じた美しい顔をしている。肩から力が抜け、新しい涙が絶えることなく両の頬を伝った。

泣きながらMの腰に飛び付いてきた祐子が、憑かれたように股間を舐めた。

Mは祐子をそのままにさせておいた。祐子は意識の中で二人も人を殺したのだ。そしてMは、現実には二人を殺したのだと、改めて思った。

「分かったわ、修太さん。全員無事なのね。ほんとうに良かった。また経過を報告するのよ」

センセイは電話を切り、布団にうつ伏している助役に声をかけた。

「通洞坑へ行った教え子からの電話よ。産廃屋が死んだそうです。秘書役の女も死にかけているそうです。産廃屋の拳銃が暴発したと言っていました。後の全員は無事だそうです」

うつ伏したまま、センセイを見つめていた助役の目が鋭く光った。

「死んだか」

ぼっそりと言った助役の下半身は裸だった。大きな尻の左右に赤い手の痕が残っている。

「忙しくなるな。センセイ、もう一回お願いします」甘える語尾が、まるで今の状況と似

合わない。

助役の剥き出しの尻の横に膝を突いて、中腰になったセンセイが右手を振り上げて怖い声で言った。

「助役さん。お仕置きです。両足を広げてお尻の穴まで見えるようにしなさい。選挙に負けたらこんなものでは済みませんからね」

ピシィ、ピシィと二回。両足を大きく開いた助役の尻が鳴った。歓喜に満ちた悲鳴が口を突く。

「センセイ。お仕置きありがとうございました」

真面目な声で言った助役が起き上がり、布団の上に胡座をかく。勃起したままのペニスが股間で屹立している。

しばし腕を組んで考えていたが、大きくうなずいてからセンセイに頼んだ。

「役場の観光課に電話を入れてください」

センセイの手から役場に繋がった電話を受け取ると、静かな声で命じた。

「助役だ。村木君を呼んでくれ」

威厳に満ちた声が甦っている。剥き出しの下半身がアンバランスすぎた。

「村木か。すぐこれから産廃屋の事務所に行け。関係帳簿を全部持ち出して来るんだ。産廃屋は死んだ。何をしてもかまわん。これは命令だ。急げ」

「すぐ出掛けます。助役さん」と緊張した声で答える村木の声も聞かずにセンセイに電話を返す。

助役は胡座をかけたまま両手を上げ、大きく伸びをした。

「産廃屋は死んだ。秘書役も死ぬという。県知事は産廃処分場の建設を認可しないんだ。仕事に失敗した産廃屋たちが失踪したとしても、誰も疑いはしない。そうだろう、センセイ」

恐ろしい男だとセンセイは思う。それに頼もしい男だ。男はこうでなければと思い、町長になるかもしれないと思った。

「村木の持ってくる帳簿の内容によっては、予定より早く町長を追い詰めることもできる」

「二人の死体はどうするんですか。通洞坑の奥に埋めるんですか。坑道に集まった人たちが納得するかしら」

「通洞坑は子々孫々まで、我が町の鉱山記念館の一環として残さねばならない大事な財産

だ。死体など埋めるわけにはいかない。今、坑道にいる生きた人間は皆、町の住人だ。そして、住人の将来に渡る利益を守ることが私の仕事だ。私が通洞坑に行こう」

即座に決断した助役がセンセイの差し出すズボンを穿いた。上着を着て姿見の前に立った助役はもう、下半身を剥き出しにしていたときとは別人のように大きく見える。どんな格好をしていても、何をしても、いつも同じように素敵に見えるのが最高なのにとセンセイは寂しさを感じた。しかし、男たちの棲む世界は決して、そんなことは許さないのだろうと思い直した。

「ごめんください。センセイはおりますか」

教室に続く廊下から男の声が聞こえた。

センセイは慌てて白いバスローブを身に着け、ドアを開けた。

廊下の角に作業服を着た男が立っている。男はセンセイに一礼して近付いて来た。

「祐子の父です。お世話になっています」

「やあ、緑化屋さん。ご心配をおかけして申し訳ありません」

センセイの後から廊下に出てきた助役が、センセイの頭越しに声をかけた。

「助役さんまでいらっしていたのですか。恐縮です。お手数をおかけします」

「いやいや、町の人たちの心配は皆、私に責任があります」

町の幹部と技術官僚の長く続きそうな挨拶にセンセイが割って入る。

「祐子さんは無事、通洞坑で保護されました。さっき同級生の修太さんから電話がありました。もうご心配は要りません」

「ありがとうございます」

緑化屋が二人に深々と頭を下げた。

「いや、礼には及びません。私も事態を確認するため、これから通洞坑へ行くところです。仕事の都合が付くなら、ご一緒にいかがですか」

「えっ、助役さんが現地にお出掛けになるのですか。重ね重ね恐縮です。ぜひ同行させてください。仕事は早々に切り上げてきましたから、大丈夫です」

「では、早速参りましょう。センセイ、できるだけ多くバスタオルを用意してください」

部屋に戻ったセンセイが十枚ほどのバスタオルを抱えてきて、後に続いた。

「子供たちは、裸のまま保護されたそうなんです」

怪訝な顔の緑化屋に助役が歩きながら説明する。緑化屋の顔が曇った。

午後の炎天下に、スバル・サンバーの白い軽トラックが止めてある。

助役が運転席のドアを開け、窮屈そうに乗り込んだ。

「助役さん、私のワゴンがありますが、いかがですか」

「私の自家用車ですから遠慮せずに乗ってください。山地の足に使うには軽トラックの四輪駆動が一番便利なんです。なに、クーラーはちゃんと効きます。さあ、どうぞ」

センセイからバスタオルを受け取った緑化屋が、驚きを隠せぬ顔で助手席に座った。

「それでは、行って来ます」

センセイに声をかけると、白い排気ガスを立ち上らせて軽トラックが発進した。

二つの死体の前で、Mと祐子はぼう然と立ちつくしていた。冷え切った身体に張り着いた祐子の裸身が暖かく感じられる。人の肌は温かいのだ。

冷めたくなくなってしまったカンナの顔には、赤いタンクトップがかけられていた。祐子がかけた物だが、他にカンナの遺体を覆う物はなかった。Mも祐子も素っ裸だったのだ。Mは後ろ手に緊縛されたままだ。

気が付いた祐子がMの背後に回り、縄を解こうとするが、きつく戒められたカンナの執念は解けなかった。地面に落ちていた大型ナイフを祐子が拾い、やっとの思いで後ろ手の縄目を断ち切る。

自由になった両手を広げ、祐子の裸身をきつく抱き締めてやる。まだ残る胸縄に厳しく戒められた両の乳房に、祐子の熱い涙が滴り落ちた。

入り口の方から四人の姿が浮かび上がった。

修太と陶芸屋、奥さんとチェロの緊張した顔がランタンの明かりに浮かび上がる。ぼう然と立ち尽くす三人を尻目に、奥さんがカンナの裸身に歩み寄った。屈み込んで顔に載せたタンクトップを取り、検分する。プロの看護婦の手並みだった。小さく首を振ってタンクトップを元に戻して立ち上がった。続いて産廃屋の前に屈み込んで検分した。また小さく首を振って産廃屋の瞼を閉じさせ、ハンカチを取り出して顔にかけた。

「お二人とも死んでいます」

冷静な声で奥さんが告知した。

抱き締めた祐子の裸身が小刻みに震え、乳房の上にまた熱い涙が流れていった。

二人の死に彩られた沈黙が坑道に満ちた。

先ほどまでぼう然と立ち尽くしていたチェロが厳粛な表情で、背筋を正して歩み寄って来る。

驚いたことに、カンナの遺体に一礼して経を唱え始めた。なんとも言えぬ違和感を持ったが、それがチェロの本業なのだ。看護婦が死を告知し、僧侶が経を読む。極めて厳粛な儀式なのだが、Mには理解しきれない日常の侵入としか思えなかった。

カンナも産廃屋も、決して喜びはしまいとさえ思ってしまう。

いつの間にか祐子もMのそばを離れ、他の四人に合わせ、頭を垂れてじっとチェロの読経に耳を傾けている。

Mは急に込み上げてきた渇きを感じた。水が飲みたいのではなく、外の空気を胸一杯に吸いたくなった。

入り口の明かりに見入った目に、頭を垂れて神妙にたたずんでいる修太の裸身が映った。裸の胸に携帯電話がぶら下がっている。しばらく電話を見つめるうちに、Mは決心が付いた。警察を呼ばねばならない。二人も人を殺したのだ。

さり気なく歩き出したとき、読経を終えたチェロが振り返って、じっとMを見つめた。

「Mさん。お美しい。まるで観世音菩薩様のようだ」

感じ入った声で言って両手を合わせた。

「そう、私は美しいわ。カンナも美しかった。修太、私に電話を貸しなさい」

凜と響く声で言って右手を差し出す。

まぶしい目でMの瞳を見つめた修太が、ケースから抜いた携帯電話を手渡す。

「わー、みんないるんじゃないか。狡いよ、僕だけ置き去りにして」

狭い坑道から突然泣き声が響き、光男が姿を見せた。

「光男さんっ」と叫ぶ喜びの声が、奥さんの口を突いた。

これで全員揃ったのだ。

喧噪を背に、Mはぼつんと点る入り口の明かりに向けて歩いて行った。

鉄の潜り戸を出ると、まぶしい夏の光と熱気が裸身を包み込んだ。

日は山の端に隠れていたが、溪谷の先には真っ青な空が広がっていた。湿った熱気が冷えた肌に心地よく、思い切り吸い込む外気には木々の香りがした。

この美味しい大気を二度と吸うこともなく、暗い坑道の中で死に果てたカンナのことを思うとまた涙が出た。カンナが最期に吸った股間がしくしくと痛んだような気がした。

Mは警察の番号をダイヤルしようと、感度の良さそうな場所を搜した。

溪谷を見下ろす鉄橋の上に行こうとしたとき、カーブを曲がって姿を現した白いスバル・サンバーがベンツの前に止まった。ドアが開き、紺のスーツの助役と作業服の緑化屋が

降り立つ。

どうやら、オールキャストが勢揃いするようだった。

赤錆びた鉄橋を身軽な動作で渡ってMの前に立った助役は、素っ裸で無毛の頭部を晒した異様な姿にも驚いた顔一つ見せない。後に続く緑化屋が、大きく口を開いて驚きの声を呑み込んだ。

「Mさん。今日は特別にお美しい。まるで仏様のようだ」

助役が感動した声で言った。

「ええ助役さん、きっと私が殺した人の美しさまで乗り移っているのでしょう」

「そうですか。そうかも知れませんね。ところで、どこに電話をしようというのです」

眉一つ動かさずに静かな声で尋ねた。

「人を殺したのですから、警察を呼ぶつもりです」

「Mさん。何をうろたえているのですか。うろたえる必要などない。私が来たのです」

「別にうろたえてなどいません。人を殺したのだから、当然すべきことをするのです」

「共に生きる人のために、人は人を殺すものです。昔からそうでした。驚くほどのことではない。電話を私に渡しなさい」

「いやです。私は私のしたいようにします」

「Mさん。勘違いをしてしまっては困ります。もう、あなたは独りで生きているのではない。私もあなたと共に生きることになったのです。だから、私はここにこうしているのです。渡しなさい」

強い口調で言った助役が、Mの手から携帯電話を奪った。Mは抵抗できなかった。

産廃屋の足にしがみつくと、銃声の轟く坑内に飛び込んで来た修太の姿が、目まぐるしい速さで脳裏に浮かんで消えた。

助役の言ったように、もはやこの町では、独りで生きられないのかもしれないと思ってしまう。

助役がその場で携帯電話を発信した。

「助役だ。土木課長を呼びなさい。課長、元山沢に通じる道路を入り口ですぐ封鎖しなさい。落石事故の恐れがある。嚴重に封鎖するのです。これは助役命令です」

きびきびとした助役の命令を耳にしながら、Mはどっと疲れが湧いて出るのを感じた。

どっしりとした足取りで助役が通洞坑に向かう。後に続く緑化屋がMにバスタオルを手

渡した。まるで、助役の秘書のように見える。

何か得体の知れない大きなものが、元山溪谷一体をじわじわと被い込む気配が感じられた。

「やはり死んだ者は損なのだ」と、安らかだったカンナの死に顔を思い出して、Mはそつとつぶやいた。

1 4 登り窯

陶芸屋は急に忙しくなった。予定していた窯焼きが一か月以上早くなってしまったからだ。

今日も朝早くから倉庫と登り窯の間を激しく行き来して、窯詰めの手配をしている。夏休みをとって手伝いに来た緑化屋と村木の姿も見える。

Mが私室に使っているログハウスの屋根裏部屋から、汗にまみれて立ち働く三人の姿が見下ろせた。

屋根裏部屋の窓は北の山に向かって開いている。山の斜面を這う登り窯を被ったトタン屋根も見えた。屋根の下には、山を下る巨大な芋虫のような怪異な姿で、登り窯が横たわっているはずだった。窯の回りには芋虫の餌となる松材の薪が、うずたかく積まれている。

倉庫と窯の間を数往復した緑化屋が窯の前まで行き、大きく伸びをした。単調な作業にうんざりしてしまったようだ。

緑化屋は目の前に横たわる芋虫にじっと目をやった。見れば見るほど奇怪な窯だと思う。

登り窯の長さは10メートルはあった。幅が2・5メートルほどで、高さも2メートルはある。焚き口と後ろに立った煙突部分との標高差が5メートルはあった。

耐火煉瓦を積み重ねた上を粘土で厚く被い、全体が滑らかな曲線で形作られている。焚き口の大きな半球型の上に同じ様な瘤が四つ続いて見える。その様がちょうど、山を這い下って来る芋虫に見えるのだった。

目の前にぽっかりと空いたアーチ状の焚き口は芋虫の口だ。そしてまるで目のように、左右に覗き穴が開いている。

焚き口のある半球が火袋。その後ろの瘤がそれぞれ一の間、二の間、三の間、四の間と呼ばれる窯室で、連続して続いている。各室ごとに左側の壁にアーチ状の出入り口があった。

「すぐ、窯詰めにかかろう。今夜のうちに炙り焚きが始められる。三昼夜焚き続けるんだ。応援の仲間を呼べないから、あんたと村木に戦力になってもらおう。しかし、事情の知らない村木は初めは使えない。あんただけが頼りだ。辛い仕事になるが頑張ってくれ」

いつの間にか緑化屋の横に並んだ陶芸屋が、思い詰めた口調で告げた。

「まさか、陶芸屋の助手になるとは思わなかった」

「一口に、焼き物というくらいだ。この三日が勝負になる。頼んだぞ」

力無い緑化屋の言葉に、いつになく真剣な顔で応えた陶芸屋が、一の間の方に向かった。窯詰めを始めるらしい。商売とはいえ、大変なエネルギーだ。

「Mっ、手伝ってくれよ」

陶芸屋の大声と同時に、ログハウスの二階で窓の閉じられる音が響いた。窓辺にいたMが窓を閉めてしまったらしかった。

Mは手伝いはしまい、と緑化屋は思う。二日前の通洞坑の闇の中で、珍しくMは自分の意見を主張しなかった。祐子のことを思い惑ったのだと緑化屋は思う。

元山沢を出る日が近付いた予感がした。

幸いこの二年間、祐子に喘息の発作はなかった。しかし、心の傷は一層深まったはずだ。中学校に進学するのを機に、少なくとも下流の市には転出したかった。道子を呼んで、親子三人で暮らそうと思う。市まで出れば都会へも通える。現場で埋もれてしまうのはもう耐えられなかった。

今年政務次官になった代議士の顔が目には浮かんた。緑化屋が中央官庁にいたとき、結構気の合った族議員の一人だった。帰任を頼む手紙を書こうと思った。別に恥ずかしいことではない。この町の助役がいうように、私は官僚の一人なのだと緑化屋は思った。

二日前に通洞坑で、助役の言った言葉が耳に甦ってくる。

通洞坑の闇の中で、現実とは思えない冷気が、緑化屋の爪先から身体の内へと上がって来ていた。

子供たち三人は、チェロと町医者のおさんが外に連れ出していた。

目の下に横たわる二つの死体の前に残っているのは、緑化屋と陶芸屋、M、そして助役の四人だった。

「Mさんがしようとしたように、私も警察に通報すべきだと思う」

冷静な口調で言えた緑化屋は思った。考えた末の結論だった。

二つの死体の処置を巡って長い議論が続いていたのだ。

「緑化屋さん。官僚とも思えない意見だ。いいですか、あなたは官僚なのだから、先ず全体のことを考えなければならない」

諭すように助役が続ける。

「いくらMさんが一人で責任を取ろうとしても、そうはいかない。緑化屋さん、少しは娘

の祐子さんのことを考えたらい。祐子さんは、Mさんと一緒に産廃屋を殺したと思っているはずだ。ここにいた者は皆、そう思っている。また、陶芸屋さんと修太さんは、自分たちが向こう見ずに坑内に飛び込んだから事件が起きてしまったと思っている。Mさん一人が責任を取ったとしても、皆さんの心の傷は消えるどころか、時とともに益々大きくなっていくだろう。産廃処分場の問題はもはや、雲散霧消してしまっている。県知事は建設を認可しないことに決めたのだ。産廃屋たちがゼネコンに頼まれて来たのか、利権を漁りに来たのかは知らない。しかし、仕事に失敗したやくざ者が失踪したからといって、気に掛ける者などいるはずがない。つまり、この人たちの存在理由はなくなっているのだ。今更葬式を出してやって、名残を惜しむ必要などない」

「しかし、助役さん。死体が残っている」

子供たちの気持ちを考え、暗い気分になり落ちてしまった陶芸屋が困惑した顔で言った。「そう、死体が残っている。そこでだ。陶芸屋さん、あなたの所には千三百度にも温度が上がる登り窯があるそうだ。三日三晩焚き続けるとい。その窯ですぐ、焼き物をお焼きなさい。ついでに、この二人にも付き合ってもら。跡形も残らないだろう」

「そんな無茶な」

陶芸屋が叫んだ。

「そうかな。今私たちは、法的に言えば些細なことで悩んでいる。Mさんと祐子さんが正当防衛か緊急避難で人を殺したこと。そして、Mさんが人を安楽死させたことだ。これは自殺幇助に当たるだろう。今度は、私を含めた残りの者が死体遺棄をしようというのだ。それぞれが今回の事件の責任を分担することが、そんなに無茶なことだろうか。先ず子供たちのことを考えるべきだ」

反論できる者は誰もいなかった。関係者ではない助役が手を汚そうというのだ。

登り窯を持つ陶芸屋がうなだれたまま首を縦に振った。続いて官僚としての緑化屋がうなずいた。

黙ったまま背を向けて、Mが坑道の入り口へと向かった。裸身に巻いた白いバスタオルが陶芸屋と緑化屋の目にまぶしく映った。

「小役人。二日間よく働いたな。これで助役が町長になれば観光課長間違いなしだ」

夕闇の迫った登り窯の前で陶芸屋が村木をからかう。

「先輩はひどいことを言いますね。僕はそんな下心なんかないですよ」

「下心のないやつが、夏休みまでとって重労働をするはずがない。しかし、まあいい、お陰で一日早く窯詰めが終わった。もっとも、作品の数が少ないから四の間は空いたままだ。効率が悪いけど仕方がない。小役人はこれで帰って、明後日の夜明け前に来てくれ。攻め焚きで忙しくなるから絶対来いよ」

「分かりましたよ。人使いが荒いんだから。もうくたくたですよ。先に帰らせてもらいますね」

疲れ切った足取りで帰る村木の背に、陶芸屋の冷やかしが飛んだ。

「課長になったときのことを考えて、堂々と歩け」

陶芸屋と緑化屋は焚き口の前に座り込んだ。

「今夜から焚き始めるのか」

「うん、さっき助役に電話を入れた。十一時には来るそうだ。火を入れるのは一時ころになりそうだな。どっちみち夜やるしかないんだからな」

「そうだな、作品はうまくいきそうか」

「分からない。できるだけことはやった。陶芸は火の芸術と呼ばれるくらい窯焼きが大事だ。素人と一緒に焼くのは初めてだから、作品は分散して窯詰めした。できれば、力を入れた大皿だけでも何とかしたい。でも、俺の窯が火葬場になるなんて思っても見なかった」

「陶芸の道に反しないのか」

つまらないことを聞いたと緑化屋は思ったが、気にした風もなく陶芸屋が答える。

「陶芸の道より人の道が大事だ。その人の道に外れたことをしようというのだ。陶芸など、どうに吹っ飛んでしまっているよ。後はいっそのこと、焼き上がった作品に魔が乗り移ってくれればいいと思うだけさ」

陰鬱な顔で言った陶芸屋が立ち上がり、焚き口の前を竹箒で掃き始めた。

「いつもは、しめ縄を張り、御神酒で清めるのだが、今度はそうもいくまい」

寂しそうな言葉が洩れた。しかし、もう選り取ってしまった道だ。緑化屋も立ち上がり、自分の車の方に向かった。

「十一時に来る」

振り返って、腰を屈めて箒を使う陶芸屋に声をかけた。

「ああ」

下を向いて答えた陶芸屋の顔の横で、登り窯に添って植えた向日葵の大輪の花が黄金色

に輝いていた。

真夜中に出て行った車のエンジン音が三十分後に戻って来た。

Mはベッドから下りて、窓から外を見下ろす。外灯の下に装甲車のような四輪駆動のトラックが止まっている。左右のドアが開き、陶芸屋と緑化屋、助役の三人が降り立つ。

Mは足音を立てぬようにして階段を下り、裏口から裸足で外に出た。素っ裸の身体を、ねっとりした夜気が包む。車から三メートルほど離れた、張り出したアトリエの壁の陰にたたずむ。

空を見上げると月はなく、中天に大きく銀河が流れていた。

男たちがトラックの荷台の蓋を下ろす物音が響いた。荷台に目をやると、赤と黒の布に包まれた二つの遺体が横たわっている。布はMと町医者のおさんで用意し、男たちに持たせたものだ。外灯の青い光の中でも赤と黒のコントラストが鮮やかだった。

カンナと産廃屋の死装束に相応しい色合いだとMは思った。赤と黒を配した旗は、絶対自由を求めて戦ったスペインのアナキストたちのシンボルだった。自らの責任と人格だけを頼りに戦って死んだ二人に、ぴったりの配色だ。それにしても私は今、何をしているのだろうとMは思ってしまう。

走り出したくなる衝動を抑え、背筋を伸ばし、じっと立ち尽くしていた。

陶芸屋と緑化屋がそれぞれ、黒い布に包まれた産廃屋の頭と足を持って歩き出した。先頭に行く助役がランタンを掲げて足下を照らす。寂しい葬列がMの前を通り過ぎる。両の目から涙がこぼれた。

「一の間に入れるぞ、頭からだ」

陶芸屋の声が陰惨に聞こえてくる。

戻って来た三人が、赤い布に包まれたカンナを荷台から運び出した。

「あっ、観音様がご覧になっている。ありがたいことだ」

Mの姿に気付いた助役がランタンを上げて厳かな声で言った。

アトリエの影にたたずむMの姿を三人の男が見た。全身無毛の真っ白な裸身が微動だにせず、ひっそりとたたずんでいる。全員が目が救いを求めて観音を見た。三人揃ってMに頭を垂れる。

答礼もせず、ただじっと、大きく瞳を見開いたMの裸身の前を、カンナを運ぶ短すぎる葬列が行く。

「二の間に入れる」

陶芸屋の声が響いた後、出入り口を塞ぐ耐火煉瓦を積む乾いた音が続いた。

煉瓦の上に厚く粘土を張り終えた陶芸屋が、焚き口の前に戻って来た。

屈み込んだ手元がぱっと明るくなり、燃えた小枝が焚き口の中に消えた。続けて何本も小枝が投げ入れられ、焚き口全体に赤い炎が揺らめきだした。しばらくすると、焚き口の上の左右に二つ穿たれた覗き穴から、真っ赤な炎が揺らめき立った。まるで、怒りに燃え上がる両眼のように見える。

すかさず陶芸屋が屈み込んだまま移動し、焚き口の左右に空いた穴から太い薪を投げ入れる。怒りに燃えた芋虫の両眼から、ひときわ高く炎が上がった。

「燃え始めましたね。三昼夜、燃え続けるのです」

Mの横に並んで立った助役が静かな声で言った。

「ええ、見えていますわ、助役さん」

「何が見えるのです」

「あの人たちが救いを求めている姿が見えます」

「そんなことはない。自然に還るのです」

きっぱりと言った助役が背を向けて、車の方に歩いていく。紺のスーツを着てきちんとネクタイまで締めていた。やがて、軽トラックの高いエンジン音が去って行った。

目の前の登り窯では、焚き口と覗き穴から吹き出す真っ赤な炎を浴びた陶芸屋と緑化屋が、交互に太い薪を窯の中に投げ込んでいる。

焚き口から延びる炎は、二昼夜に渡って登り窯の各室を這い上がった。

三日目の夜明け前からは村木も参加して攻め焚きが始まった。各室の出入り口を封鎖した耐火煉瓦の上部に空いた穴から薪を投げ入れ、一室ごとに高温で焼き上げるのだ。

覗き穴からのぞき、炎の状態を確認した陶芸屋の指示で一の間から始める。

アーチ型の出入り口の上に空いた左右の穴から、続けて投げ込まれる小振りの薪が激しく燃焼する。強烈な勢いで覗き穴から吹き出す炎が、真っ白な糸のように輝いて見える。

窯の温度は軽く千度を越えたはずだ。

間断なく薪をくべ、様子を見、陶芸屋の指示で焚き口を耐火煉瓦で封鎖してから二の間に向かう。

すべてが終わったのは四日目の午後だった。男たちは三人とも熱で炙られ続け、声も出

ない状態になっている。ふらつきながら、すべての焚き口と覗き穴を封鎖して、その場に長々と横になった。後は窯出しまでの一昼夜、窯を冷やすだけだった。

しばらく前から、夕暮れ近い窓越しに陶磁器の碎ける音が続いている。

「これも駄目だっ」

陶芸屋の悲痛な叫びとともに、また陶磁器の碎け散る音が響いた。

窯出しが始まったのだ。

陶芸屋の思う通りに焼けなかったらしいとMは思った。焼けてたまるかとさえ思ってしまう。

陶芸屋の叫びに混じって、大勢のざわめきが聞こえて来る。

「気を落とすな、次の室は大丈夫だ」

状況に相応しくない、上機嫌に聞こえる助役の励まし声が聞こえた。いや、前助役と言うべきかな、とMは思い直した。

昨夜訪ねてきた町医者のおさんは、来月早々町長選挙になると興奮していた。

町長が町議会議長に辞表を提出し、受理されたという。

助役の指示で村木が産廃屋の事務所から持ち出した帳簿の中に、町長の収賄を裏付ける書類があったというわさだった。その書類をもとに、助役が町長を責めたらしかった。弁明をしようにも産廃屋たちは何処にもいない。あの抜かりのない産廃屋が、もしものときの切り札に町長に突きつけるために残した証拠だった。町長に抗弁できる余地などなかった。警察沙汰にしないことと引き替えに町長が辞表を書いたらしい。

助役の機嫌がいいに決まっていた。恐らく無競争のまま無投票で当選するに違いなかった。

産廃屋たちのお陰で来春まで待たなくて済んだのだ。すべてを見通した上で、遺体の処理を急いだのかも知れなかった。

もう産廃処分場を巡る確執の痕跡は何もなかった。人は焼かれ、産廃屋の事務所も今日中にブルドーザーが踏みつぶすという。元々役場が壊す予定だったポンコツビルだ。住人がいない以上、異議を申し立てる者など誰もいない。すべてが助役の思い通りに運んだのだ。陶芸屋の作品など、どうなっても構わないのだろう。

「よしっ。その茶碗は使える。私が買おう」

楽しそうな助役の声が響き、誰かが拍手をした。きっと村木に違いないとMは思った。

黒のタンクトップに黒いジーンズを穿き、Mは姿見の前に立った。無毛の頭と眉のない顔が、まだ他人の顔のように見える。黒の野球帽を取って目深に被ってみたが、すぐ脱ぎ捨てた。カンナが最期にした仕事を、恥ずかしがって隠すことはないと思い直す。曲がったオレンジ色のサングラスを指先で延ばしてかけた。

「さあ、Mさんのお出ましといくか」

カンナの口癖をまねて明るい声で言ってみたが、情けなく涙が込み上げてきてしまった。

「これが泣き仕舞いだよ」

厳しい声で言って胸を張った。鏡の中で昔のMが甦ったような気配がした。

登り窯の横に全員が集合していた。三人の子供たちの姿も見える。

歩み寄るMを、いち早く見付けた修太が駆け寄ってきた。

「やあM。やっと格好良くなったね。ツルッパゲも似合って見えるよ」

「かわいそうだよ、てかてか頭って言いなよ」

光男も寄り添ってきた。

チェロの横に隠れていた祐子が顔を見せ、まぶしそうにMを見つめた。子供は皆、正直なものだと思う。やっと本来の自分に戻った気がした。

「Mさん、おはよう。今頃起きたんですか。かわいそうに先輩、もう二室も失敗しているんですよ」

村木が、それほどかわいそうがっていない声で挨拶した。

登り窯の横の地面には、茶碗や花器など十数点の小物が置いてあるだけだ。隣の草むらで陶磁器の破片が山になっていた。なぎ倒された大輪の向日葵が、横になったまま黄色の花を日に向けている。蝉時雨が一層高く耳を打った。

窯出しは三の間に移っていた。もうこれが最後だ。

「畜生っ」

悲痛な声が陶芸屋の喉で鳴り、大皿がまた一枚、草むらに飛んだ。

Mは既に空になった一の間をのぞき込んでみた。黒く焼けた土が見えるだけで、何の痕跡もない。二の間も同様だった。一切が土に帰り、煙とともに天に昇ったのだと思った。

冷静にカンナと産廃屋を焼いた跡が見られたことに満足し、三の間の前に進んだ。もうそれほどの作品は残っていないようだった。見守る人たちの顔に失望の色が広がっている。

窯の奥から陶芸屋が、大きな匣鉢を二つ重ねて重そうに運んできた。直径が八十センチメートルほどある。

「これが最後だ」

唸るように言って鉢を開いた。

一瞬の沈黙の後「ウオゥー」という喚声を取り囲む人たちの口を突いた。震える手で陶芸屋が大皿を取り出し、目の前に掲げた。途端に全員が手を叩き喝采した。子供たちがまた、喚声を上げる。

直径六十センチメートルの大皿は確かに傑作だった。きめ細かい鉄色の独特の地肌の上に、漆黒の釉が浮き上がっている。まるで、飛沫を上げて流れる元山溪谷の溪流のように力強く、雄大な渦を巻いていた。

手放すことができない風情で、地面に黒い大皿を置いた陶芸屋が、続いて下の鉢を開けた。

声にならぬ驚愕が、見守る全員の身体を貫いていった。村木一人が嬌声を上げ、手を叩いている。

鉢の上に屈み込んだまま動かず、じっと中を見つめたままの陶芸屋の横から村木が手を伸ばして大皿を取り、目の前に掲げた。

全員の息を飲む音が、大きく聞こえたように全員が感じた。

チェロが目を閉じ、頭を垂れて合掌した。横に立つ祐子の肩が小刻みに震える。修太は目を大きく見開く。光男の肩が落ちた。町医者のおさんが右手で瞼を押さえた。緑化屋が頭を横に振った。屈んだままの陶芸屋の肩に、助役が右手を置く。

Mは一步踏み出し、村木が掲げた大皿の端を両手で握った。胸の底で大きな音が轟き、鼓動が高まる。

両手で持った大皿の鉄色の地肌は、これ以上はないというほど滑らかで明るい色をしていた。鉄錆色の釉が、まるで朱と見まがうほどの鮮やかさで、乱れ髪のように一面に舞っていた。カンナが無くした髪が乱舞しているとさえ見えた。いつも身に着けていた衣装のように、赤く輝いて見える。そして、先ほどの大皿がもたらした、産廃屋の身を被っていた黒。

全員が感じたように、カンナと産廃屋の魂が自然に還り、炎に責め苛まれ、土と混じり合った末、限りなく美しい造形となって甦ったのだ。

「二人の魂が清浄な美となって戻って来た。お祭りせねばなるまい」

助役の声が低く響いた。

何も知らぬ村木が戸惑いながらも、大きく首を縦に振ってうなづく。

「ちょうど、廃社になって久しい元山神社の祭礼の日も近い。素晴らしいご神体が二体もできたのだから、荘厳な祭りにしよう」

助役の言葉に全員がうなずいていた。それほどの衝撃を、最後に窯の中から出てきた大皿が与えたのだ。

「来月初めの日曜日になる。ちょうど町長選挙の告示日に当たる。私の出陣式を兼ねてもいい。町の住人を元山沢にみんな呼んで盛大で壮麗な祭りにしよう。幾らかかってもいい、金は私が出す」

助役が言い終わる前に、Mが大皿を掲げたまま静かな声で言った。

「祭りには賛成だわ。でもこの祭りは元山沢の祭りよ。ここにいる者だけで祭ればいいわ。この大皿だって、大勢の目には触れたくないはずよ。私たちだけで楽しいお祭りにしましょう。私は御輿がいいと思う。御神輿わっしょい。子供たちも喜ぶわ。私が御輿に乗ってもいい」

「ワーイ」

一斉に子供たちが歓声を上げた。修太と光男が「ワッショイ、ワッショイ」と囃し立てる。

これで決まった。助役の苦り切った顔が皿の隅から見えたが、知ったことではない。

カンナではないが、いつまでも負け続けるわけにはいかないのだ。

ただし、チェロの意見を入れて弦楽五重奏団は参加できることにした。御輿とモーツァルト。楽しくなりそうな予感がした。

15 夏祭り

元山神社は誉鉾岳の山裾にあった。

分校から溪流沿いに一キロメートルほど上り、山側に入る道を五分ほど歩くと、かつて元山鉦の購買所や共同浴場があった広場に出る。共同浴場の横に、神社へと続く石段があった。未だに大小二つの浴槽が朽ちかけたまま、かつての残骸を晒している。男湯に残る青いタイルと女湯に残るピンクのタイルが、キョウチクトウの赤い花の下で悲しい。

緑陰の中、緩やかな勾配の石段を登っていくと、大きな黒い金属製の鳥居が迎える。鉦山から採れた鉦石を製錬し、鋳型に流し込んで作ったものだが、長い時を煙害に痛み付けられ、黒々と腐食が進んでいる。

狭い境内の奥に小さな社殿があった。社殿の前には二体の狛犬が左右に別れて見つめ合っている。

他には、何もない。

鬱蒼と茂る巨木もない。しめ縄の巻かれた巨岩もない。貧相な雑木だけが、剥き出しの神域の回りを囲んでいた。神域といっても、もうこの神社には祭るべき神体は残されていない。三十年も前にやっと、神体だけが町の神社に移されていたのだ。神社の跡と呼ぶべきかも知れなかった。

かつては、共同浴場で汗を流した人たちが浴衣姿で境内に集い、殷賑を極めたという鉦山祭りの日が来ても、訪れる人のない祭日がもう半世紀以上続いていた。

今朝、元山神社は、久方ぶりの賑わいの予感に戸惑っていた。

昔、購買所があった広場に数台の車のエンジン音が響いた。

子供たちの嬌声が聞こえ、長い石段を登り、黒い鳥居をくぐって来た修太と光男、祐子が両脇に抱えた折り畳み式のパイプ椅子を社殿前に置いた。

「もう一つ足りないぞ」

浮き立つ声で修太が叫ぶ。

「力自慢の修太が三つ運んでこないからいけないんだ」

光男が負けずに大声を出した。祐子は黙ったまま、乱雑に置かれた六脚のパイプ椅子を広げて整然と並べ始めた。

まだ日は山の端から顔を出していないが、八月にしては珍しい、青く澄み渡った空が頭上に広がっていた。

いつもはセミの声しかない元山神社の境内に、絶えていた子供の声が戻っていた。

「ようし、俺がもう一つ運んでくる。椅子を並べ終わったら大うちわを取りに来いよ」

修太が叫んで下の広場に帰って行く。入れ違いに陶芸屋と緑化屋、そして村木が奇妙な御輿を運んで来た。

先頭から来るのは村木だ。御輿から突き出した先棒を一人で担いでいた。先棒の先から二本、両肩で担げるように支柱が出ている。二本の支柱に挟まれた首がユーモラスだった。

後棒は本体から二本長く伸び、それぞれを陶芸屋と緑化屋が担いでいる。

「ようし、静かに下ろしてくれ。せっかくの作品をまだ壊したくないからな」

陶芸屋が言って、三人は御輿を社殿の正面にそっと下ろした。

それにしても奇妙な御輿だった。先棒と後棒がY字形に突き出した御輿だ。中央には五十センチメートル角の板が置かれていた。その板の上に長さ二メートルの白木の横板が載せられ、左右に長く張り出している。横板の両端には錦の座布団が敷かれ、赤と黒、二枚の大皿が固定されていた。神体となる大皿の配置としては異様な扱い方だった。

どういうわけか、Y字の中心に高さ二メートルの柱が、ヨットのメインセールのように突き立っている。

「バランスが採れていて、思ったより担ぎやすい。いい設計だ。きっと、楽しい祭りになるよ」

興奮した声で陶芸屋が言った。

「そうだな、確かに担ぎやすい。重量バランスを考え抜いた甲斐があったよ」

うれしそうな声で緑化屋が答える。

「僕の持ち場が一番辛いみたいですよ」

村木が情けない声でぼやいた。

「若い者の仕事なんだから泣き言をいうな。ほら、もう一つのご神体の準備もある。日が射し込まないうちにしないと遅くなるぞ」

陶芸屋が素っ気ない声で村木に言って、鳥居の方へ戻ろうとした。

三人の男たちも、先ほどの子供たちも、皆普段着だ。誰一人、祭り半纏すら着ていない。服装からは、祭りの華やぎは伝わってこなかった。

そこに、鳥居をくぐって白ずくめの一団が入ってきた。

弦楽五重奏団を迎えて、急に境内が華やかになる。

「おはようございます。夏らしいユニホームですね」

大きな声で陶芸屋が五人に挨拶した。

「おはよう、御輿も置かれて、すっかり祭り気分だな」

先頭のチェロが陽気な声で言った。

ヴィオラのケースを抱えた町医者のおさんは平気な顔をしていたが、他の三人は奇妙な御輿に戸惑った顔をする。しかし、あの花見コンサートで慣れたのか、異様な御輿のいわれを聞くこともなく、三人の男たちと挨拶を交わしながら演奏の準備を始める。

「恩師、日が山から上ったら演奏を始めてください。音楽が聞こえ次第、俺たちが登場します。つまらない挨拶は一切抜きですからね」

陶芸屋がチェロに言い、男たちは境内を後にした。

チェロを中心に弦楽五重奏団が配置に付いた。子供たちの用意したパイプ椅子に座り、各自が弦に弓を当て、音の調子を合わせ始める。

「皆さんおはようございます。暑くなりそうですね。ご苦労様です」

鳥居の下で大きな声が響き、にこやかな笑みを浮かべた助役とセンセイが入ってきた。

「助役さん、センセイ。おはようございます」

五人の高齢者が小学生のように声を揃えて挨拶する。

助役もセンセイも黒のサマースーツ姿だった。白の上下で揃えた五重奏団とは正反対の服装だ。

「助役さん、今日は町長選挙の告示日でしょう。立候補の手続きはいいんですか」

第一ヴァイオリンの白髪の女性が尋ねた。もっとも、どの女性の髪も皆真っ白だ。

「ご心配をかけます。祭りが終わり次第手続きに行きます。だから、まだ私は候補者ではない。一町民として祭りを楽しませてもらいますよ」

助役が答え終わったとき、山の端からまぶしい日の光が輝き、直射光が境内一面を白く染め上げた。

チェロが姿勢を整え、右手に持った弓を静かに弦に当てた。

モーツァルトの弦楽五重奏曲第四番ト短調、第一楽章の調べが、静まり返った元山神社の境内に響き渡った。歓喜と悲嘆を繰り返す主題がアレグロで駆け抜けて行く。

鳥居の向こうから子供たちの歓声が聞こえてきた。

「ワッショイ、ワッショイ、祭りだワッショイ」

囃し立てる嬌声とともに、それぞれに大うちわを手にした修太と祐子、光男の三人がうちわを打ち振りながら後ろ向きになって歩いて来る。三人のかわいい尻が日に輝いた。皆素っ裸だった。日に焼けた裸身に大粒の汗が噴き出している。子供たちの打ち振る大うちわに扇がれて、Mが姿を現す。やはり素っ裸だ。無毛の裸身の背筋を伸ばし、堂々と歩いて来る。

豊かな乳房の上下に黒い麻縄が二条、厳しく巻かれている。後ろ手に厳しく緊縛された真っ白な裸身が朝の日にまぶしく輝く。

縄尻を持って後続く陶芸屋も緑化屋も、そして村木も素っ裸だった。村木は両手で股間を隠して歩いて来る。堂々と股間を見せて歩く四人の中で、ひととき貧相に見えた。

「裸祭りが始まるのか」

狛犬の前に置かれたパイプ椅子にセンセイと並んで座った助役が、あきれた声で言った。

「でも、みんなうれしそう。開放的な祭りですよ」

「そうかな。開放的でないやつもいる。村木を見ろ。情けないやつだ」

助役が苦笑した。

モーツァルトの調べが一層高鳴る。

御輿の前まで来た一行がうずくまり、御輿に一礼した。

Mが陶芸屋に声をかける。

「やはり胸の中央で、上下の縄を一つに束ねて」

黙ってうなずいた陶芸屋が緑化屋から黒い縄を受け取り、乳房の上下を縛った四本の縄の下に二本の縄を通す。力を込めて縄を引き絞ると、胸の中央で上下二条の縄が一つになった。

「ヒッ」

押し殺した悲鳴がMの口を突いた。縄目の間から無理に、変形して突き出された乳房の先で二つの乳首が苦痛に震えた。

「これがいい」とMは思った。カンナにされたのと同じ、過酷な縄目を受けて祭りに臨みたかった。

小さくうなずいたMは、御輿の中央から延びた横板の上に置いた黒い大皿に左足を乗せた。緑化屋と村木が屈み込んで御輿を支える。

大きく足を開き、右足で赤い大皿を踏み締める。カンナの熱い思いが足の裏から全身に流れていった。Mは大きく開いた股間を心持ち引き、まっすぐに伸ばした背筋を後ろの柱に預けた。陶芸屋が柱と一体になるよう、嚴重に裸身を麻縄で縛り付ける。

「ワァー」

素っ裸の男たちと子供たちが歓声を上げた。Mの裸身が二つのご神体を一つに繋ぎ、三位一体となった御輿が完成したのだ。

先棒を担ぐ村木を先頭に、陶芸屋と緑化屋が位置に付いた。

「エーイッ」

三人で声を揃えて御輿を担ぎ上げる。

「ワッショイ、ワッショイ、祭りだワッショイ」

離し立てる子供たちの声がモーツァルトの調べと一体になり、元山神社の境内に轟く。Mの裸身が激しく、上下、左右に揺れる。

揺れ動く裸身が踏み締める赤と黒の大皿に、Mの汗が伝い落ちる。なんとも雄壮で、艶めいた御輿だった。後ろ手に緊縛され、歪んだ乳房を縄目から突き出した無毛の裸身が、熱い日差しを浴びて揺れ動く。

Mは大きく目を見開いて、一切を見る。今日を限りの元山沢のすべてを、記憶し続けようと思った。

助役が上気した顔で、隣に座るセンセイに話しかけているのが見えた。

「いい、実にいい祭りだ。しかし、この裸御輿は、町の観光資源にはできないだろうな」

「住む人が共に楽しむ祭りですよ。ほら、みんな楽しそう。子供たちのあんなに楽しそうな姿は、これまで見たことがありません。私も混ざりたくなってしまう」

センセイが御輿から目を離さずに答えた。

「センセイも混ざればいい。私も楽しみだ」

「助役さんも一緒に行きましょうよ」

「いや、センセイ一人がいい。私は裸になるわけにいかない」

「別に、裸でなくとも、」

「いや、裸でないと参加した意味がない。さあ、センセイどうぞ」

勧められるままにセンセイが靴を脱ぎ、黒のスーツを脱いだ。続いて黒のブラジャーとショーツを脱ぎ捨てた。素っ裸になって、恥ずかしそうに助役に笑い掛けてから、引き締

まった小振りの尻を振って駆け出して行った。まぶしそうな目で助役が見送る。

「ワーイ、センセイも来た。ワーイ、祭りだ、祭りだ、ワッショイ、ワッショイ」

センセイの裸身を見て、修太と光男がうれしそうに駆け寄って来て離し立てる。

じっと一切を見下ろすMの下腹部がツンと痛んだ。吹き出す汗に冷たい汗が混じった。

生理の予定はもっと先だったはずと思ったが、大きく開いた股間に熱い感触を感じた。

先棒を取る村木がつまずき、御輿が大きく傾斜した。

Mの股間から、どろっとした赤黒い経血が太股を伝い、地面に落ちた。

見ていた子供たちと、後棒を担ぐ陶芸屋、緑化屋が戦慄した。

御輿が止まり、子供たちが静まり返った。

Mの裸身だけが頭上で直立している。

「バンザイ、Mバンザイ、バンザイ」

唐突に祐子のかん高い声が響き渡った。始めて聞く祐子の声だ。

「私はMが大好き。バンザイ、バンザイ、Mバンザイ」

続けて祐子が叫んだ。

「Mバンザイ、Mバンザイ、バンバンザイ」

修太と光男が祐子に和して叫んだ。子供たち全員が目を輝かせ、小さな裸身を震わせて唱和している。

それを見た男たちの裸身が感動に震えた。陶芸屋のペニスが熱く努張っていく。

喉元に込み上げてきた雄叫びを全員が解放した。

「万歳、万歳、M万歳」

男たちの歓声と、子供たちの歓声が元山沢に流れていく。

静かに立ち上がった助役が、ゆっくりと御輿の前に進み出る。両手を一杯に空に伸ばした。

「万歳、万歳、M万歳、元山沢万歳」

モーツァルトの歓喜と悲嘆に乗って、助役の万歳がこだました。

大きく見開いたMの目に、にこやかに笑ってチェロを弾く老住職の顔と、ヴィオラを操る奥さんの顔が見えた。

素っ裸のセンセイが、興奮に震える祐子の裸身を抱き締めている。その回りを修太と光男がうれしそうに飛び跳ねている。

途絶えることのない歓声を耳にしながら、Mはそっと目を閉じた。

両足が踏み締める赤と黒の大皿から、歓喜と悲嘆が交差する確かな手応えを、はっきりと感じ取った。

全員が集い合っているのだと、Mは痛烈に確信した。

完